

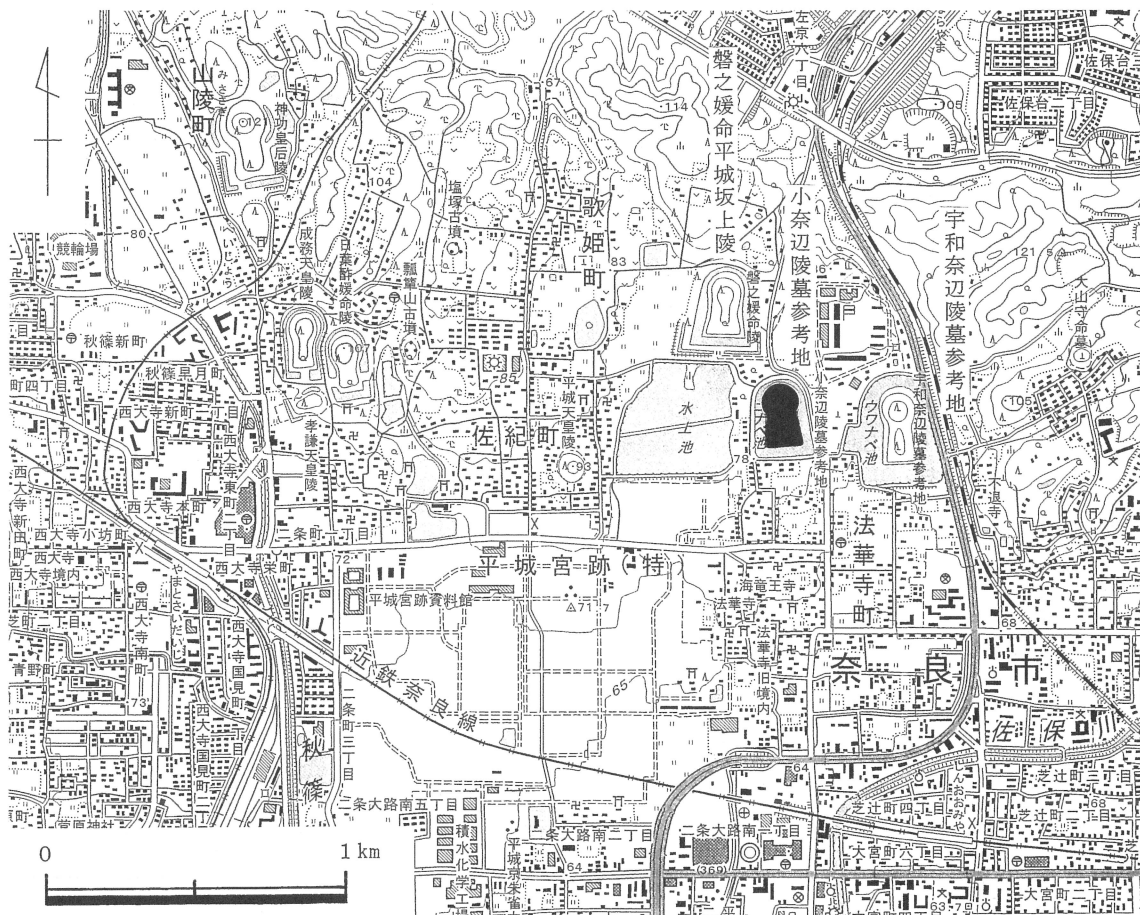
小奈辺陵墓参考地 墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査

はじめに

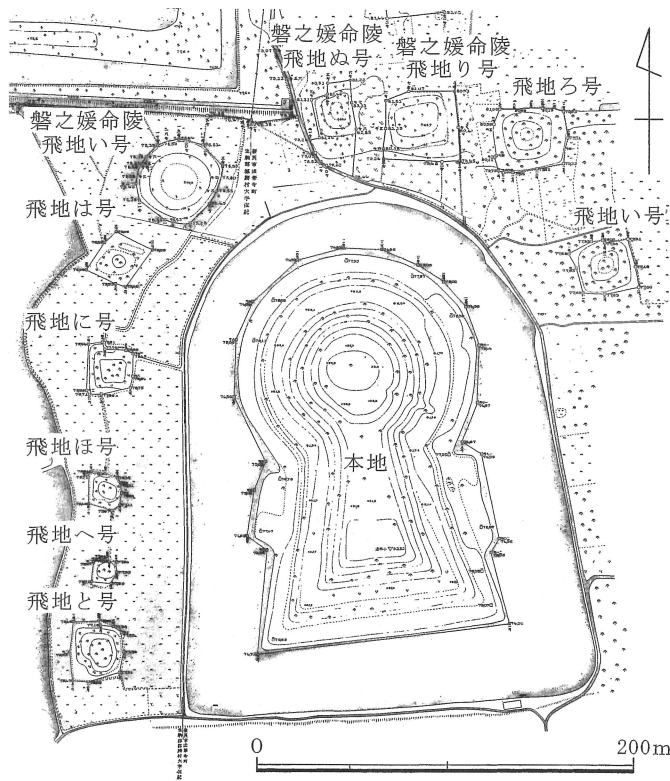
小奈辺陵墓参考地は、近鉄奈良線新大宮駅から北北西へ約 1.5 km の奈良市法華寺町に所在し、一般には「コナベ古墳」の名で知られている。奈良盆地の北縁を画す平城山丘陵の南に連なる段丘上に立地しており、第 16 代仁徳天皇皇后磐之媛命平城坂上陵（ヒシアゲ古墳）、宇和奈辺陵墓参考地（ウワナベ古墳）とともに、佐紀古墳群のうち「東群」と呼ばれるグループの中核をなしている（第 1 図）。盾形の周濠を伴っているが、当庁の管理地は大形前方後円墳である本地およびその周囲に所在する、い号へと号の 7 基の飛地であり、周濠は奈良市の管理となっている（第 2 図）。

当参考地の本地については、宇和奈辺陵墓参考地本地と東西に相対して並んでいる様子から、江戸時代には宇和奈辺陵墓参考地本地を元明天皇の奈保山東陵に、当参考地本地を元正天皇の奈保山西陵に比定する考え方が一般的であった⁽¹⁾。しかし、この考えはいわゆる「文久の修陵」の際に、元明天皇陵碑である「函石」の出土地点や元明天皇の葬地として『続日本紀』に記される「雍良岑」の地名を根拠とした谷森善臣の考証によって否定され、元明天皇陵、元正天皇陵は現在地に治定されることとなった⁽²⁾。この結果、当参考地本地も宇和奈辺陵墓参考地本地も陵墓の治定から漏れることになったが、明治 17 年に当時の所有者である法華寺から献納の願い出がなされ、翌 18 年にともに「御陵墓見込地」として宮内省の所管となり、現在に至っている⁽³⁾。

前方部を南に向ける本地は 3 段築成で、現状で墳長約 202 m、東西のくびれ部にはそれぞれ造出を備えて



第 1 図 小奈辺陵墓参考地 位置図 (1/25000) 平成18年国土地理院発行1:25000地形図「奈良」使用



第2図 小奈辺陵墓参考地 全体図 (1/4000)

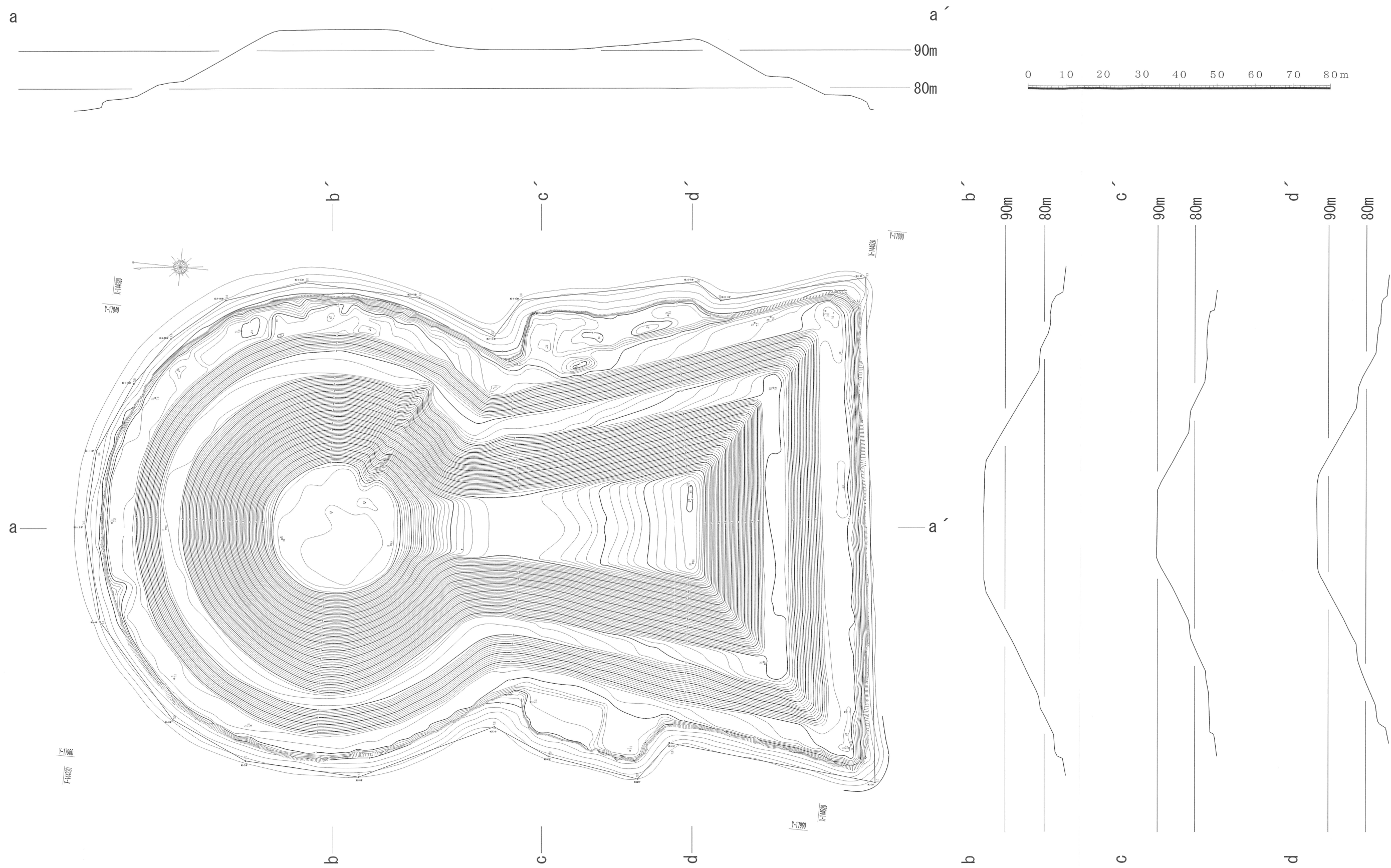
と、また、上面が同一の平坦面ではなく、段差が存在していることが特徴的である。特に造出上面の段差については従来の測量図の精度に問題もあり、これまでほとんど認識されていなかったものと思われる。埴輪列については、東西両造出の縁辺で露出していたものがあるほか、東造出では浸食によって形成されたガマの天井に埴輪列の底面が露出している箇所もある。また、前方部墳頂から後円部墳頂へといたるスロープの西側縁辺で倒木の根起きによって露呈した個体も確認し、回収した(第26図45)。これらのことから埴丘各所の平坦面に埴輪列がめぐっていたのは確実である。なお、いわゆる文化図系統の山陵図には後円部頂に石棺が露出していたとの記述を持つものがあるが⁽⁴⁾、現状では石棺はおろか石棺が露出するような大規模な盗掘坑も見られない。

い号～と号の7基の飛地については、崇神天皇陵、垂仁天皇陵、景行天皇陵、神功皇后陵、磐之媛命陵、宇和奈辺陵墓参考地の各陵墓の飛地と共に、明治25年に編入したものである⁽⁵⁾。末永雅雄による名称との対応を示せば、い号が大和20号墳、ろ号が同18号墳、は号が同22号墳、に号が同23号墳、ほ号が同24号墳、へ号が同25号墳、と号が同26号墳となり⁽⁶⁾、現状からは7基全てが方丘と考えられる。なお、磐之媛命陵飛地い号(大和21号墳)、同り号(同17号墳)、同ぬ号(同16号墳)について、その位置関係から当参考地の陪冢であるとする考えもある⁽⁷⁾。

当参考地においては今回以前に考古学的な調査は行われていなかった。一方、隣接地については、奈良県立橿原考古学研究所や奈良市教育委員会によって調査が行われており、外周部分の姿が明らかになりつつある。本地の南側では、昭和54年に濠内へ転落寸前となっていた外堤の埴輪列が検出されている⁽⁸⁾。東側では、平成9～10年に行われた航空自衛隊奈良基地敷地内の調査において、外堤の外側を区画する「外周区画溝」、外堤上の外側の肩をめぐる埴輪列が検出されており、また、飛地い号については、周濠を持ち一辺約30mの方墳に復元出来ること、埴丘第1段目に埴輪列を持つこと、周濠が奈良時代に苑池として利用されていたことなどが確認されている⁽⁹⁾。西側では、平成20年に飛地と号付近で行われた調査で周濠外側をめぐる溝状遺構、奈良時代の石敷き遺構が検出されている⁽¹⁰⁾。

さて、当参考地本地の埴丘裾は全周にわたって崖状を呈しているが、濠水の波浪による浸食によって、ガ

いる(第3図)。第1段斜面下半部は全周にわたって崖状を呈しているが、それ以外の部分は現状観察による限り遺存状況はかなり良好と見られる。明らかに後世に改変されたと判断される箇所は、後円部南東側に見られる第2段テラスから墳頂部へと一直線に伸びる道の痕跡、後円部北東側第1段テラスから東側造出上面にかけて認められる不規則な凹凸、この凹凸に関連するものなのかは明らかではないが東側造出に接する前方部第1段テラス上に穿たれた深さ1mに達する不整形な穴などがある。後円部第3段は東側が正円に近いのに対して西側が楕円状を呈しているが、露出している葺石の遺存状況からすると人為的な改変によるものではなく、広範囲にわたって埴丘盛土が地滑りを起こしているものと思われる。両造出については後述するが、いずれも通例のものに比べて著しく長大なこと



第3图 小奈边陵墓参考地 填丘测量图·断面图 (1/1000)

マ形成→ガマ上部の崩落→崩落土流出→再びガマ形成、といった墳丘崩壊のサイクルが現在も繰り返している。特に造出はガマの形成が著しく、数mもの奥行きをもつものがあり、既述のようにガマの天井に埴輪列の底面が露出している箇所もある。こうした状況を受け、これ以上の墳丘崩壊を防止するために護岸もしくは墳丘法面保護を目的とする工事が検討されることとなり、それに伴って、工事予定区域内における遺構・遺物の有無、第1段目テラスおよび埴輪列の遺存状況などを確認するための事前調査を実施することとなった。現地での調査は平成21年11月4日に開始し、12月25日にすべての作業を終了した。調査期間中の12月3日には、陵墓管理委員による現地視察を実施し、工法についてのご意見を賜った。また、葺石に用いられている石材の石種については奈良県立橿原考古学研究所・奥田尚氏に鑑定を依頼し、玉稿を賜ったので後掲する。

本調査は、周濠部分を管理する奈良市管財課および法華寺町水利組合のご理解、ご協力無くしては実施することは不可能であった。また、墳丘築造以後の出土遺物の一部については、大和郡山市教育委員会・山川均氏のご教示を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

1 トレンチの設定方法と土層

(1) トレンチの設定方法 (第4図)

トレンチは墳丘各所に計18箇所設定した。

トレンチ設定にあたっては、まず図上で配置を決定し、境界標石および境界線とトレンチとの位置関係を計測、それを現地での測量によって再現するという手法を取ったが、現地の状況によって必ずしも当初計画通りの位置になっていないトレンチもある。各トレンチの呼称については、後円部北側で主軸に沿うように設定したものを第1トレンチとし、以下、時計回りに第2トレンチ、第3トレンチ…とした。

後円部では、主軸上の第1トレンチのほか、後円部中心で主軸と直交するラインに沿ったものを墳丘の東西1箇所ずつ(第3、第17)、後円部中心から主軸の左右におおむね45度振ったラインに沿ったものを2箇所(第2、第18)の、計5箇所にトレンチを設定した。後円部の8分割を想定する場合にはさらに2箇所のトレンチが設定されるべきであろうが、くびれ部に設定したトレンチとの距離が近くなりすぎるために割愛した。第1トレンチについては、第1段テラスと埴輪列の遺存状況を確認することを目的としてテラス上の大部分にかかるように設定したが、ほかのトレンチについては、濠内から第1段斜面の上位あるいは中位付近までの範囲とした。

くびれ部および造出では、東西両側共に、後円部、前方部、造出北辺それぞれが接する箇所(第4、第16)、造出長辺の中間付近のもの(第5、第15)、前方部と造出南辺とが接する箇所のもの(第6、第14)の3箇所ずつの、計6箇所設定した。第5、第15トレンチについては、両造出上の埴輪列の遺存状況を確認することを目的として、可能な限り造出上面にかかるようにトレンチを設定することとした。

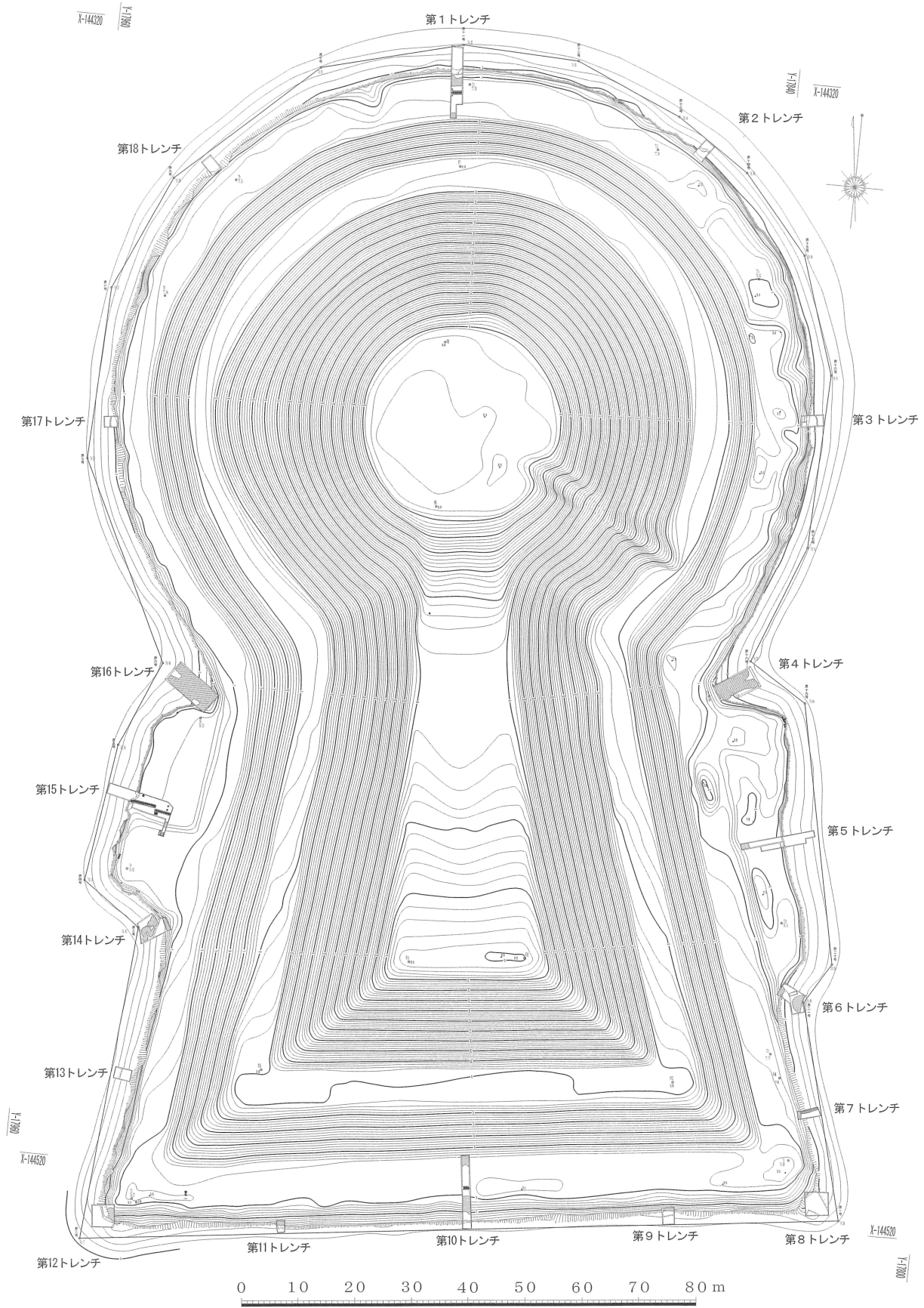
前方部では、正面の主軸上となる位置に1箇所(第10)、東西両隅角に1箇所ずつ(第8、第12)、正面の主軸と隅角との中間付近に1箇所ずつ(第9、第11)、造出南辺と隅角との間の側面に1箇所ずつ(第7、第13)の、計7箇所を設定した。主軸上となる第10トレンチについては、第1トレンチと同様に第1段テラスとその埴輪列の遺存状況を確認するためにテラス上の大部分にかかるように設定したが、ほかのトレンチについては、濠内から第1段斜面の中位あるいは下位付近までの範囲とした。トレンチの規模については、計画段階では長さ10m×幅5mのもの、長さ10m×幅2mのもの、5m四方のもの3種類を予定していたが、樹木等の影響による設定段階での縮小および調査の進行に伴う拡張を行ったトレンチもあり、必ずしも計画通りの大きさとはなっていない。最終的な規模については、各トレンチの記述を参照されたい。

(2) 土層

各トレンチにおいて確認した土層はおおむね以下のように大別できる。

I層 表土。腐葉土および無数の植物の根によって形成される、墳丘上における現状の表土層である。

II層 後世の盛土。その様相からさらに2分できる。II a層としたものは、灰褐色～黄褐色を呈する粘



第4図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ配置図 (1/1000)

質土で、濠内に堆積した土を浚渫し、墳丘上に積み上げた可能性が高いものである。Ⅱ a 層は後円部東北側から東造出にかけての第2、第3、第4、第5、第6の各トレンチ、および第10トレンチで確認されているが、特に後円部東北側から東造出にかけての範囲では厚く堆積しており、この範囲で測量図の等高線が乱れているのはⅡ a 層が積み上げられた結果と考えられる。これに対し、第5トレンチで確認した灰色～暗黄橙色を呈する粘質土層をⅡ b 層とした。Ⅱ b 層は、均質で緻密な土質がⅡ a 層と大きく異なっており、かつ葺石や摩滅した埴輪片を覆っている点などから墳丘盛土とは考えられないものである。なお、第4トレンチの濠内部分で確認した青灰色粘質土層については、濠内堆積土に区分しておいたが(Ⅲ b 層)、護岸等を目的とした後世の盛土である可能性がある。

Ⅲ層 濠内堆積土。崩落した墳丘盛土や地山層が濠水によって洗われ、濠内に再堆積したもの。Ⅲ a 層としたものが一般的な様相を示すもので、灰色の砂層である。粒径が異なる砂層が互層となったり、ところによっては粘質土層や有機物層を挟んだりすることもある。濠内にかかるほとんどのトレンチで確認されている。Ⅲ b 層としたものは第4トレンチの濠内部分でのみ確認したもので、青灰色粘質土が分厚く堆積していたものである。ほかの箇所と大きく様相が異なるために別扱いとした。Ⅲ b 層についてはⅡ層の項で述べたとおり、自然堆積したものではなく人為的なものである可能性がある。Ⅲ c 層はくびれ部に設定したトレンチでのみ確認できたもので、築造後、かなり早い段階で堆積したものと考えられるものである。

Ⅳ層 墳丘崩落土。墳丘が崩落あるいは流出して下方の墳丘上に再堆積したもの、あるいは現在崩落しつつあるもので、埴輪片や転落した葺石を含む。再堆積したものはごく薄い堆積状況であり、濠水の影響を受けていない部分では墳丘の崩落がほとんど起きていないことを示している。

Ⅴ層 墳丘盛土。墳丘の大部分を構成すると考えられる。起源となる地山層の違いによるものか、褐色系、黄褐色系のもなどがあって色調は様ではなく、土質についても小礫を多く含む砂質の部分や粘質の部分もある。盛土されたタイミングにより、埴輪列樹立後に平坦面上に敷き詰められた整地土(Ⅴ a 層)、埴輪列掘方の埋土(Ⅴ b 層)、墳丘本体を構成する盛土(Ⅴ c 層)に分別できる。

Ⅵ層 地山層。様ではなく、砂質土層、礫層、粘質土層、それらが混在する層、あるいはそれらが凝固した非常に堅緻な土層などが見られた。その様相から大阪層群に含まれるものと見られ、墳丘の第1段は大部分が地山の削り出しによるものと思われる。なお、掘削箇所によっては地山層であるのか墳丘盛土層であるのか判断に迷う粘質土層があり、それをⅥ a 層とし、確実に地山層と判断されるものをⅥ b 層としておいた。(有馬 伸)

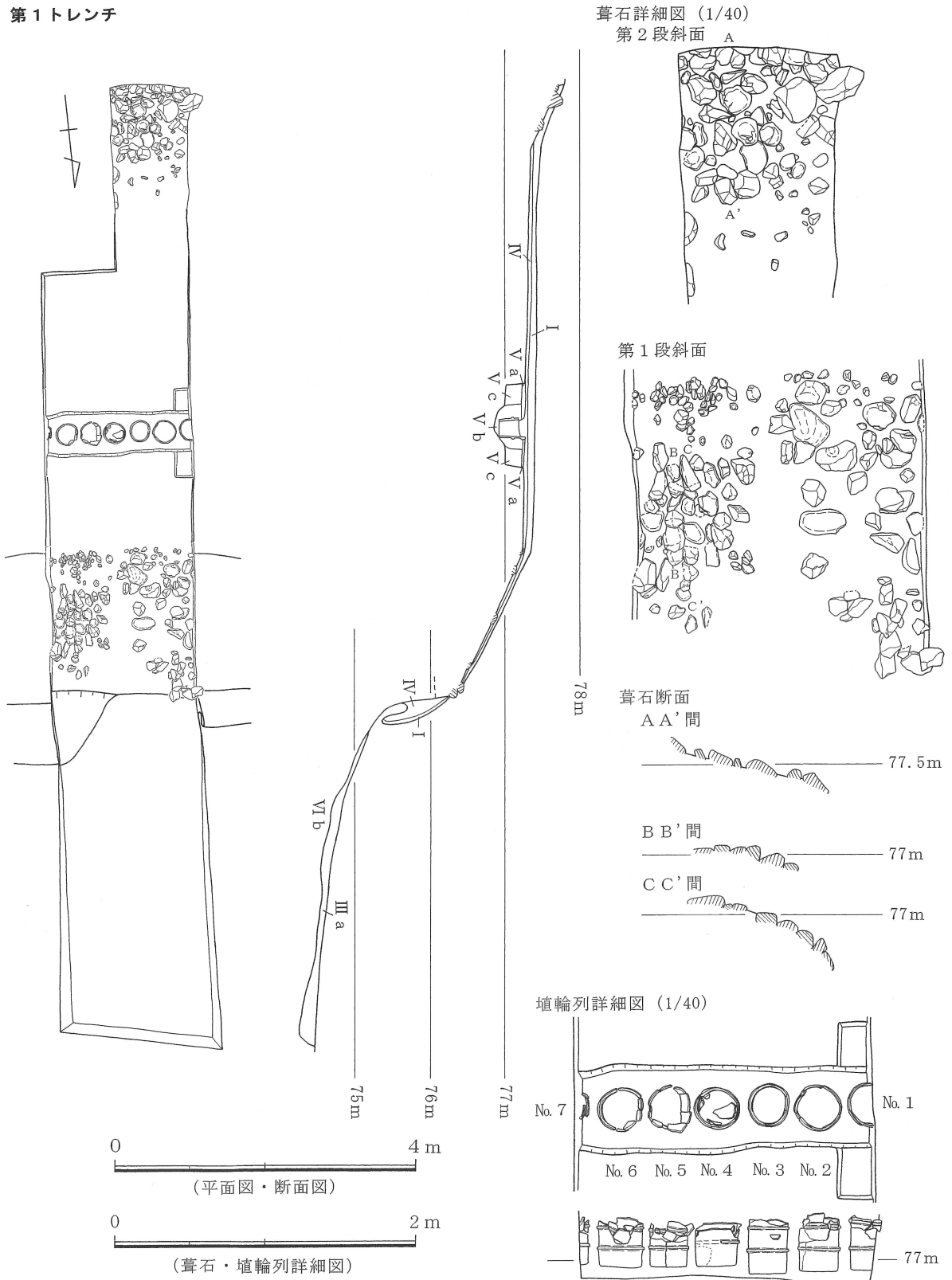
2 各トレンチの概要

(1) 後円部(第1～3・17・18トレンチ)

第1トレンチ(第5図、図版2-1、図版7) 主軸に沿うように後円部北側に設定したトレンチである。周濠内の境界線ぎりぎりのところから第1段テラスにかかるように長さ10m×幅2mで設定したのち、第2段斜面にかかるように長さ2.2m×幅1mで延長した。トレンチ内では第1段斜面葺石、第1段平坦面埴輪列、第2段斜面葺石の各遺構を検出している。

土層の状況は、濠内部分では、厚さ10～15cm程度の灰色砂層(Ⅲ a)の下はすぐに堅緻な黄褐色混礫砂質土層と暗灰色粗砂層が互層をなす地山層(Ⅵ b)で、地山面はだらだらと外方に向けて下降しており、本来の墳裾の位置を確定するような明確な手がかりは認められなかった。第1段斜面は、トレンチ北端から4.4m付近で崖となっているが、崖面に露呈していたのは上記の地山層(Ⅵ b)である。第1段斜面上半の葺石残存部から第1段テラス上にかけては、厚さ5～10cm程度の表土(Ⅰ)下に墳丘崩落土である厚さ2～3cmの灰褐色砂質土層(Ⅳ)があり、その直下が墳丘盛土上面となる明褐色砂質土層(Ⅴ a)あるいは葺石面であった。2段斜面では墳丘崩落土層は介在せず、表土(Ⅰ)直下が葺石面となっていた。なお、本トレン

第1トレンチ



第5図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(1) (1/80・1/40)

チでは浚渫土などの後世の盛土(II)は確認されていない。

第1段斜面葺石は、トレンチ北端から南へおよそ5m付近から同7m付近、標高76.7m付近から77.3m

付近までの範囲で検出した。樹木の根によって移動しているものや抜け落ちている石材が多く、遺存状況は良好とは言いがたい。葺石の上端部分では径数cmの礫が多く認められたが、これは、後述する二層構造のうち下層のものが露出しているものか、あるいは第10トレンチで存在が推定されたテラス縁辺の礫敷き遺構に伴うものかと思われる。葺石の傾斜角は良好な遺存状況ではないため測定場所に左右されてしまうが、トレンチ東半部での2箇所それぞれ約25度、約28度であった。

第2段斜面葺石は、トレンチ南端から北へおよそ1mまで、標高では77.35m付近から77.8m付近までの範囲で検出した。多くの石材は原位置を保っているものと判断されたが、脱落した石材も多いようで、乱雑な印象を受ける。基底石に相当する大振りな石材は見あらず、目地も確認できていない。計測する箇所にもよるが、第2段斜面の傾斜角はおよそ15度となる。第2段斜面葺石下端から第1段斜面葺石上端まで、すなわち第1段テラスの幅は現状でおよそ4.8mとなる。

埴輪列は第2段斜面葺石下端から北へおよそ3.6mの箇所検出した。第1段テラスのうち濠側3/4の位置にあたる。確認した埴輪はトレンチ壁にかかって部分的であったものを含めて7個体で、時計回りにNo.1から7までの番号を付した。埴輪列は、底径22～25cm程度の埴輪を心々間距離35～40cm程度という、密な状態で並べていた。埴輪列の掘方が墳丘盛土上面と考えられる位置では確認できなかったため1.2m×0.2mの規模で断ち割ったところ、厚さ2～3cmに敷かれた平坦面上の整地土(Va)下の地山層(VI)上面から掘方が掘り込まれていることが確認できた。掘方は、上端での幅60cm、最深部での深さ40cmの、断面形が逆カマボコ形に近い布掘りである。No.1～3とNo.4～7では埴輪底面のレベルが異なっており、前者が後者よりもおよそ10cm低い。また、掘方の底面も前者の設置位置の方が深く掘られており、掘方掘削や埴輪設置の作業単位に関わる可能性がある。各埴輪は第2条突帯付近まで埋められていたが、埴輪内部では第1条突帯の高さ近くまで落ち込んでいる破片が認められたので、内部への土の充填は第1条突帯付近までしか行われていなかったものと判断される。

以上の所見から、本トレンチにおける第1段テラス構築順序は、標高77.3m付近で地山を整形→埴輪掘削→埴輪樹立→掘方埋め戻し→平坦面上に化粧土を敷く、といった手順で復元できる。

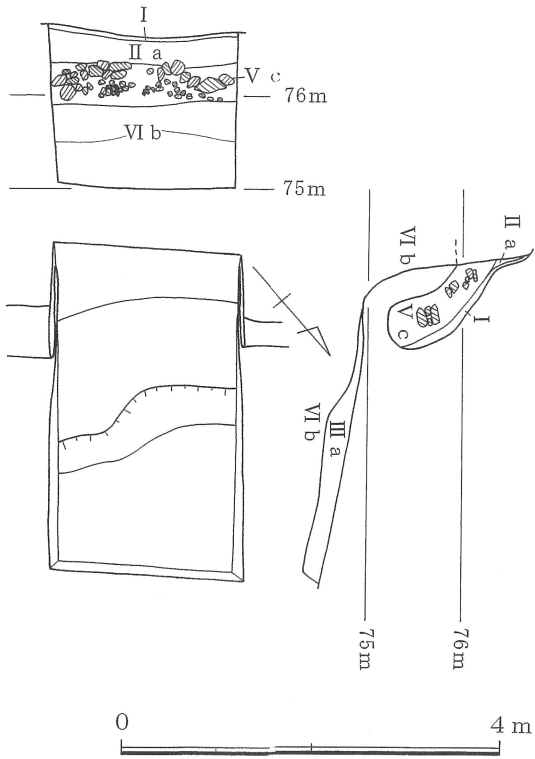
本トレンチにおける出土遺物は埴輪列に伴う埴輪片がほとんどであるが、第2段斜面葺石上で上方から転落してきたと思われる埴輪片がごくわずかながら出土しているほか、第1段テラス上で後世のものと思われる須恵器片が2点出土している。

第2トレンチ (第6図、図版6-1) 後円部中心を基準として、主軸からおよそ45度東に振った方向に設定したトレンチで、後円部北東側にあたる。境界線から第1段斜面崖面に至るまでの長さ3.5m×幅2mで設定し、崩落寸前のガマの天井部を取り除くような形で掘削した。第1段斜面葺石の構造を断面で確認している。

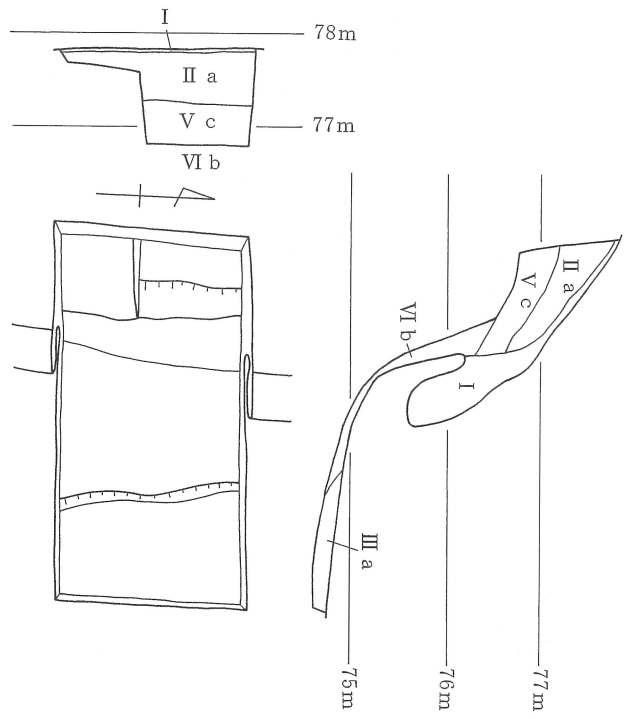
土層は、濠底部分では、厚さ5～30cm程度の暗灰色砂層(IIIa)を除去するとすぐに灰色砂礫層(VIb)に至り、掘削範囲内で本来の墳裾は確認できていない。墳丘側では、向かって奥壁となる南西壁面において墳丘の構築状況を断面観察する形となった。厚さ2～3cm程度の表土(I)下に明灰褐色を呈する粘質土が厚さ30～35cmにわたって認められ(IIa)、その下に葺石材および厚さ30～40cmの墳丘盛土である明褐色砂質土層(Vc)があり、標高75.9m付近を境として以下は地山層(VIb)であった。地山上に厚い墳丘盛土が存在すること、後世に濠内浚渫土を積み上げたと思われる粘質土層が存在していることは第1トレンチと異なる。

南西壁面では葺石も断面観察する形となったが、上半部は長径10cm以上の石材、下半部は径5cm以下の礫と、用いられている石材の大きさによって上下2層に分層することが可能であった。他のトレンチでも上半部に相対的に大振りな石、下半部に小振りな礫を用いるという同様の所見が得られ、少なくとも当墳丘の第1段斜面の葺石は、礫と大振りな石材による二層構造であることが明らかとなった。なお、トレンチの北西側では掘削以前より葺石石材が露呈していたが、それらはガマとなった部分の土砂が流出した際に上方から落ちているものと判断された。

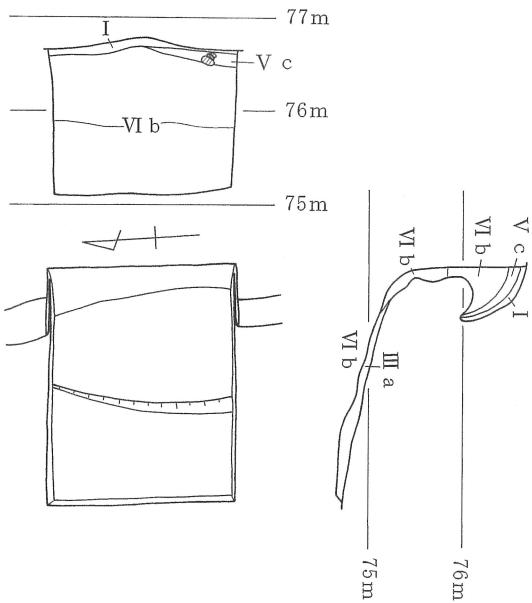
第2トレンチ



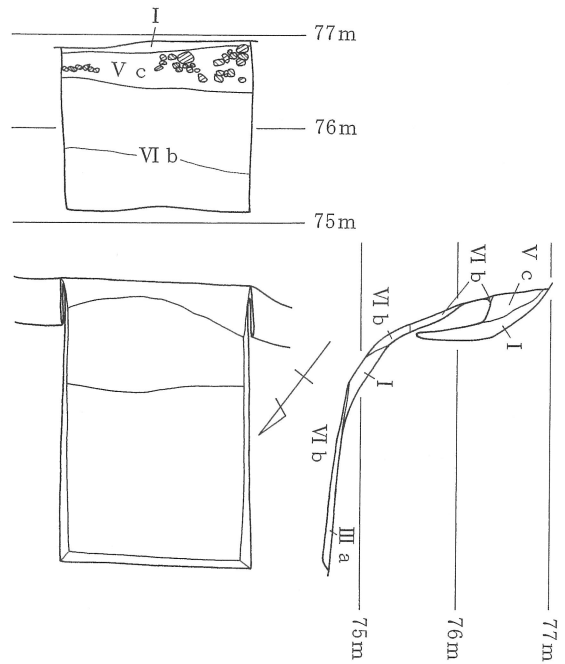
第3トレンチ



第17トレンチ



第18トレンチ



第6図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(2) (1/80)

本トレンチにおける出土遺物はない。

第3トレンチ（第6図、図版6-2） 後円部中心で主軸と直交とする線に沿って設定したトレンチのうち、東側のトレンチにあたる。境界線から第1段斜面中位付近までの、長さ4m×幅2mの範囲を掘削した。土層の状況は、濠底部分は、墳丘側では地山層である灰色から明橙色を呈する礫混じりの砂層（VI b）が露呈していたが、トレンチ東端から西へ1.1～1.4m付近に傾斜変換線があり、以東では灰色砂層（III a）の堆積がみられた。墳丘側では、厚さ2～3cm程度の表土（I）下に灰褐色粘質土が厚さ50～60cmにわたって積み上げられており（II a）、その下は厚さ40～50cmの灰色粘土と黄橙色粘土からなる墳丘盛土（V c）で、標高76.4m付近を境として以下は地山層（VI b）であった。

墳丘盛土上面での葺石材は認められず、出土遺物もなかった。

第17トレンチ（第6図、図版9-1） 第3トレンチと同様に後円部中心で主軸と直交とする線に沿って設定したトレンチで、墳丘の西側のものに当たる。濠から第1段斜面崖面付近までの、長さ2.5m×幅2mの規模で設定した。

土層は、濠底部分では、厚さ～10cm程度の灰色砂層（III a）を除去するとすぐに灰色粘土と灰色砂からなる地山層（VI b）に至ったが、トレンチ西端から東へ1.1～1.2m付近に高低差20cm程度の段差が認められた。掘削範囲内に本来の墳裾は確認されていない。墳丘側では、厚さ4～8cm程度の表土（I）を除去すると、トレンチ南半では厚さ～10cm程度の褐色砂質土の墳丘盛土（V c）が認められたが、北半ではI層直下に黄褐色混礫砂質土層（VI b）が現れた。VI b層の上面は標高76.6～7m付近である。

V層では崩れかけの葺石と思われる石材が少数ながら認められたが、出土遺物もなかった。

第18トレンチ（第6図、図版9-2） 後円部中心を基準として、主軸からおおよそ45度西に振った方向に設定トレンチで、後円部の北西側にあたる。境界線から第1段斜面崖面に至るまでの、長さ3m×幅2mで設定し、崩落寸前のガマの天井部を取り除くような形で掘削した。第2トレンチと同様に第1段斜面葺石の構造を断面で確認することができた。

土層の状況は、濠底部分では、墳丘裾との傾斜変換線付近に厚さ～12cmで黒褐色腐植土（I）が堆積しており、濠側では厚さ～8cm程度の灰色砂層（III）が認められた。I・III層を除去すると堅緻な黄橙色粘質土からなる地山層（VI b）である。墳丘側では、墳丘向かって奥壁となる南東壁面において墳丘の構築状況を断面観察する形となった。厚さ4～10cm程度のI層下はすぐに墳丘盛土である明茶褐色砂質土層（V c）となり、その厚さは30～50cm。V c層の下は灰色粗砂からなる地山層（VI b）で、VI b層上面の標高は76.4～76.5m付近であった。墳丘裾のI層の存在は、この部分の崩落がごく最近にも起こったことを示している。

V c層では葺石が認められたが、上半部は長径20cm以上の石、下半部は径15cm以下の石と礫と、ここでも用いられている石材の大きさによって上下2層に分層することが可能であった。

本トレンチにおける出土遺物はなかった。

（有馬）

（2）くびれ部・造出（第4～6・14～16トレンチ）

造出は、墳丘の東西に認められる。平面形は東西とも現状で台形を呈する。トレンチの所見を記す前に、以下に造出の概要を述べておきたい。

東造出は、濠水の波浪による墳丘の崩落があり、斜面・裾ともに大きく損なわれている。現状は墳丘との接続部付近で南北長さ約52m×幅6～10mを測る。特に長さは、前方部東側面の長さの半分以上を占める。今回の調査の結果、本来の墳丘裾は現在の裾から約5mは濠側に出ることが判明した。墳丘との接続部付近では長さ約58mまで復元できる。上面では、北端と南端に長さ15～20m程度で平面鍵手形の高まりを認めることができ、中央付近が低くなっている。後述のとおり、西造出では高さの異なる平坦面が確認されているため、東造出においても、この高まりが何かしら本来の地形を反映している可能性が考えられよう。造出上面と前方部第1段テラス面の比高は、正確な数値は不明だが、1m以上ある。

なお、トレンチ内では埴輪列を検出していないが、東北コーナーで露出した埴輪列を確認している。

西造出は、東造出と同様に、濠水の波浪による墳丘の崩落があり、斜面・裾ともに大きく損なわれている。現状は墳丘との接続部付近で南北長さ約38m×幅約12mを測り、東造出よりは短い。今回の調査の結果、本来の墳丘裾は現在の裾から約5mは濠側に出ることが判明した。墳丘との接続部付近での長さは約42mまで復元できる。上面は、北半部に現状で長さ約20m×幅約10mの長方形を呈する平坦面、南半部に造出上面より約0.5m高い位置に長さ約10m×幅約10mのほぼ正方形を呈する平坦面が確認される。南半部の平坦面は墳丘第1段テラス面と一連の面を形成している。つまり、平面的には造出に収まっているものの、レベルは墳丘本体のテラス面と一体である。また、平坦面はそれぞれに埴輪列による区画をもつ。

このように東西の造出しは、平面的にも立面的にも構造の異なることが知られる。

墳丘東側

第4トレンチ（第7図、図版3-1、図版10・11）本トレンチは、長さ7.5m、幅3mの規模で設定したものを、最終的に造出寄りの濠側を長さ4.5m、幅1mほど拡張した。東のくびれ部にあたり、第1段斜面を検出した。くびれ部最奥の斜面は残存状況が良好で、トレンチ西壁に潜り込み第1段テラス面に続くと考えられる。一方、後円部側（北壁）と造出側（南壁）に向かう斜面は、裾からおおむね40～50cmの立ち上がりを残すのみで、それより上方は経年の濠水による浸食で失われている。くびれ部の形状は、裾が最奥部から長さ約3m、幅0.4～0.5mの溝状を呈し、それから後円部、造出に向かって広がっていく。

なお、後円部側の斜面については、調査の過程で裾に近い斜面途中で平坦面が設定されている可能性も考えられたが、最終的に断ち割りを行った結果、下に本来の葺石面を検出した。よって、一部に未掘部分がある。

層位は、西壁において表土（Ⅰ）の下に黄褐色の盛土（Ⅱa）が確認できる。厚さ約0.5mで均質であり、第5トレンチのⅡb層と同様の性格である可能性も考えられる。濠内にあたる北壁では、表土の下に青灰色粗砂主体の濠内堆積土（Ⅲa）となる。その下に、厚く青灰色粘質土（Ⅲb）が認められる。葺石直上には、直接覆うごく初期の流土が堆積したことが想定されるが、断面では区別できなかった。かろうじて、くびれ部最奥部付近の床面直上に一部黒色を呈する滞水層かと思われる粘土（Ⅲc）が認められたが、範囲はごく狭いものである。

遺構は、墳丘第1段斜面の葺石を検出した。最奥部付近の溝状になった部分は、幅が非常に狭いためか床面にも石が敷き詰められたような状況となっている。この部分の石の重なりを見る限り、後円部側の葺石がやや先行して設置されたと考えられる。東壁から約0.3m付近の造出裾に沿って、0.3m×長径0.5mほどの規模に石を並べた円形状の区画らしきものが認められた。葺石の裾がずれただけかもしれないが、遺物もなく明確な遺構とするには根拠に乏しいが、くびれ部という場所を考慮して可能性を指摘しておく。溝状部分の床面レベルは標高約74mで、ほぼ高さは一定であるが、広がり始めるところから次第に低くなっていく。溝状部分は比較的大きな石が主体的に使われているため、基底石が特に大きいわけではない。葺石は、長径30～40cmの石材を主体としており、その隙間を色々な大きさの石で埋めている。目地も認められ、くびれ部の最奥部裾を起点に後円部側と造出側にV字状に設置されていることが確認される。また、造出斜面においても明瞭な目地が認められる。さらに、造出斜面が濠水の浸食により削平されていることにより、長径30cmを超える石材を使った葺石面の下に、直径5cm前後の礫が敷き詰められているという、葺石の2層構造を本トレンチにおいても確認することができた。

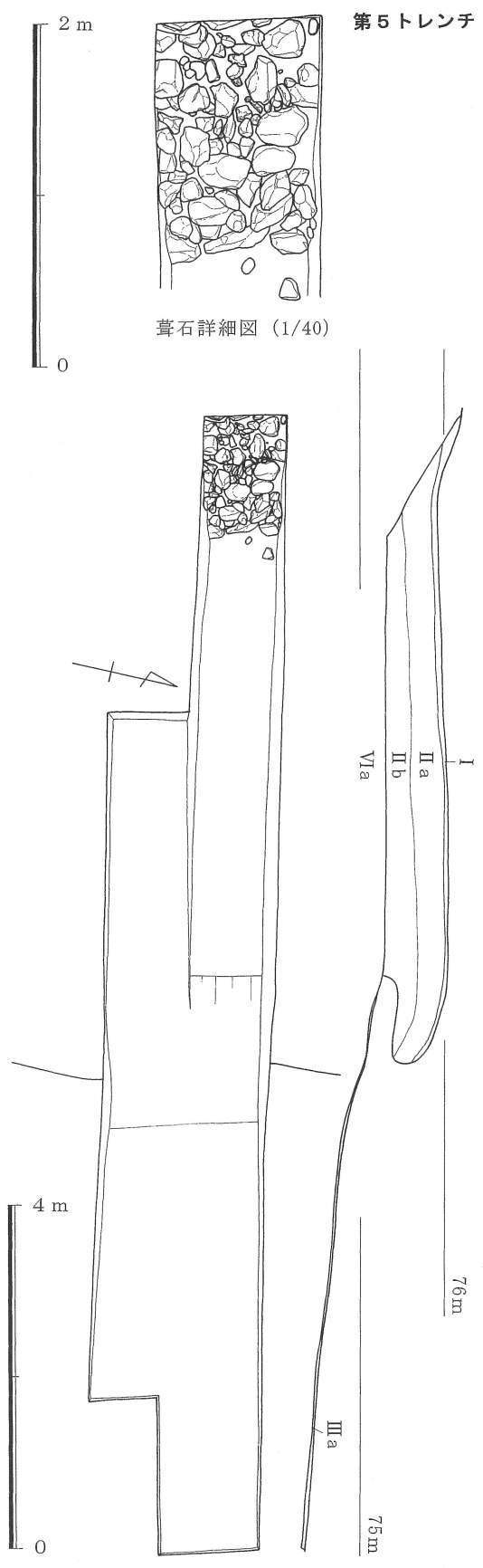
遺物は濠内堆積土や崩落した葺石に絡んで埴輪片が多く出土している。少量の形象埴輪片のほかに、僅かに土器片も認められる。また、陶器片・瓦片も出土している。原位置の埴輪などは出土していない。

第5トレンチ（第8図、図版2-2、図版12）本トレンチは、当初長さ10m×幅2mで設定した後に、墳丘側に長さ3.4m×幅1m、濠側に長さ1.8m×幅1mほど拡張して、最終的に長さ15.2m×幅1～2mの規模とした。新たに作成した測量図（第3図）をみると、北端と南端付近が高まり中央付近がもっとも低くなっているが、その低くなった平坦地にあたる。前方部第1段斜面と造出上面と思われる平坦面を検出した。

層位は、濠側で境界線までトレンチを延ばしたが、現状の裾から境界線までの間は、わずかな濠内堆積土



第7図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(3) (1/40)



第8図 小奈辺陵墓参考地
トレンチ平面図・断面図(4) (1/80・1/40)

(III a) を除去すると、すぐに暗黄褐色粘質土 (VI a) が検出されるような状況であった。検出されたこの面は緩やかな傾斜である。

造出上面は、掘り下げた結果、表土 (I) の下に厚さ 0.3 ~ 0.4 m で濠の浚渫土と考えられる暗灰褐色粘土 (II a) が堆積している。さらにその下に、厚さ 0.3 ~ 0.4 m の土質が極めて均一な灰色 ~ 暗黄橙色粘質土が認められた (II b)。これらの土層を掘り下げる過程で、前方部第 1 段斜面の葺石を検出したが、上記土層をすべて掘り下げたところで、葺石の基底に到達した。そして、その基底石と一致するレベルで基底石から濠側に 5 m の範囲が水平な平坦面として検出され、3.5 m の位置で埴輪と考えられる細片が出土している。また、この面は濠内で検出された暗黄褐色粘質土と一連の面となっている。葺石基底とレベルが一致する水平面であること、遺物が出土したことなどから、この平坦面が東造出上面と判断できる。よって、現在の裾より濠側で緩やかな傾斜をもつ面は、波浪のため削られた結果と考えられ、本来は造出上面が続いていたと考えられる。さらに、境界線まで本来の造出斜面と考えられる傾斜が確認されないことから、本来の造出斜面と裾は境界線より東側に位置すると考えられる。

遺構は、前方部第 1 段斜面の葺石が検出された。基底から長さ 1.4 m × 幅 1 m の範囲である。長径 30 ~ 40 cm の大形の石を主体的に使用して、隙間を小形の石で埋めている。検出範囲内で目地は確認されない。基底石はきれいに並び、明確に裾を示している。ここでは、葺石の残存状況が良好なため、礫による下層の葺石は観察できない。斜面の傾斜は約 30 度である。

遺物は少なく、表土で瓦片が出土した以外は、すべて埴輪である。その他は、葺石面か造出上面から少数出土したのみである。形象埴輪を含んでいない。造出上面であれば、当然存在が予想される埴輪列は検出されていない。

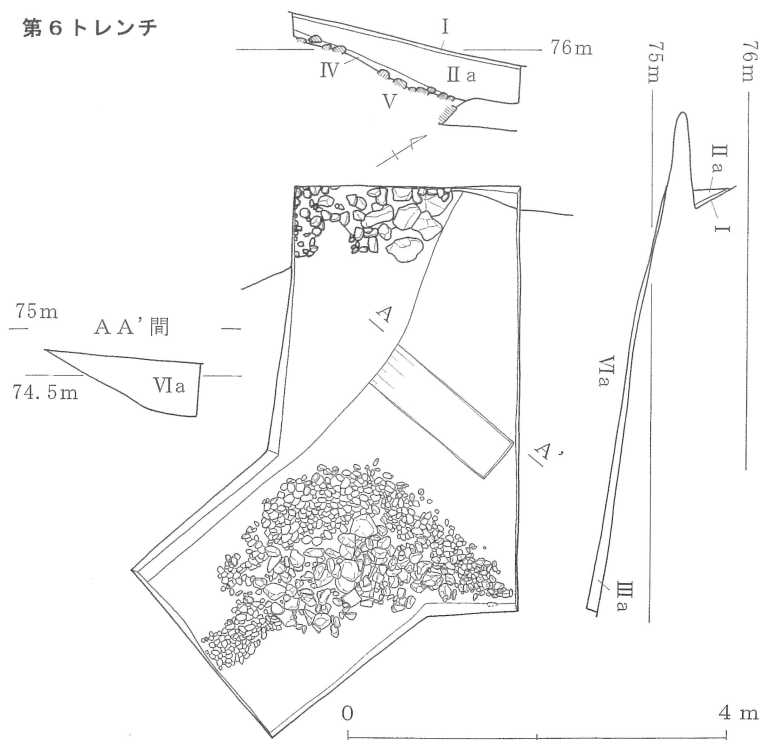
第 6 トレンチ (第 9 図、図版 3-3、図版 13) 本トレンチは、長さ 4.5 m × 幅 2 m で設定したのち、葺石が検出されたことにより、前方部に向かう境界線沿いに長さ 2.5 m × 幅 2 m を拡張した。その結果、トレンチの形状は逆「く」の字形となった。東造出南端が前方部に接続する屈曲部にあたり、トレンチの一部は現状の前方部第 1 段斜面にかかっている。前方部第 1 段斜面と造出斜面を検出した。層位は、埴丘側では表土 (I) の下に浚渫土 (II a) を確認した。一方、濠側は濠内堆積土 (III

a) が数cm～10cm程度の厚さで認められるのみで、すぐに第5トレンチで検出されたものと同じ暗黄褐色粘質土(VIa)に至る。濠内堆積土を除去した床面が残存する墳丘面であるが、濠側と墳丘側で土質が異なっており、その境界線は前方部の葦石面の背後をほぼ直線的に東造出に向かって。濠側は第5トレンチ床面と一連の土層であり、墳丘側は灰色を呈する堅緻な混礫砂質土である。最終的に両者の性格を明らかにするために土質の境界線から濠側に、長さ1.6m×幅0.5m×深さ約0.6mの規模で断ち割りを行った。その結果、混礫砂質土層は約30度の傾斜面で濠側を下ること、土質は下方においても明瞭に区別されることが判明した。後述するが、この混礫砂質土層は地山(VI)と考えてよいと思われるが、暗黄褐色粘質土は墳丘盛土(V)という確証がえられておらず、当面VIa層としている。しかし、第5トレンチ西端で検出した前方部第1段斜面の葦石の傾斜角度も同じく30度であることは興味深い一致といえよう。

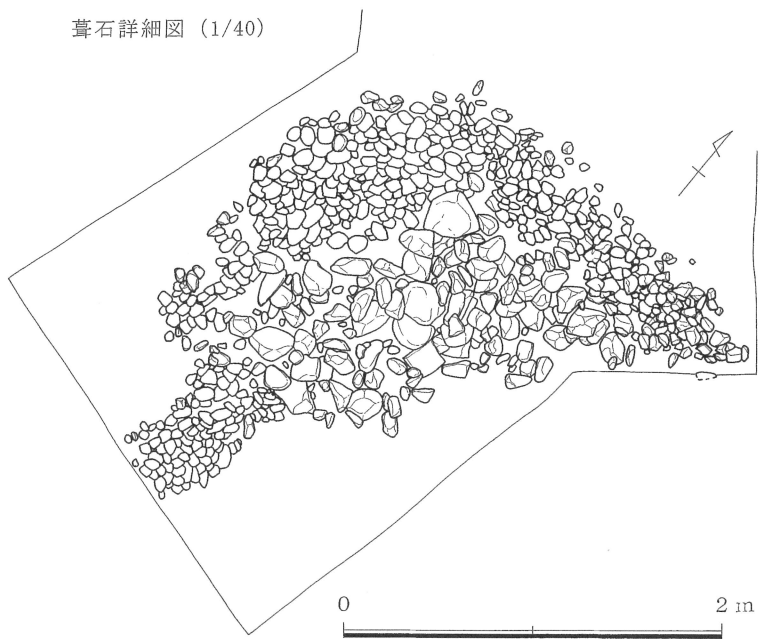
遺構は、前方部第1段斜面と造出斜面の葦石を検出した。濠水の波浪で、本来の斜面の多くが崩落しているため、墳丘側となる西壁沿いの葦石と、濠側で検出された屈曲部の葦石に分かれる。墳丘側の葦石は、長径30～40cmの石に絡むように礫が認められる。この葦石の直下は波浪により約1m奥まで抉れているため、検出した葦石は既に原位置を留めていない。礫は2重の葦石の下層であり、上層の大形の石が動いたことにより露出したものであろう。

濠側では境界線沿いに長さ約2.5m×幅約1.8mの範囲で葦石が残存していた。残存範囲の中央付近に目地があり、それを挟んで葦石面が屈曲することから、造出と前方部の接続箇所であることがわかる。ここで確認された石は大きいものでも長径30cm程度であり、やや小振りである。石は少なからず動いているようであり、本来の葦石面はそれほど残っていないようである。そのため下層の礫が明瞭に確認できる。基底石

第6トレンチ



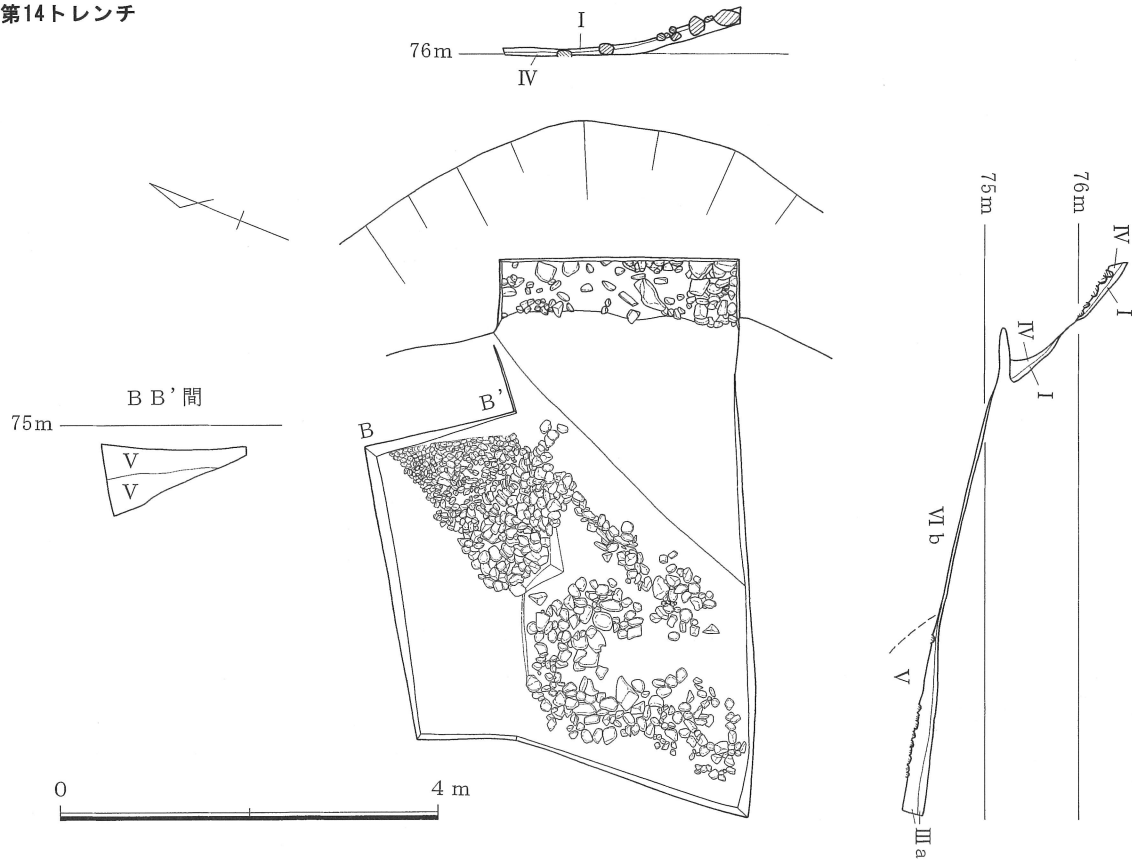
葦石詳細図(1/40)



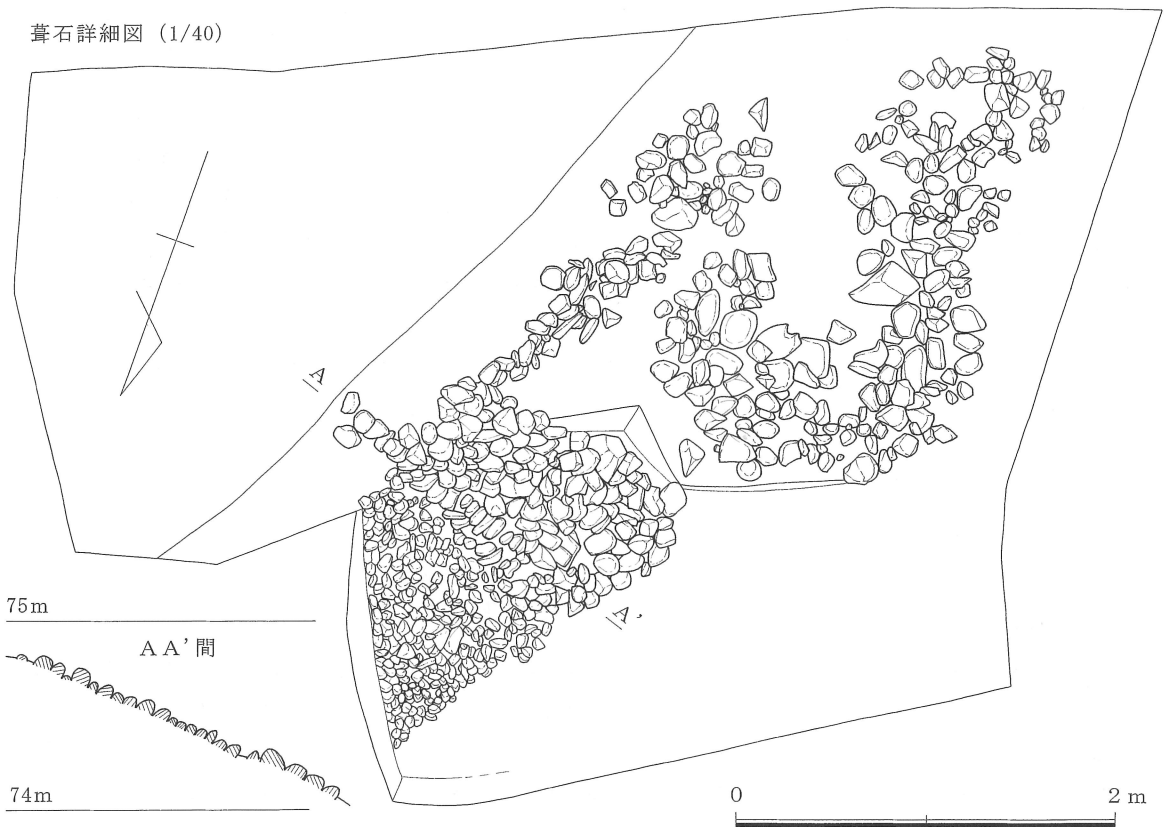
第9図 小奈辺陵墓参考地

トレンチ平面図・断面図(5)(1/80・1/40)

第14トレンチ



葺石詳細図 (1/40)



第10図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(6) (1/80・1/40)

がはっきりせず、境界線に接しているため裾の位置は不明瞭であるが、目地の下端が標高約 74 m であり、他のトレンチで確認された高さ比べて齟齬はないため、おおむね裾は検出されたとみられる。

遺物は少なく、すべて円筒埴輪片である。濠内堆積土や葺石直上で出土している。

墳丘西側

第 14 トレンチ (第 10 図、図版 14) 本トレンチは、長さ 5 m × 幅 2 m の規模で設定した。その後葺石が確認されたことから、造出側に幅 1 ~ 1.5 m 拡張した。また、濠側も境界線に沿って三角形に拡張している。よって、トレンチの平面形は多角形状を呈する。西造出南端が前方部に接続する屈曲部にあたり、トレンチの一部は現状の前方部第 1 段斜面にかかっている。前方部第 1 段斜面を検出した。

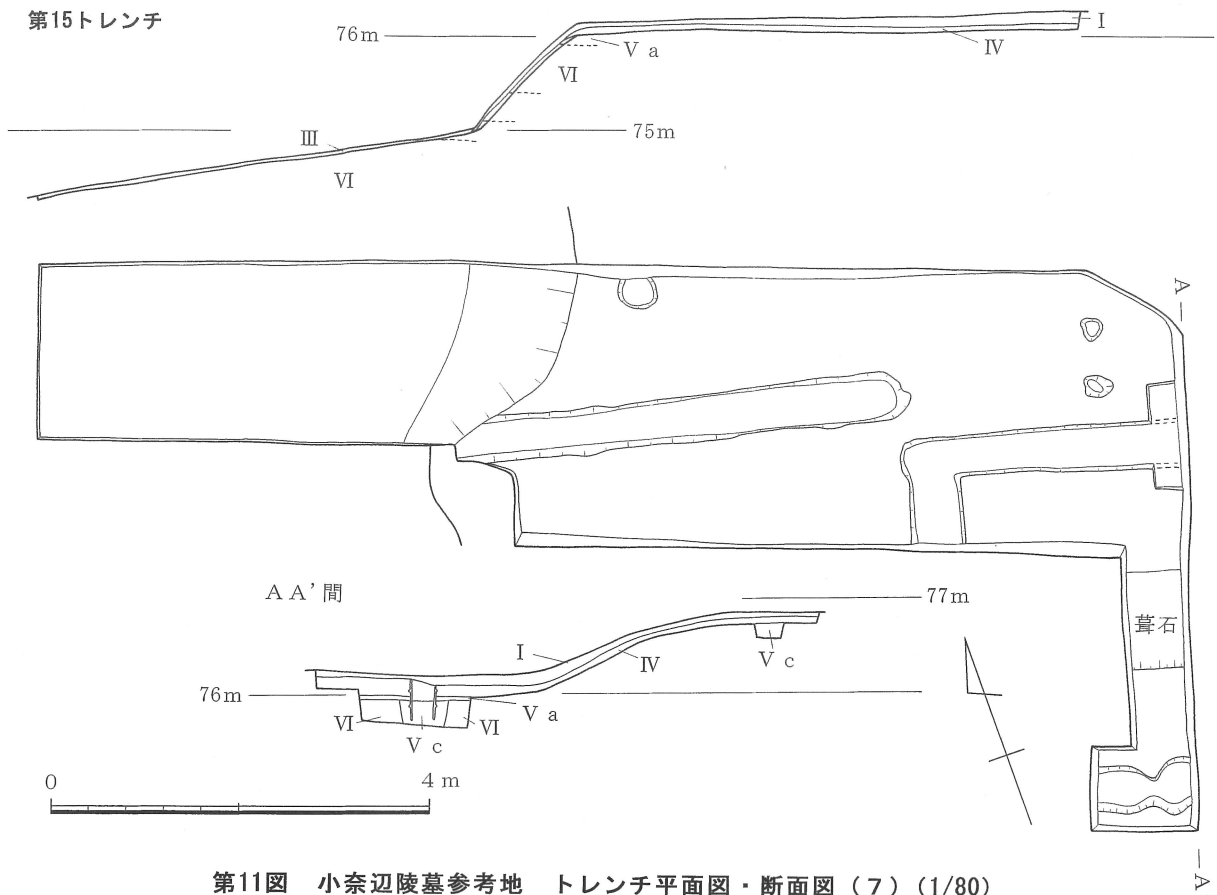
層位は、墳丘側では表土 (I) の下に墳丘崩落土 (IV) を確認した。厚さは 2 層分でも 10 ~ 20 cm ほどで葺石面に到達する。一方、濠側も濠内堆積土 (III a) が 10 ~ 20 cm 程度の厚さで認められるのみで、すぐに葺石面に到達する。葺石面の下は墳丘盛土であるが、それほど厚いものではなく、標高約 74.2 m で地山が検出される。

遺構は、前方部第 1 段斜面の葺石を検出した。拡張前の状態で濠内堆積土を除去したところ、まず濠側から奥行き約 1 m の範囲で葺石が検出された。ここでは、長径 20 cm ほどの石が中心となっており、他のトレンチと比べて小さめである。目地は認められず、石そのものも少なからず動いており、本来の葺石面を良好に残しているとはいえない。葺石面の角度も約 10 度であり、波浪による影響は大きいと考えられる。また、下層の礫の存在も明確ではない。しかし、葺石の範囲は前方部と西造出との接続部の地形に沿って屈曲しており、検出範囲の裾の高さが標高 74.1 m であることから、他のトレンチで確認された裾の高さとほぼ同じである。現在の境界線付近が本来の墳丘裾の位置と考えられる。墳丘側では長さ 0.5 m × 幅 2 m の範囲で葺石を検出したが、南端付近で比較的遺存している以外は、既に多くの石が転落しているような状況にある。

ところで、本トレンチの葺石は他のトレンチでは認められない構造がみられた。上記の葺石を検出した時点で、葺石周辺部は波浪により削られた状態にあった。この葺石検出範囲の西端から北に向かって、直線状に石の続く状況が見られ、その東側を 0.3 ~ 0.4 m 離れた位置で、石に沿って平面的に土質の違いが確認された。葺石側が黄褐色粘質土 (V) で、墳丘側が灰色混礫砂質土 (VI b) である。第 7 トレンチの排水溝の存在から、当初はその掘方かとも考えて一部を掘り下げたところ、下から新たに葺石が確認されるところとなった。明らかに、南側は上記の葺石の下に潜り込む状況にあり、また北側は西造出の下に続く状況にある。南北ともどこまで続くかは不明であるが、南側は上部の葺石面近くまで接近するため、どこかで一体となる可能性が考えられる。葺石は検出範囲のほぼ中央に目地が確認できる。目地を境に前方部側は直径 10 ~ 15 cm 程度の石が、非常に密で突き込むように葺かれている。一方、西造出側は長径 5 cm 程度の礫を中心としており、様相が異なる。裾は標高約 74 m 付近まで検出している。他のトレンチで確認されている本来の墳丘裾の高さよりわずかに低く、もう少し下まで石は続くようであるが、湧水でトレンチ壁崩壊の危険があったため確実な裾は未確認である。斜面の傾斜は約 25 度である。

この葺石は、葺石面と背後の土質の境界線がきれいに平行するため、墳丘側の灰色混礫砂質土を削り出して成形した後、黄褐色粘質土 (V) による盛土を行い、構築されたと考えられる。灰色混礫砂質土は地山 (VI b) である可能性が高いと考えられる。他のトレンチの土層の状況を参考にすると、第 15 トレンチでは地山 (VI b) が確認されているため、西造出は基本的には地山整形で造られたと考えられるが、少なくとも本トレンチ周辺 (西造出南端付近) については盛土で形成されていると考えられよう。葺石は、最終的には西造出の下に埋没しているが、当初から埋没することを前提に構築されたのか、築造工程の変更などにより、結果的に埋没したのかは不明である。

なお、他のトレンチでも確認されている 2 重構造の葺石下層部分とも考えられるが、斜面の角度が異なり、明らかに間に盛土が入っていることから、本トレンチの状況のみでは、下層部分にあたる葺石とは確定できない。また、このような葺石が墳丘第 1 段斜面全体を覆っていたかどうかについても不明である。東造出南端に設定した第 6 トレンチでは、先述のとおり葺石の背後に平行する土質の違いが確認され、断ち割りを行っ



第11図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図（7）（1/80）

たが、葺石は確認されていない。

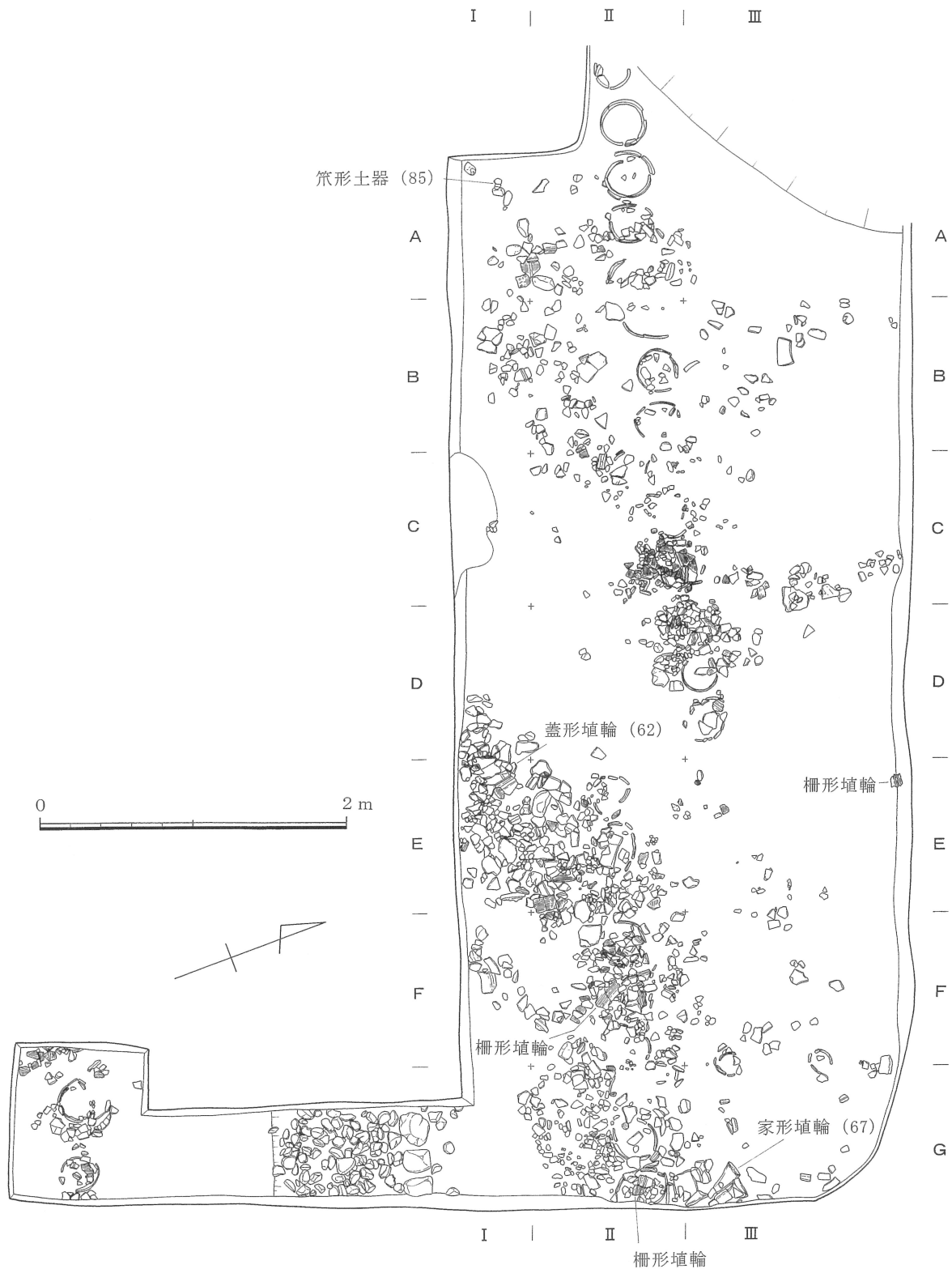
遺物は少なく、表土から瓦片、上部の葺石面の上から埴輪片少数が出土している。（清喜裕二）

第15トレンチ（第11～13図、図版4・15～18）本トレンチは西側造出の中央付近に設定したもので、当初は長さ10m×幅2mの規模であったが、南壁に後述の埴輪列がかかったため、造出上面の長さ7mの部分については1mほど拡幅した。さらに調査の進展にともない南側の一段高い部分の状況を把握しておく必要がでてきたことから、トレンチの東端において本体とは直交方向に南側に長さ3m×幅0.6mの拡張をおこなったところ、一段高い部分の埴輪列を検出したため、拡張区の南端部分を長さ0.8mの範囲において幅0.4mほど拡幅した。また、濠側についても境界線いっぱいまで長さ2mほど延長した。

基本的な層序は墳丘側では上から表土（I）と墳丘崩落土（IV）のみで、地表面から約20cmで墳丘盛土層（V a）となっている。濠側では濠内堆積土（III a）がわずかに確認できるのみで、その直下が地山（VI b）となっている。第15トレンチは造出上面ということもあり、面的にトレンチを設定して掘り下げた結果、広範囲で埴輪片が出土したことから、多くの埴輪が原位置を保って遺存していることが考えられた。そこで東西を1mごとにA～Gとして七分割し、南北をI～IIIとして三分割することで計21のグリッドを設定して、各グリッド内をさらに分割して原位置ではない埴輪片を取り上げた（第12図）。

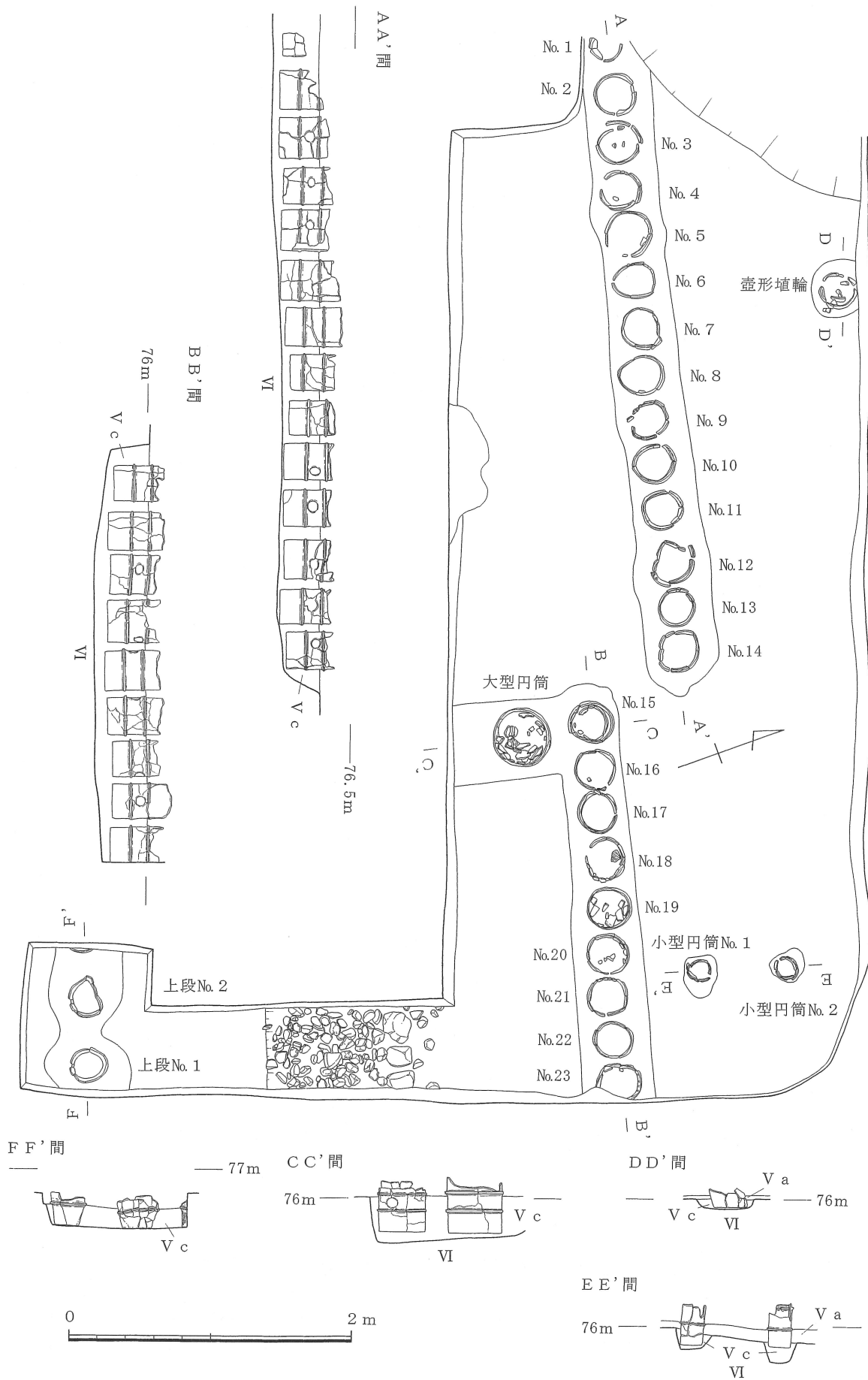
取り上げ時の記録や整理作業時の記録をもとにして、原位置ではない埴輪のおおまかな出土位置の傾向について述べておくと、柵形埴輪の破片はF～G区、蓋形埴輪の破片はIE区・IIE区、家形埴輪の破片はIIG区・IIIG区に多かった。これらの形象埴輪については残念ながらすべて原位置を保っておらず、後にふれるように蓋形埴輪が大型円筒埴輪の上に載せられていたこと以外は不明といわざるをえない。

原位置ではない埴輪片を取り上げた結果、散乱した原位置ではない埴輪片の下面に東西方向にのびる埴輪列を確認することができた。この埴輪列は一行ではなくトレンチ中央付近で食い違う部分があり、冪形埴輪の出入口を想起させる。また、この埴輪列には朝顔形埴輪が含まれず円筒埴輪のみで構成されていたようで



第12図 小奈辺陵墓参考地 第15トレンチ 遺物出土状況図 (1/40)

あり、食い違い部分よりも西側でNo. 1～14の円筒埴輪14本が確認でき、東側ではNo. 15～23の円筒埴輪9本と食い違い部分の南側に大型円筒埴輪1本の計24本の円筒埴輪が調査範囲内で確認されている(第13図)。この埴輪列は造出上面の埴輪列の食い違い部が通常は墳丘側面側に設けられることとは異なったあり方を示している。これはおそらくこの埴輪列に平行して南側に存在している造出内における高まりの段差と関係し



第13図 小奈辺陵墓参考地 第15トレンチ 埴輪列検出状況図 (1/40)

ているものと考えられる。なお、ちょうど食い違い部分にあたるNo.15では、その内側にさらに径の小さい円筒埴輪が入れ子状に納められていたが、その意図は不明である。また、その南隣の大型円筒埴輪には上に蓋形埴輪が載せられていたことを確認できた。

なお、この埴輪列の北側では周濠に近い部分で壺形埴輪、墳丘寄りの部分で小型円筒埴輪2個体がそれぞれ原位で確認されている。また、埴輪列と平行して存在している高まりの斜面には墳丘と同じく葺石がほどこされており、1段高い平坦面では埴輪列が確認されている（上段埴輪No.1・2）。この葺石は人頭大の基底石をもち、基底石より上には握り拳程度の大きさの石をもちいている。食い違い部分をもつ埴輪列の面（下段）と上段では比高差が約70cmあるが、葺石をもつことや上段でも埴輪列をとまなうことから、地形図からも読み取れるこの同一造出内における段差は築造当初のものであることが確実となった。このように立体的に複雑な造出をもっていることが判明した点は大きな調査成果といえる。なお、この上段でもちいられている円筒埴輪は下段の円筒埴輪に比べて直径が小さくなっている点と第1条突帯まで埋められている点の下段の埴輪と異なっており特徴的である。

下段の埴輪列は布掘状の掘方をともなっており、基本的に内側にも土が充填されていたようである。また、掘方や内側を土で埋め戻した後にさらに化粧土状の墳丘盛土を円筒埴輪の外側にほどこしていたことが確認できる。そして、最終的には第2条突帯あたりまで埋められていたようである。なお、大型円筒埴輪については内側の底面付近において上に載せられたと考えられる蓋形埴輪の立飾り部の軸部分が出土しており、内側に土は充填されていなかったものと考えられる。蓋形埴輪が載っていたために土を充填できなかったものと考えられる。こうした点を考慮にいと、埴輪の設置と墳丘構築作業（主に仕上げの作業）は同時並行でおこなわれていたものと思われる。なお、単独で設置された埴輪については壺掘状の掘方をともなっていることを確認している。

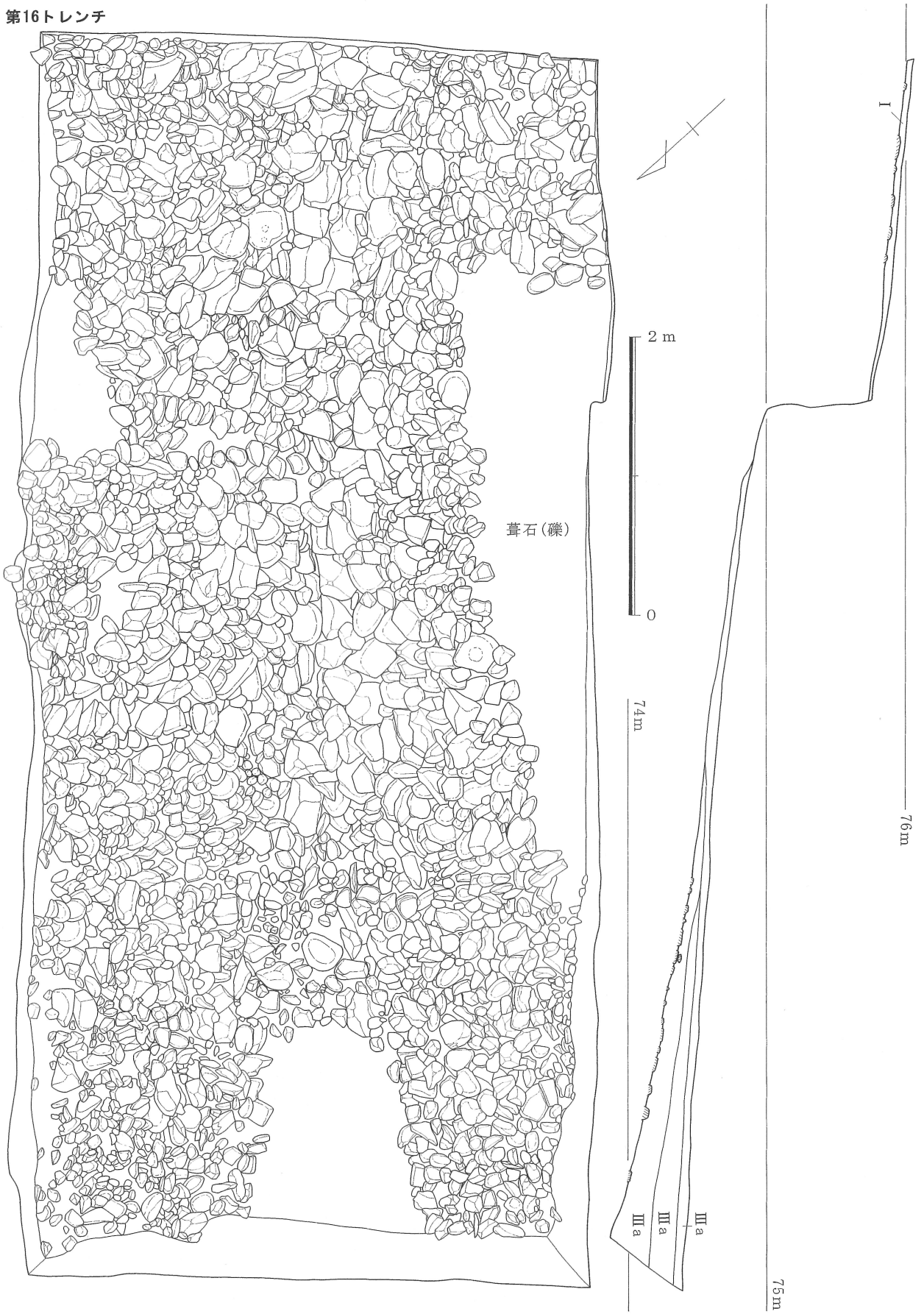
（加藤一郎）

第16 トレンチ（第14図、図版3-2、図版19・20）本トレンチは、長さ8.8m、幅4mの規模で設定した。西のくびれ部にあたり、第1段斜面を検出した。くびれ部最奥の斜面は残存状況が良好で、トレンチ東壁に潜り込み第1段テラス面に続くと考えられる。東壁はほぼ表土のみであり、葺石が一部頭を出しているような状況である。第1段テラス面まできれいに続く状況が窺え、葺石の天端が残っている可能性が高い。一方、後円部側（北壁）と造出側（南壁）に向かう斜面は、裾からおおむね50～60cmの立ち上がりを残すのみで、それより上方は経年の濠水による浸食で失われている。くびれ部裾の形状は、第4トレンチでは溝状を呈する特異ともいえる状況だったが、本トレンチは最奥部からそのまま後円部、造出に向かって広がっていく。層位は、表土（Ⅰ）の下に灰色～青灰色の粗砂を主体とする濠内堆積土（Ⅲa）が認められる。第4トレンチと同様に築造後間もなく葺石を覆ったと考えられる流土は明確には認識できない。最奥部の床面直上に滞水層と考えられる黒色粘土（Ⅲc）が検出された。

遺構は、墳丘第1段斜面の葺石を検出した。最奥部の床面レベルは標高約73.6mで、床面は平坦ではなく次第に低くなっていく。葺石には比較的大形の石材が主体的に使われているが、それが基底石に意図的に使われている状況は認められない。長径30～40cmの石材を主体としており、その隙間を色々な大きさの石で埋めている。石は、かなりしっかり斜面に突き込むように葺かれている。目地も認められ、特にくびれ部最奥の床面を起点として設定されている目地が顕著である。第4トレンチでは、後円部斜面と造出斜面の間に明瞭な前方部側面に相当する斜面が認められたが、本トレンチは特にくびれ部最奥の斜面上方において、大形の石を3列程度並行させることで形成された幅0.7mほどの目地を境に、後円部斜面と造出斜面に速やかに移行しているため、明瞭な斜面が認められない。長径30～40cmの比較的大形の石材は、この目地付近での使用が目立っている。あまり明瞭ではないが、この目地付近の石の重なりをみる限り、後円部側が先行しているようである。ただし、先後関係が不明な箇所も多く、そこに明確な時間差を認めることは難しい。工程上はほぼ同時と考えてよいだろう。また、造出が波浪により削られた面で、礫による下層の葺石が顕著に認められる。

遺物は、濠内堆積土のほか、崩落した葺石に絡んで出土した埴輪片が多い。大半は円筒埴輪で少数の形象

第16トレンチ



第14図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図(8)(1/40)

埴輪片を含む。また、葺石の上方から陶器片が僅かに出土している。葺石面直上では転落してきた埴輪のまとまった破片や須恵器片が顕著である。須恵器片の中には、接合して須恵器平瓶（第31図89）と確認されたものもある。須恵器片は他のトレンチよりも出土数が多い。須恵器の存在から、本格的な濠の埋没は古墳時代後期から飛鳥時代以降であることがわかる。（清喜）

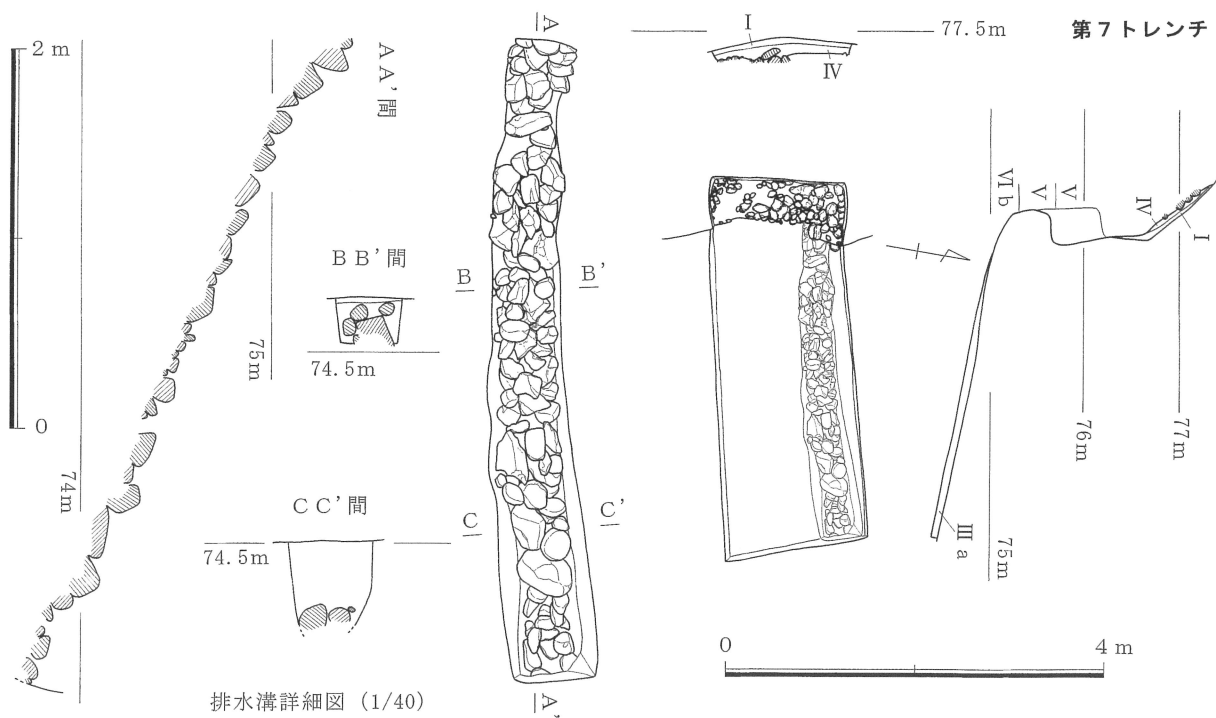
(3) 前方部（第7～13トレンチ）

第7トレンチ（第15図、図版2-3、図版21-1・2）本トレンチは、長さ4m×幅1.5mの規模で設定した。そのうち、長さ0.6m分が墳丘斜面にかかっているが、断面図を見るとわかるとおり、波浪のため高さ約1.5m分が崩落しており崖となっている。東造出南端と前方部南東隅のほぼ中間付近である。前方部第1段斜面と排水溝を検出した。

層位は、墳丘斜面部では表土（I）の下に墳丘崩落土（IV）がある。2層分で厚さはわずか10cmほどである。すぐに葺石面に到達した。濠内でも、厚さ10cm程度の灰色砂層が濠内堆積土（III a）としてあるだけで、除去すると地山（VI）が検出された。墳丘崩落部分の断面から、地山上面は標高約75.3mである。

遺構は、墳丘斜面で葺石を検出した。長径20cm前後の石と長径5～10cmの小礫が認められるが、多くは墳丘の崩落とともに原位置からずれた状態と考えられ、石どうしの隙間が目立つ。目地は認められない。

濠側からは墳丘内に設置された排水溝が検出された。調査範囲内で検出した長さは3.4m分で、さらに墳丘内に続いていくため排水溝の全長は不明である。濠側へも僅かに続くようであるが境界線の外側となるため未掘である。しかし、中に詰められた石の状況からほぼ排水溝の端に到達していると考えられる。掘方最大幅は約0.5mである。溝の掘り込み面は地山上面（約75.3m）で、もっとも低い排水溝東端の床面では標高約73.8mである。当初は墳丘崩落部の崖面下端から石組が露出するように見え、断面の検討から、地山上面から掘り込んでいることが判明した。溝の中に石を詰めたもので、石は長径10～20cmのものを主体とする。墳丘側ほど削られているため掘方幅は狭くなっている。掘方の壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は、東端の形状から、断面形がU字形を呈すると考えられる。埋土は地山と酷似しており、平面での掘方の確認は非常に難しかった。墳丘側では地山上面と同じ高さまで石を詰めていることがわかるが、濠側の近い箇所では、石の上面は掘方検出面よりも0.4～0.5mほど低くなっており、濠に向かって次第に石の厚



第15図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図（9）（1/80・1/40）

みは減じているようである。石の詰め方については、特段の規則性などは認められないが、東端付近は長径30 cmほどの大きな石を下から小礫で支える構造になっており、そこから濠側は小礫を床面に薄く入れるだけになっている。この構造がおそらく出水口の役割を果たすものと考えられる。この出水口と考えられる箇所
の床面の高さ（標高約73.8 m）が、墳丘裾と考えられる高さと同様かわずかに低いと考えられることから、この排水溝は、墳丘内の水を墳丘斜面に出水口を設けて墳丘外に排出するのではなく、墳丘裾に近い位置で、墳丘下に浸透させる構造になっていると考えられる。

また、排水溝じたいが、地山上面、すなわち墳丘盛土との境において設置されていることから、墳丘盛土の安定化を目的として造られたと考えられる。おそらく、このような排水溝は、墳丘の別の場所にも複数設置されているものと考えられる。

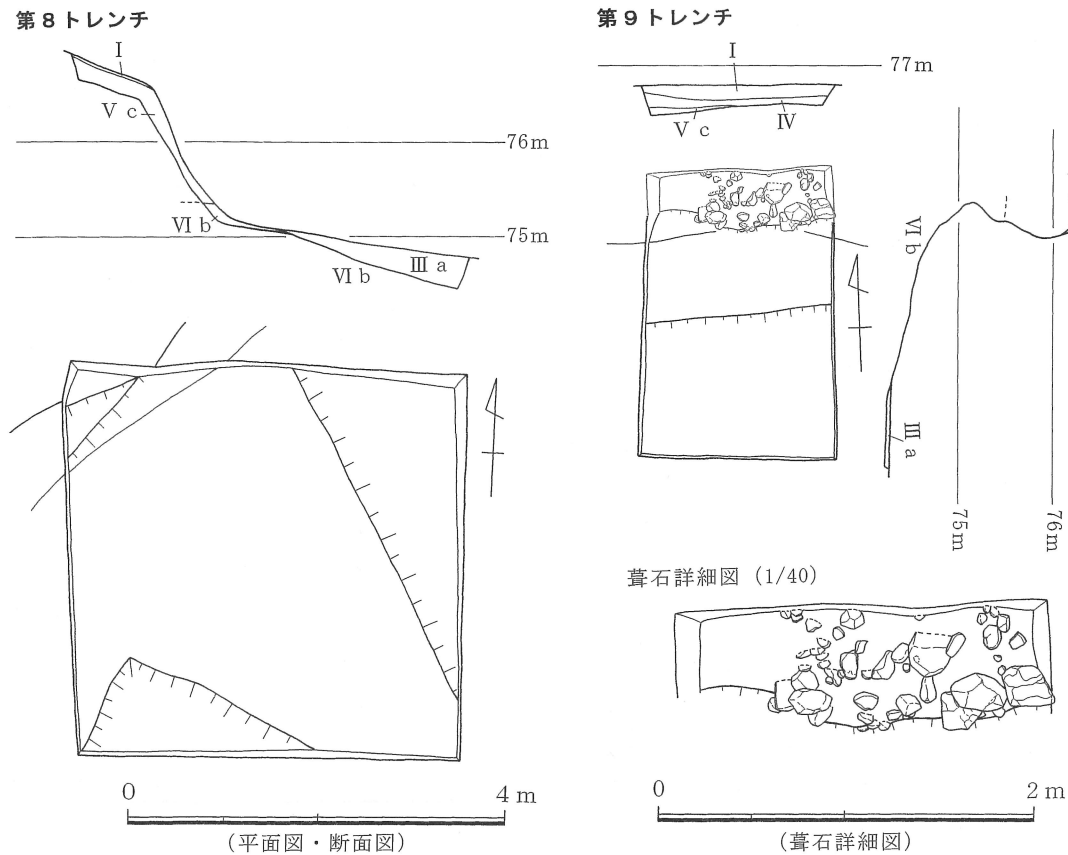
遺物は、排水溝埋土から出土した甕の口縁と考えられる細片のみである（第31図80）。（清喜）

第8トレンチ（第16図、図版21-3） 前方部東南隅に設定したトレンチである。周濠内から境界線から第1段斜面中位付近までの、4 m四方の範囲で掘削した。

土層の状況は、濠底部分では、トレンチの北東側と南西側では濠内堆積土である灰色砂層が最大で厚さ35 cm程度まで堆積していたが（Ⅲ a）、北西から南西への対角線上付近での厚さは5 cm程度しかなかった。いずれもⅢ a 層の直下は地山層である黄橙色～赤褐色粘質土（Ⅵ）であったので、あたかも隅角稜線の延長線上に沿って地山層が掘り残されているように見える状況ともいえる。掘削範囲内では本来の墳裾の位置を確定するような手がかりは得られていない。墳丘側では、本来の第1段斜面残存部にのみ厚さ数cmの表土（Ⅰ）があり、その直下は墳丘盛土である黄褐色混礫土層（Ⅴ c）であった。崖面で露出していたのもほぼⅤ c 層で、標高75.35 m付近以下がⅥ b 層である。

本トレンチからの出土遺物はない。

第9トレンチ（第16図、図版22-1） 前方部正面の、東南隅角と前方部主軸との中間点付近に設定ト



第16図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図 (10) (1/80・1/40)

レンチである。境界線付近から第1段斜面中位に至るまでの、長さ3m×幅2mの範囲を掘削した。第1段斜面残存部において葺石の存在を確認している。

土層は、崖面から濠底部分にかけてはほぼ地山層である黄褐色～灰色粘質土が露呈しており（VI b）、濠内堆積土はトレンチ南端付近でのみ確認され、厚さは最大でも数cm程度であった（III a）。掘削範囲内に本来の墳裾は存在しない。墳丘側では、厚さ6cm程度の表土（I）下に墳丘崩落土である厚さ数cm程度の明灰褐色砂質土（IV）が堆積していた。IV層の直下が墳丘盛土である明黄褐色砂質土層（V c）で、その上面に崩れかけの葺石が残存していた。V c層とVI b層の層界は、標高75.5m付近である。

検出範囲での葺石は多くの石材が脱落しており、残存状況は良くないものであった。ここでも長径20cm以上の石材と長径15cm以下の石・礫との2種類が認められた。

出土遺物はない。

第10トレンチ（第17図、図版2-4、図版22-3・4、図版23） 主軸に沿うように前方部正面に設定したトレンチである。周濠内の境界線いっぴいのところから第1段テラスにかかるように長さ10m、幅1.5mで設定したのち、第2段斜面にかかるように3mほど延長した。トレンチ内で第1段斜面葺石、第1段テラス埴輪列、第2段斜面葺石の各遺構を検出しているが、第1段斜面葺石の下半については、作業中の安全を確保できなくなる恐れがあったため、表面を露出させる程度で留めた。

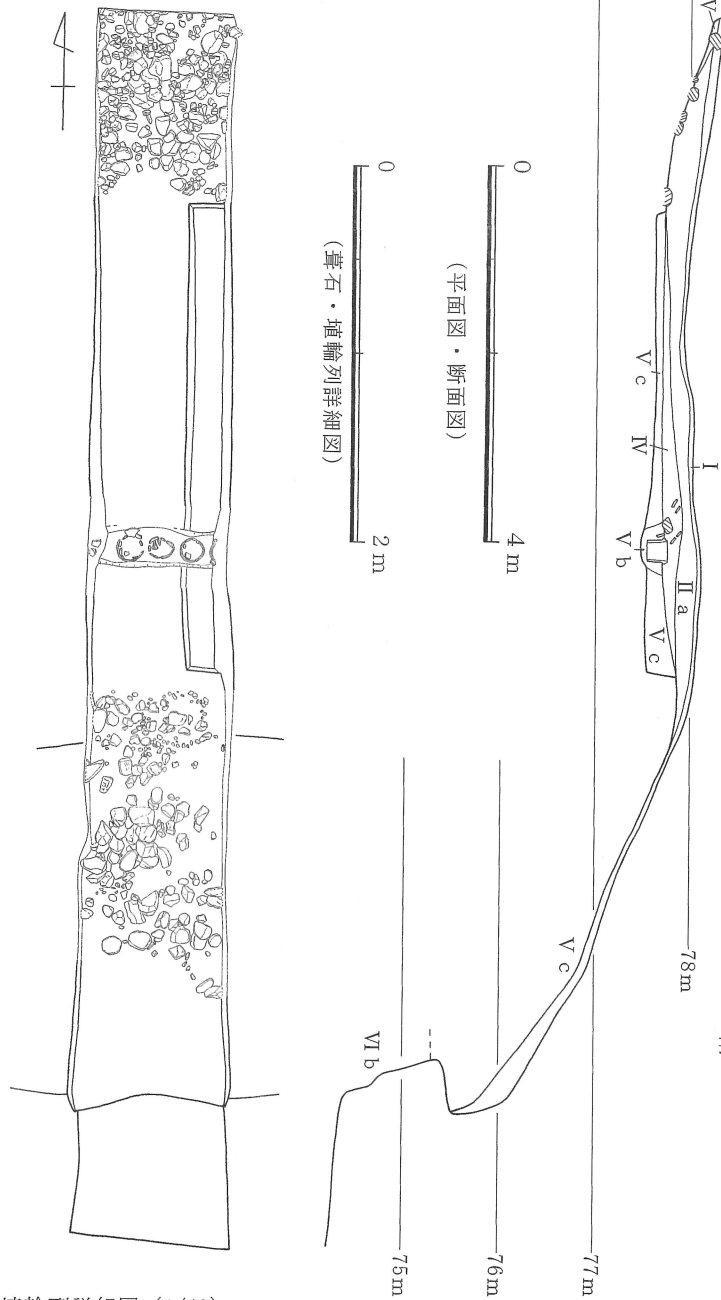
土層の状況は、崖面から濠底部分にかけては灰色混礫砂質土と黄橙色粘質土が互層となっている地山層が露呈しており（VI b）、濠内堆積土の堆積は認められなかった。掘削範囲内で本来の墳裾の位置を確定するような手がかりは得られていない。墳丘側は、第1段斜面では表土（I）直下が葺石面であったが、第1段テラス上ではI層の下に濠内堆積土を積み上げたと思われる明灰褐色粘土層（II a）があり、II a層は第1段斜面との傾斜変換点から第2段斜面裾部までのテラス全面を覆っていた。II a層にパックされる形で墳丘崩落土である明灰褐色砂質土層（IV）があり、その下が墳丘盛土（V c）となる。第2段斜面では掘削範囲の上半部はI層下にIV層が介在するが、下半ではII a層直下が葺石面であった。

第1段斜面葺石は、トレンチ北端から南へ7m付近から同10m付近、標高で76.9m付近から78.1m付近までの範囲を精査した。上層葺石はかなり抜け落ちており、一部には目地の存在を思わせる箇所もあったが、全体的な残存状況は良くなかった。下層葺石と同様の礫が第1段斜面と同テラスとの傾斜変換線からさらに約1.2mの幅で水平方向に広がっており、平坦面の縁辺には礫が敷かれていた可能性が高い。礫敷きは標高およそ78.1m付近にあり、埴輪列付近の標高がおよそ77.8mであるので、第1段テラス縁辺には礫敷き帯とでもいうべき高まりがあり、そこから斜面へと続いていくようである。なお、第1段斜面葺石の傾斜角は遺存状況が悪いために測定場所によるが、2箇所それぞれ約28度、約32度である。

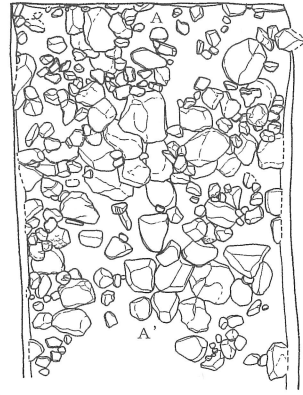
第2段斜面葺石は、トレンチ南端から南へおよそ2mまで、標高で77.8m付近から78.3m付近までの範囲で検出した。上層の葺石から脱落した石材が多いとみられ、遺存状況は良いとはいえない。基底石に相当すると思われる大振りな石材の並びも認められた。残存する葺石の傾斜角はおよそ20度となる。第2段斜面葺石基底石列から第1段斜面への傾斜変換点まで、すなわち第1段テラスの幅はおよそ6.9mとなる。

埴輪列は第2段斜面葺石基底石列から南へおよそ4.2mの箇所で見出した。第1段テラスのうち、およそ濠側2/3の位置にあたる。確認し得た埴輪はトレンチ壁にかかって部分的であったものを含めて5個体で、墳丘に向かって右からNo.1から5までの番号を付した。うちNo.5はトレンチ外方へ向かって傾斜する基底部の一部を検出したのみである。径30cm内外の埴輪を心々間距離35～40cm程度で樹立するという点は第1トレンチのものと同じ。掘方は盛土内に穿たれていたために識別が困難で一部検出に失敗した箇所もあったが、土層断面で見ると、上端での幅60cm、最深部での深さ40cmの、断面形が逆カマボコ形に近い布掘りである。底面を確認し得たNo.1～4の4個体では、No.2のみが掘方底面から15cm上方に設置されており注意されるが、ほかの個体については第1段突帯付近まで埋められていたようである。埴輪内部に落ち込んでいる破片はNo.1～4の各個体で確認できたが、最も低い位置の破片はNo.1では第1段中位付近と低く、No.2～4では各個体の設置レベルにばらつきがあるものの第1段突帯付近であった。埴輪内部への土の充填

第10トレンチ



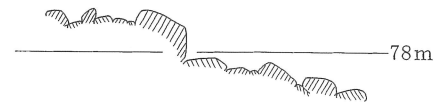
葺石詳細図 (1/40)
第2段斜面



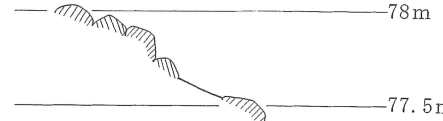
第1段斜面



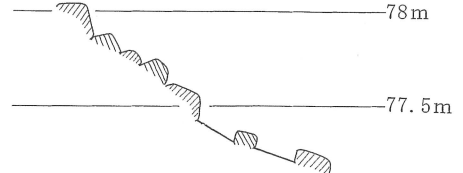
葺石断面
A A'間



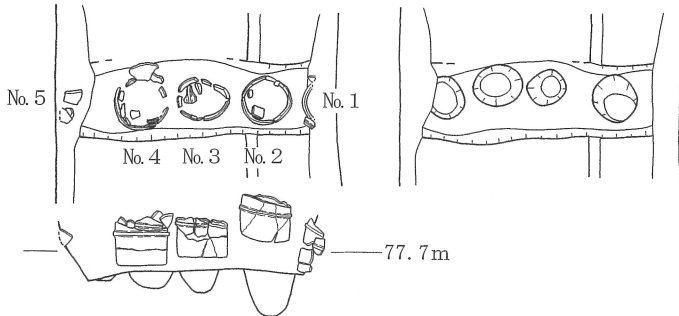
B B'間



C C'間

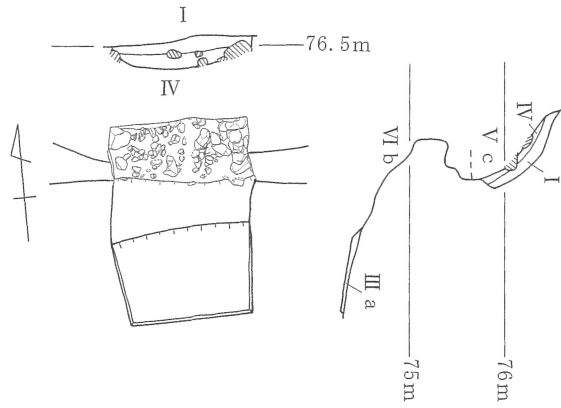


埴輪列詳細図 (1/40)



第17図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図 (11) (1/80・1/40)

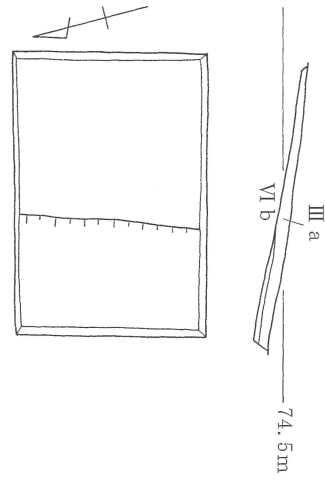
第11トレンチ



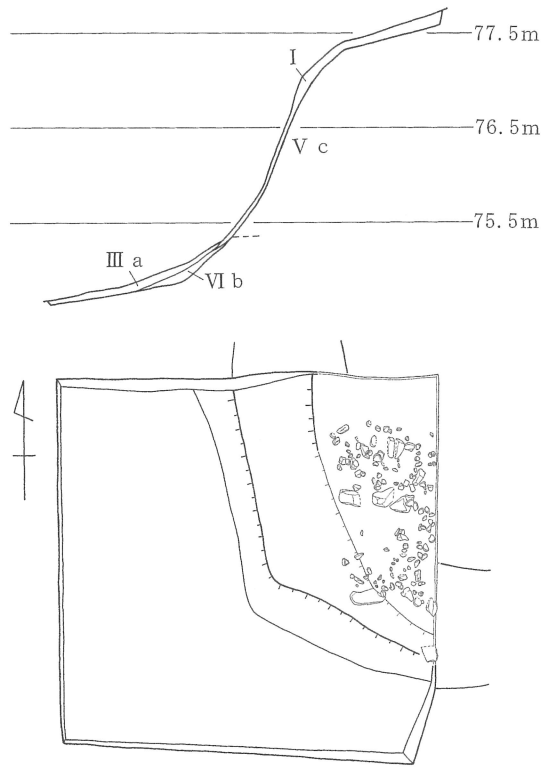
葺石詳細図 (1/40)



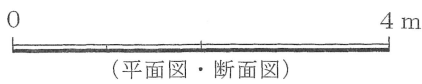
第13トレンチ



第12トレンチ



葺石詳細図 (1/40)



(平面図・断面図)



(葺石詳細図)

第18図 小奈辺陵墓参考地 トレンチ平面図・断面図 (12) (1/80・1/40)

は、No. 1 ではほとんど行われておらず、それ以外の個体では第 1 段付近までなされていたものと判断できる。なお、No. 2、3 内部に赤色砂質土が存在することが注意されたが、埴輪取り上げ後、No. 2、3、4 の下方および No. 5 の原位置と推定される場所の下方に赤色砂質土を充填した小土坑の存在を確認した。いずれも掘方の底を 5～25 cm 程度掘り窪めた中に赤色砂質土を充填していたもので、前方部正面中央付近という位置を鑑みる時、埴輪列樹立時に何らかの特別な行為がなされた可能性を指摘できよう。

第 11 トレンチ (第 18 図、図版 22 - 2) 前方部正面の、西南隅角と前方部主軸との中間点付近に設定トレンチである。境界線付近から第 1 段斜面中位に至るまでの、長さ 2 m × 幅 1.5 m の範囲を掘削した。第 1 段斜面残存部において葺石の存在を確認している。

土層は、崖面から濠底部分にかけてはほぼ地山層である黄橙色～灰色粘質土が露呈しておいたが (VI b)、トレンチ南端から北へ 0.8～0.9 m 付近に高低差 10 cm 程度の段差があり、段差以南には灰色砂層の堆積が認められた (III a)。掘削範囲内に本来の埴裾は存在しないと思われる。埴丘側では、厚さ 10～12 cm 程度の表土 (I) 下に埴丘崩落土の暗灰褐色砂質土 (IV) が厚さ～8 cm 程度堆積していた。IV 層の直下が埴丘盛土である黄褐色砂質土層 (V c) で、その上面に葺石が遺存していた。V c 層と VI b 層の層界は、標高およそ 75.65 m 付近である。

本トレンチでも葺石石材の多くが脱落しており残存状況は良くないものであったが、東端では石材が組まれている状況が観察された。石材の脱落部分では、やはり長径 15 cm 以下の石・礫が認められた。

本トレンチにおける出土遺物はない。

第 12 トレンチ (第 18 図、図版 24 - 1) 前方部西南隅に設定したトレンチである。周濠内から境界線から第 1 段斜面遺存部分までの、4 m 四方の範囲で掘削した。第 1 段斜面残存部において葺石の存在を確認している。

土層の状況は、濠底部分では、厚さ 10 cm 程度の灰色砂層があり (III a)、その下は地山である黄橙色から灰色を呈する粘質土であった (VI b)。掘削範囲内では本来の埴裾の位置を確定するような手がかりは得られていない。埴丘側では、第 1 段斜面残存部から崖面にかけて表土 (I) が広がっており、その直下は黄褐色砂質土からなる埴丘盛土であった (V c) 標高 75.35 m 付近が V c 層と VI b 層の境界である。

第 1 段斜面残存部における葺石の遺存状況は良くないものであったが、残存している石材には前方部正面に向けて置かれているものと側面を向けて置かれているものがあることを確認できた。

本トレンチからの出土遺物はない。

第 13 トレンチ (第 18 図、図版 24 - 2) 前方部西側面の、西造出南端と前方部西南隅角との中間点付近に設定したトレンチである。周濠内の長さ 3 m × 幅 2 m の範囲を掘削した。

掘削範囲全域を濠内堆積土である暗灰色から灰色の砂層が覆っており (III a)、その下は黄橙色粘質土からなる地山層である (VI b)。トレンチ西端から 1.2～1.3 m 付近において VI b 層上面での若干の傾斜変化が認められた。

本トレンチからの出土遺物はない。

(有馬)

3 出土遺物

今回の事前調査で出土した遺物の総数は破片数で約 13,879 点、コンテナで約 80 箱におよぶ。そのほとんどが古墳時代の遺物であり、その中心は埴輪である。そのほかに土師器や須恵器などの他の古墳時代遺物や中近世遺物もわずかに確認できる。ここではそれらの遺物について説明する。なお、図示した各資料の出土位置・採集位置については各遺物の番号脇の括弧内に記した。

(1) 埴輪 (第 19～30 図、図版 25～32)

埴輪の大半は円筒埴輪や朝顔形埴輪といった円筒埴輪列を構成する埴輪であるが、そのほかにも壺形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪、柵形埴輪などが確認できる。壺形埴輪や蓋形埴輪のなかには単独でもちいるのではなく円筒埴輪に載せられていたと考えられるものも存在する。

埴輪の焼成については、ほとんどの資料に黒斑がみられることから基本的には野焼きによるものと判断される。ただし、円筒埴輪列を構成する円筒埴輪のなかでも径がやや小さい一群については、現状では黒斑が確認できない。窖窯焼成によるものと断定はできないが、その可能性については考慮しておく必要がある。焼成の仕上りは、須恵質といわれるような硬質なものは存在せず、軟質のものがほとんどである。色調は、黄橙色となるものが多く、焼成が甘く暗黄橙～黄灰色となるものが次に多い。

胎土には基本的に直径3mm以内の砂粒（白色粒、赤色粒、チャートなど）が含まれ、多く含むものからあまり目立たないものまで存在するが、その差は漸移的でその多寡によって分別可能といえるような状況ではない。

円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪 まず、全体の傾向について述べておくと、墳丘内の円筒埴輪は4条5段構成が基本となっていたようで、第1段の高い一群については器高が73cm前後であったようである。透孔は大半が円形で、円筒埴輪では第2段と第4段に二つずつ穿たれていたようである。なお、朝顔形埴輪では第2段と第5段あるいは第3段と第5段に穿たれていたと推測されるものもある。透孔は大半が円形であるが、そのほかに半円形や方形のものもわずかにみられる。第2段と第4段に穿たれた透孔はそれぞれが同一の方向をむくものと90度振っているものの二者がみられる。底径は22～25cmのものが多く、上で指摘したように一部に底径が20cm程度のやや小さい一群が存在する。この一群はおもに西側造出上のもっとも南側に存在する1段高い区画に配列されていたようであるが、その円筒埴輪の段構成については不明である。基部は一～三つの粘土帯をつないだものがみられ多様であるが、丁寧に接着されていて判別しづらいものが多い。第1段高は15cm前後のものと16.5cm前後のものが多く、その次に13cm前後のものがみられる。突帯間隔は13.5cm前後のものが多く、15cmや12cmのものも少数みられる。突帯間隔設定の方法には凹線がもちいられている。口縁部高は基本的に突帯間隔とほぼ等しくなるようで、徐々に外反する形状のものが多く、一部に直立するものがある。外面調整はB b種ヨコハケのほどこされているものが多く、その次にB c種ヨコハケが一定量みられる。

なお、上記で述べた円筒埴輪の特徴は、外堤で出土している円筒埴輪とほぼ同様のようである⁽¹¹⁾。

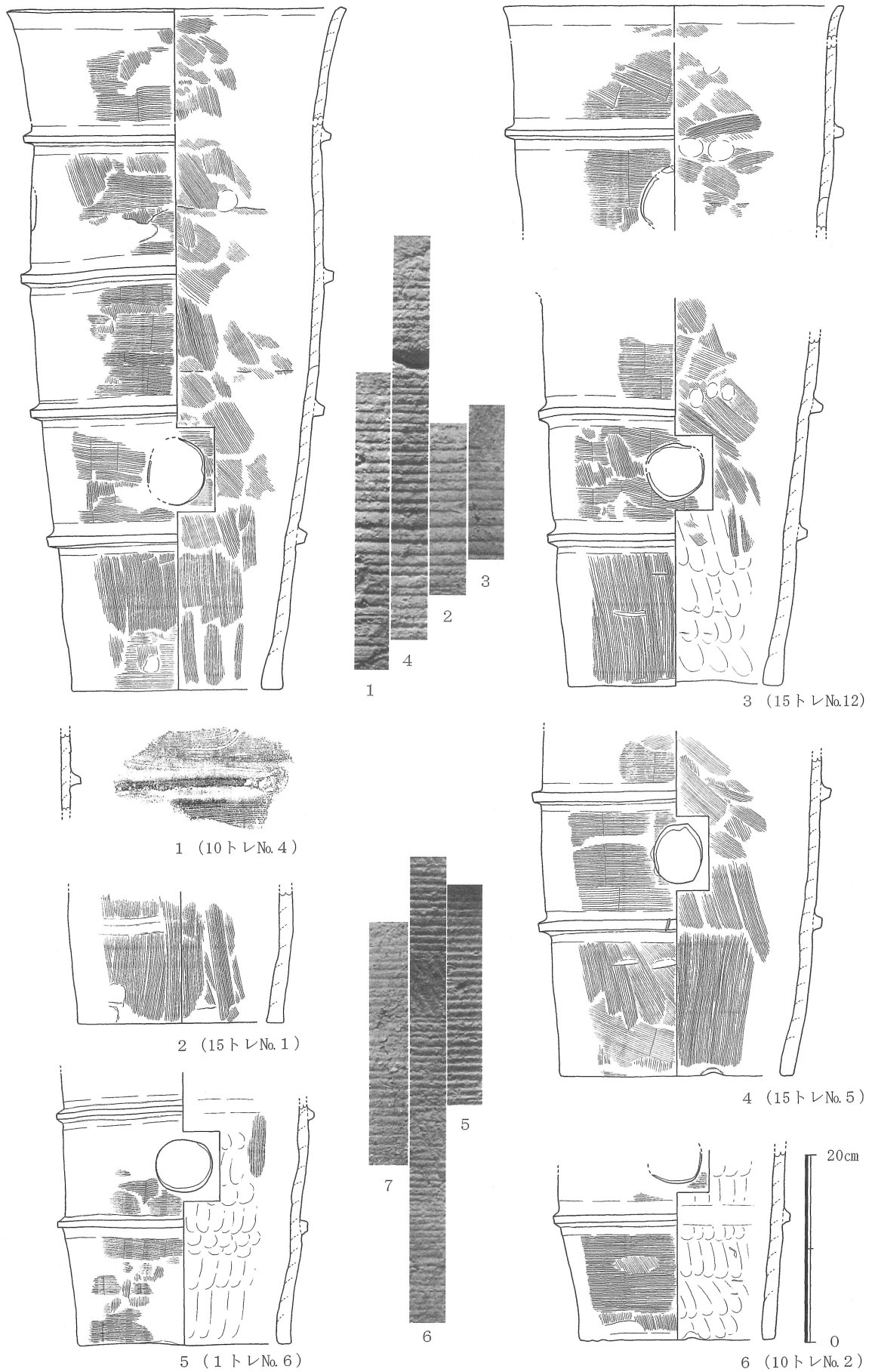
以下では、おおまかではあるが個体ごとにふれておきたい。なお、実測図は基本的に1/6で掲載している。

1～4・25では同一のハケメがみられる。突帯形状・口縁部形状・調整方法などの特徴から判断して1・3・4は同一製作者によるものと思われる（2は保留）。また、25についても判断を保留しておく（同一製作者の変異と考えられる要素もあるが、断定はできない）。なお、26の第1段外面でも同一のハケメがみられるが、明らかに別の製作者によるものである。

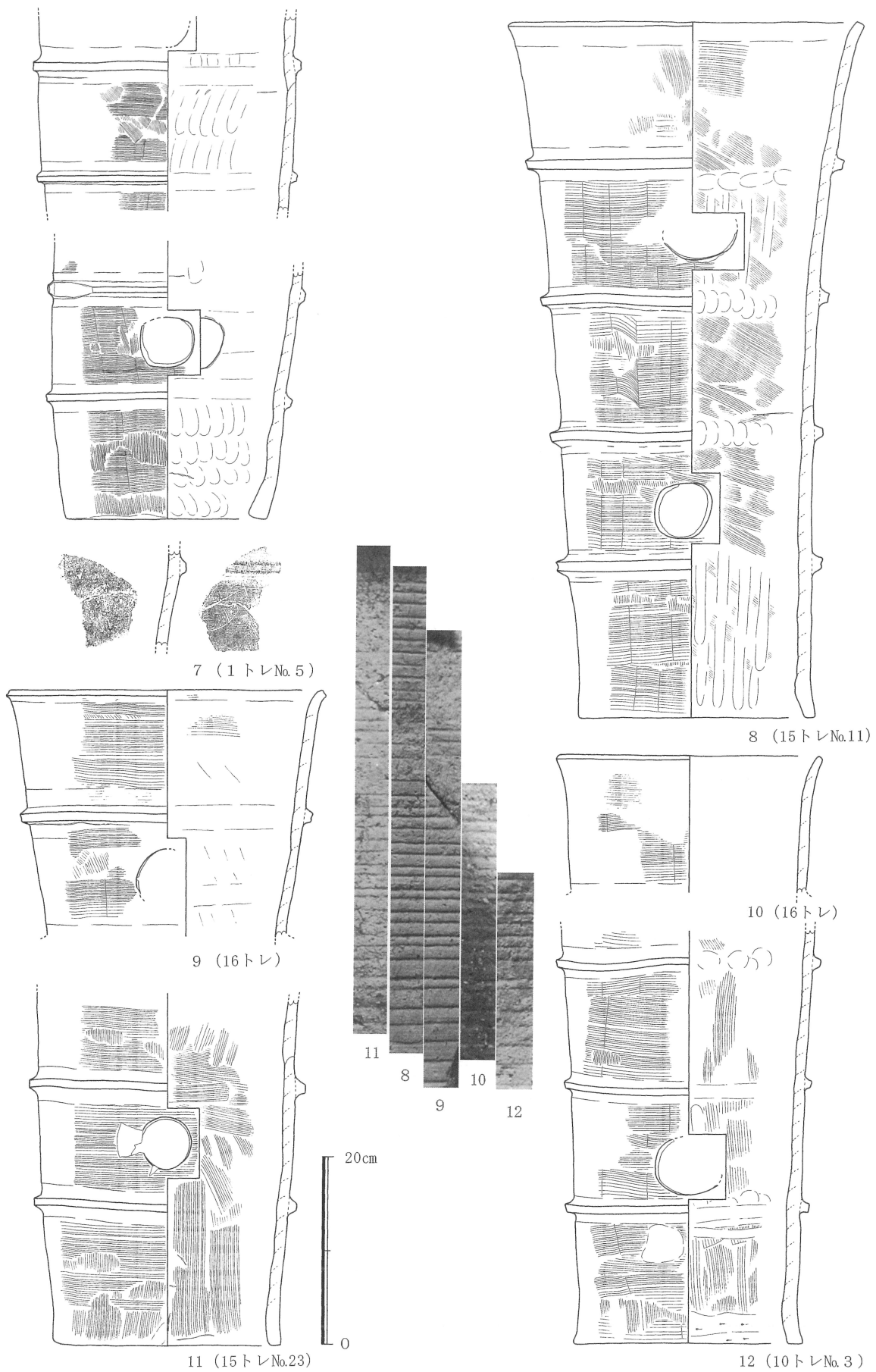
1はほぼ全形のわかる資料で、第1段が約17cmと大きい個体である。第2段と第4段に円形の透孔が二つずつ穿たれていたようで、その方向はそれぞれの段で90度振っている。第3段および第4段の中程に「積み上げ休止ライン」⁽¹²⁾がみられ、第4段外面ではB b種ヨコハケのハケメの天地がそれより下の段のものと逆転している。同一個体片のなかには線刻のみられるものがあり、実測図を掲載しなかった破片なども参考にするこの線刻は透孔の周囲にほどこされていたようである。似たような線刻は兵庫県茶すり山古墳においても確認されている。3・4では、第1条突帯の下方で板押圧痕にもみえるような痕跡を確認することができるが、詳細は不明である。なお、4では第1条突帯に刻み目が一つ確認できる。

5～7では同一のハケメがみられる。小ぶりの突帯形状・内外面の調整方法などの特徴から判断して5～7は同一の製作者によるものと思われる。なお、5と7は第1トレンチで検出された埴輪列のNo.7と6であり、同じ製作者による円筒埴輪が隣同士に配列されていたことになる。7は残存状況から考えて第5段に透孔をもつことになるので、朝顔形埴輪であったと考えられる。同一個体片のなかには線刻のみられるものもある。

8～12では同一のハケメがみられるが、同一製作者であるかはすべて保留としておく。第1段高は8のみが約17cmであり、約15cmである11・12に比べて高くなっているが、8と12は外面調整の方法が似ている。しかし、底部内面のヘラケズリは12のみでしか確認されていない。当参考地の円筒埴輪において底部



第19図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図 (1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/6)



第20図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(2) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/6)

内面ヘラケズリが確認されたことは、奈良盆地内における円筒埴輪の変遷を考える上で重要な要素といえる。また、8と9では大振りな突帯が似るものの、9の内面調整は基本的にナデである点が他の個体と大きく異なる(10の内面は摩滅している)。したがって、8～12はそれぞれの要素が一定しておらず、そういう意味では逆に同一製作者内の変異と考えられなくもないが、ここではすべて保留とした。8は1とともに全形のわかる資料で、第1段高が約17cmと大きい個体である。第2段と第4段に円形の透孔が二つずつ穿たれており、その方向はどちらの段もほぼ同じ向きである。第3段の下部には「積み上げ休止ライン」がみられ、それまでの段とはヨコハケのハケメの天地が逆転している。9・10は第16トレンチの葺石検出中に出土したものである。11は外面に静止痕のあまり明瞭でないBc種ヨコハケがほどこされている。第3段の下部には「積み上げ休止ライン」がみられる。12は先にもふれたように、底部内面にヘラケズリのほどこされていることが特徴的である。

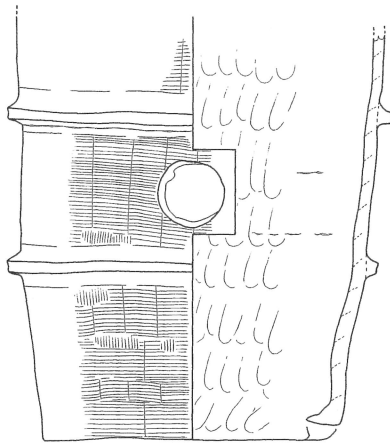
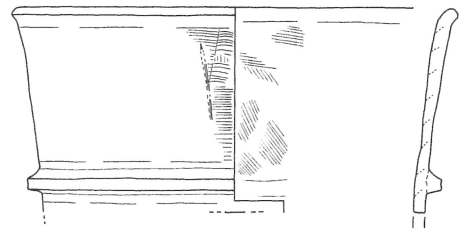
13～16では同一のハケメがみられる。口縁部の形状にばらつきがみられるが、それ以外の透孔の形状・内外面の調整方法・突帯の形状などが非常に類似しており、13～16は同一の製作者によるものと思われる。同一製作者による円筒埴輪で口縁部形状にここまで差異がみられるのは珍しい。あえて作りわけることがあるのだろうか。13～15では第2段に円形の透孔がみられるが、第4段には半円形もしくは逆三角形の透孔が穿たれていたようである。ただし、16の第4段の透孔は下部のみ判明しており、その形状が円形であることから、これらを総合すると第4段の透孔は半円形であった可能性が高そうである。13～16のいずれも外面調整は基本的にBc種ヨコハケであったようである。ただし、Bc種ヨコハケを基本とする個体においても「積み上げ休止ライン」を含む段についてはBb種ヨコハケとなることが多い点には注意しておく必要がある。なお、13・16では同一個体片で線刻が確認されている。また、16の口縁端部の形状は布留甕の口縁端部とよく似ており、特徴的である。このような口縁端部の形状は、大阪府百舌鳥大塚山古墳・百舌鳥陵墓参考地・陵南赤山古墳、兵庫県茶すり山古墳などでも確認されており関係が注目される。

17～21はいずれも第15トレンチからの出土であり、同一のハケメがみられる。17～20については突帯の形状・内外面の調整方法などから判断して、同一製作者によるものと思われる。このうち17～19については焼成の具合も似かよっているが、第1段高には若干のばらつきがある。20は第1段の調整や透孔の大きさが他の個体と若干異なるものの、内面調整や突帯形状などはよく似ている。17～20はいずれも外面調整がBb種ヨコハケを基本としているが、ハケメ工具がほぼ段間をカバーするくらいの幅があるため、Bc種ヨコハケにみえてしまう箇所もある。なお、21については判断要素が少ないため保留とするが、第15トレンチからの出土で17～20と色調も似るのでいずれかの個体と同一個体片である可能性が高い。

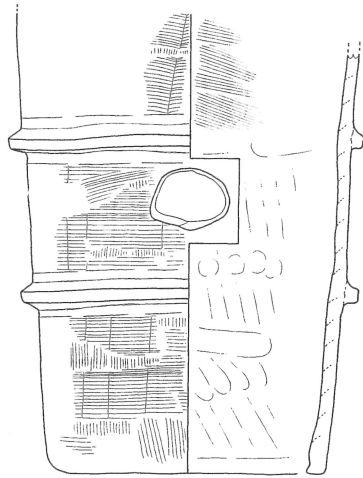
22～24はいずれも第15トレンチからの出土で、同一のハケメをもち、調整方法・太めの突帯形状・小さな透孔の形状・器壁の厚さなどから判断して同一製作者によるものと考えられる。いずれも外面調整はBb種ヨコハケである。22・23については焼成があまりよくなく、その具合もよく似ている。24は第1・2段の外面に縦方向の「ひっかき傷」のような痕跡がみられるが原因は不明である。

25は1～4のハケメと一部が同じであるようにみえるが、異なる箇所も存在する。1～4のハケメ工具と原材が同一であったのかもしれない。この25のハケメと26の第1段のハケメは同一である。しかし、26の第2段より上は別のハケメであり、こちらについては27と同一のハケメである。なお、26は25と製作者が異なり、27とも異なるようである。

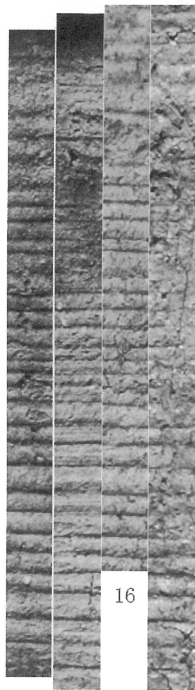
28以下は同一ハケメをもつ別個体をみだせないものである。28は現状では黒斑が確認できない。第2段の外面調整はBb種ヨコハケであるが、ハケメ工具の幅はほぼ段間をカバーしており、一見するとBc種ヨコハケのようにもみえる。29は第2段と第4段に半円形の透孔が二つずつ穿たれていたようである。外面調整は第2段までタテハケのみで、第3段の外面調整はBc種ヨコハケとなっている。30は写真でも示したように第1段に小孔と線刻がみられる。外面調整は丁寧なナデで、その単位すらも不明である。突帯間隔が13.5cm前後であるのに対して口縁部高が約16cmと大きくなっており、口縁部高と第1段高がほぼ等しいようである。31・32は同一個体である可能性もあるが、断定はできない。33は現状で黒斑が確認できない。



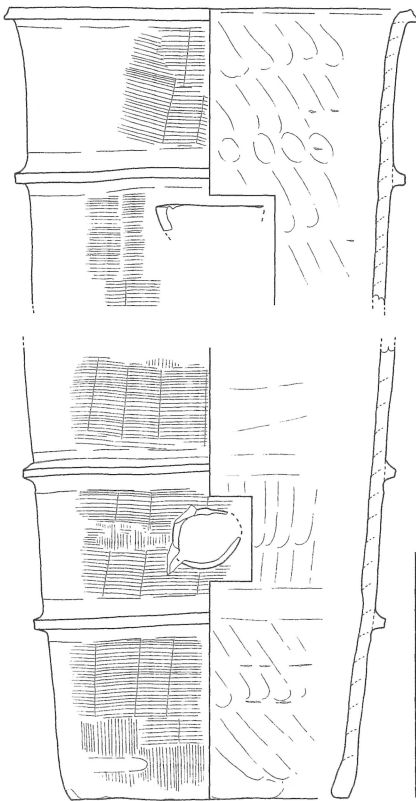
13 (15トレNo.19)



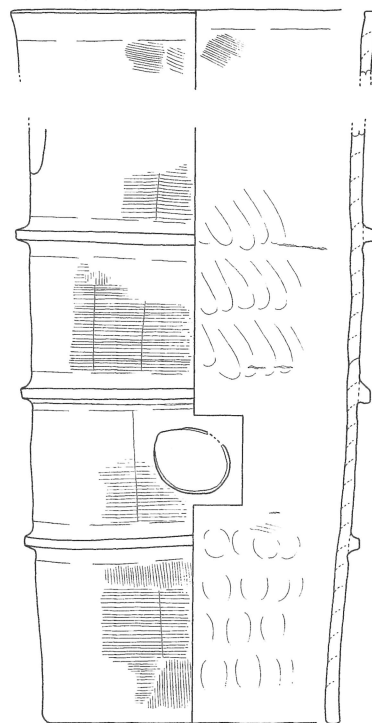
14 (1トレNo. 1)



13 15 14



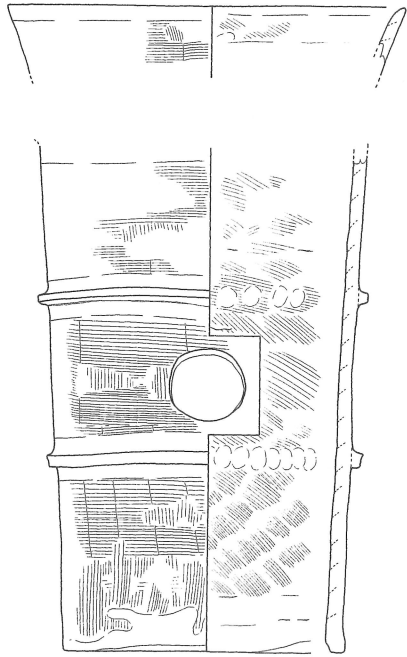
15 (15トレNo.18)



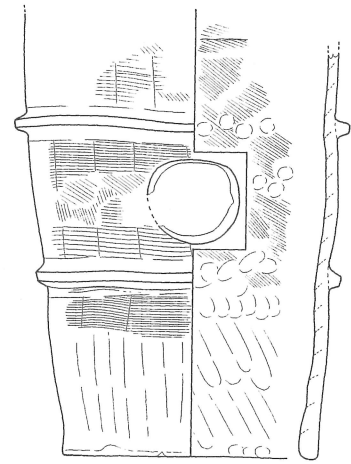
16 (1トレNo. 4)



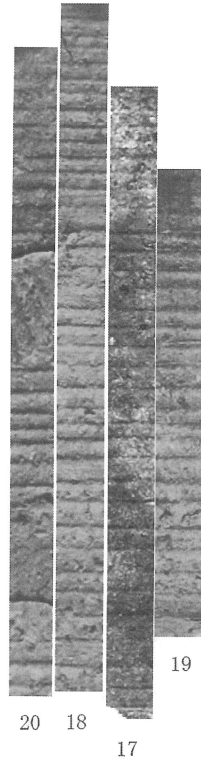
第21図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(3) 円筒埴輪(1/6)



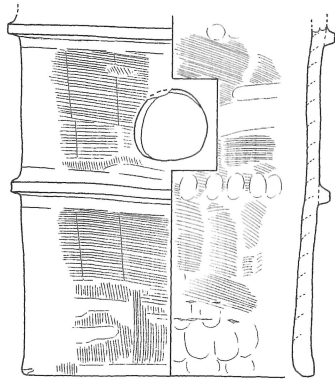
17 (15トレNo.10)



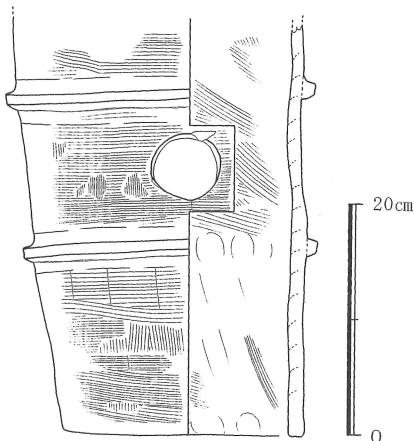
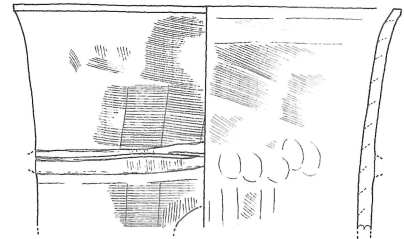
20 (15トレNo.20)



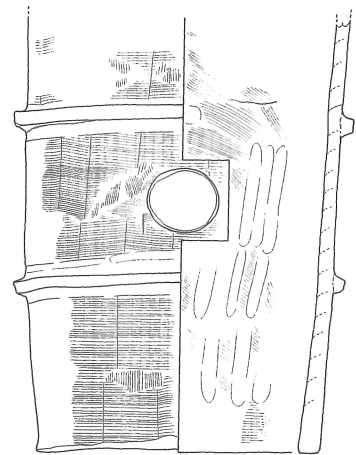
21 (15トレ)



18 (15トレNo. 2)

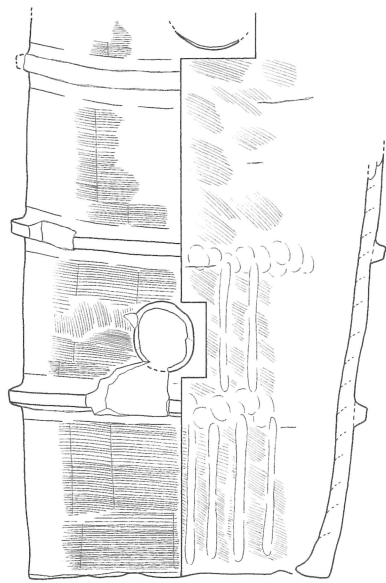


19 (15トレNo.13)

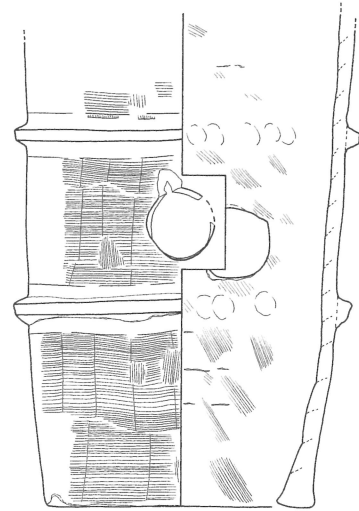


22 (15トレNo. 4)

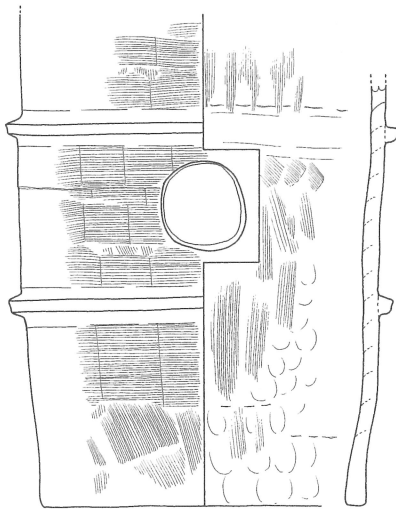
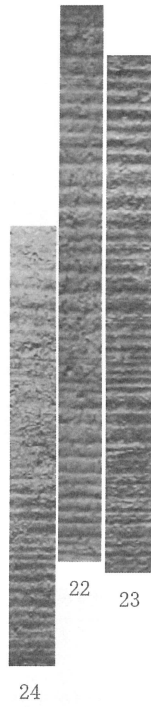
第22図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(4) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/6)



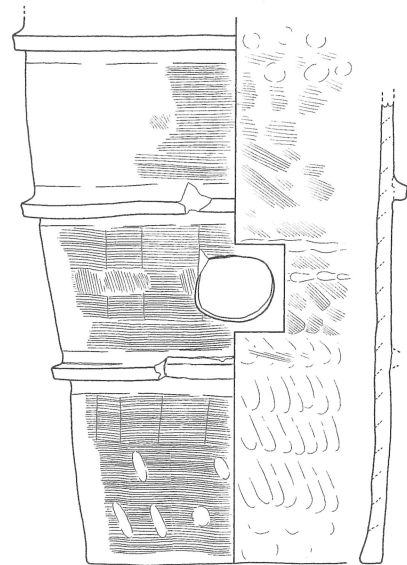
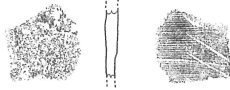
23 (15トレNo.17)



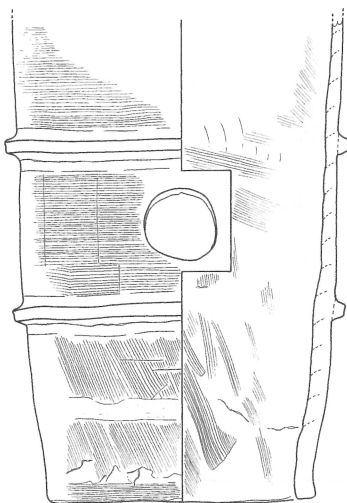
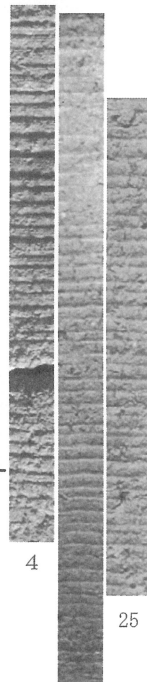
24 (15トレNo.7)



25 (15トレNo.3)



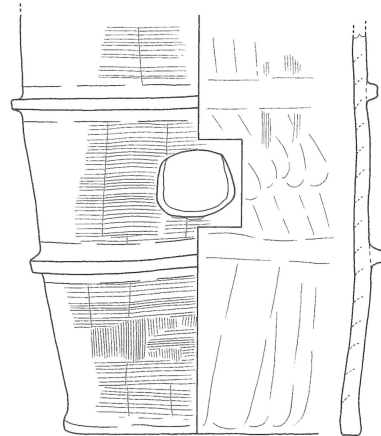
26 (15トレNo.16)



27 (15トレNo.21)

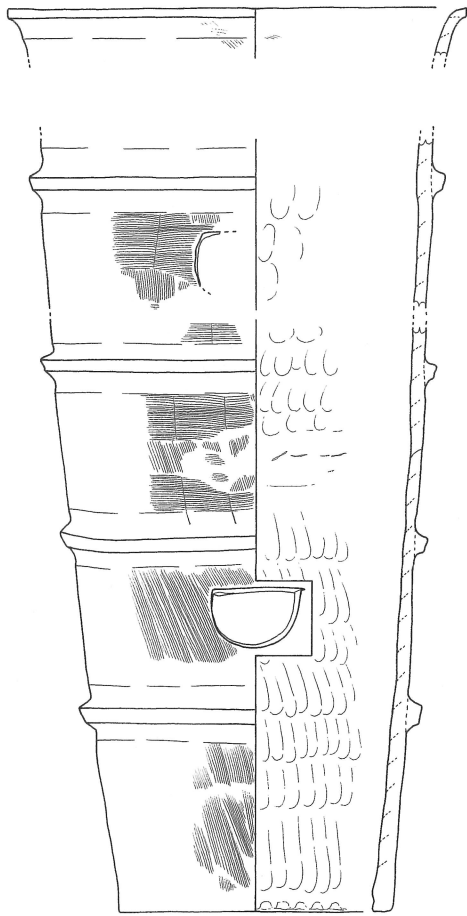
ハケメ一致
↑ ↓ 4とはハケメ一致せず

26の第1段

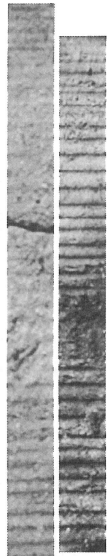


28 (15トレNo.14)

第23図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図 (5) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/6)

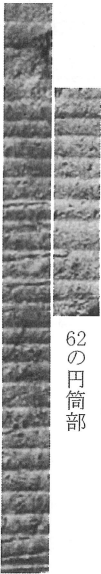


29 (1トレNo. 3)



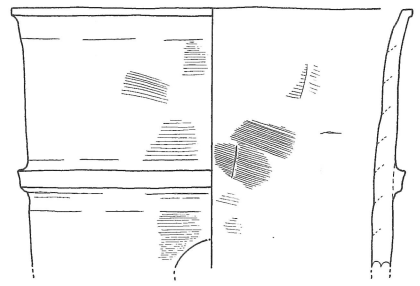
27

26の第2段

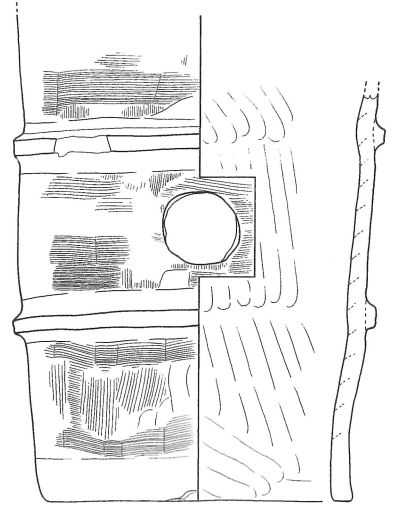


28

62の円筒部

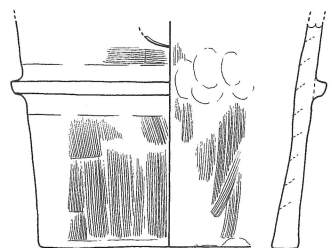


31 (15トレ)

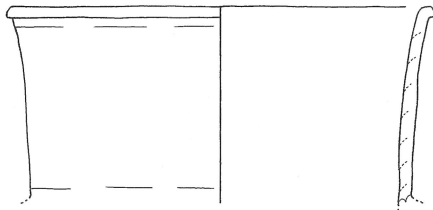


32 (15トレNo. 6)

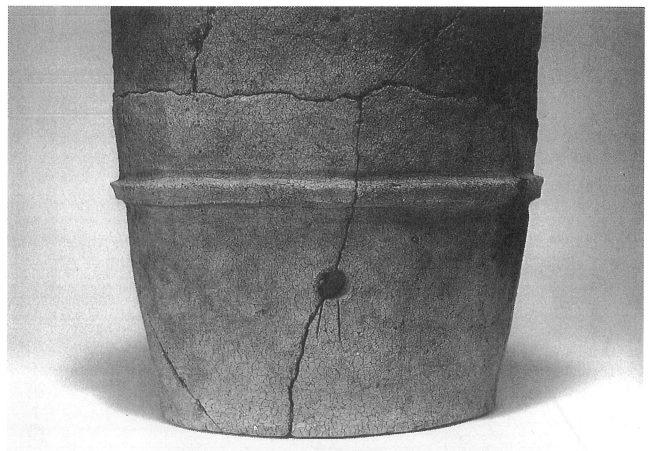
0 20cm



33 (10トレNo. 5)

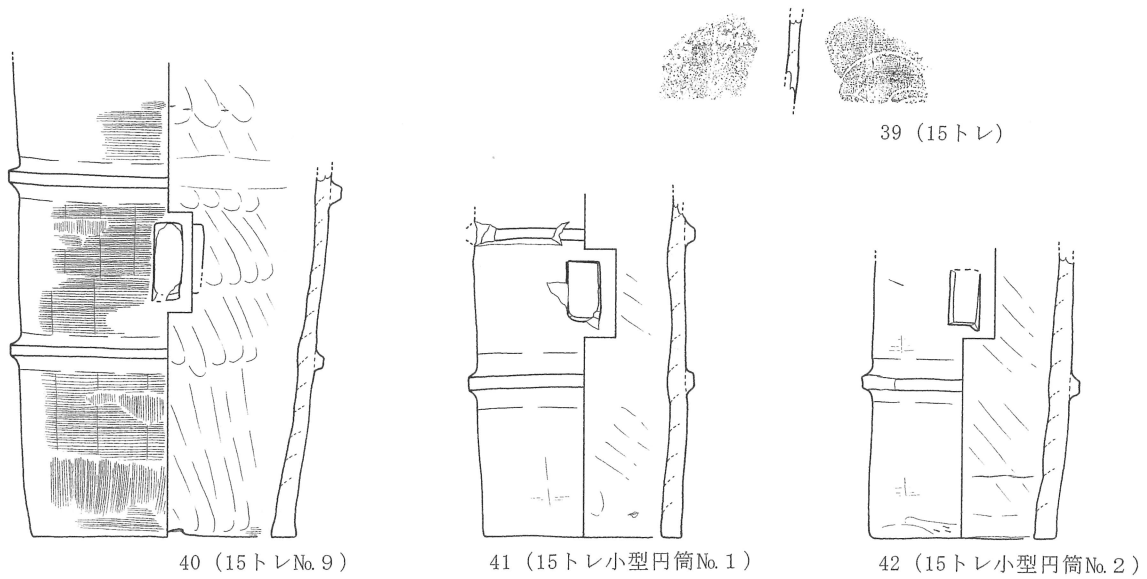
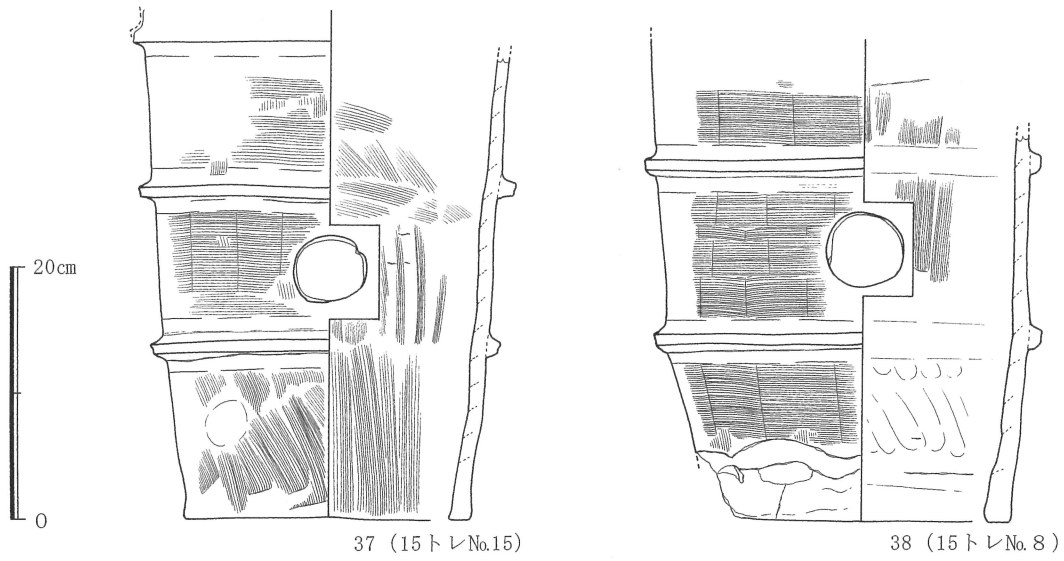
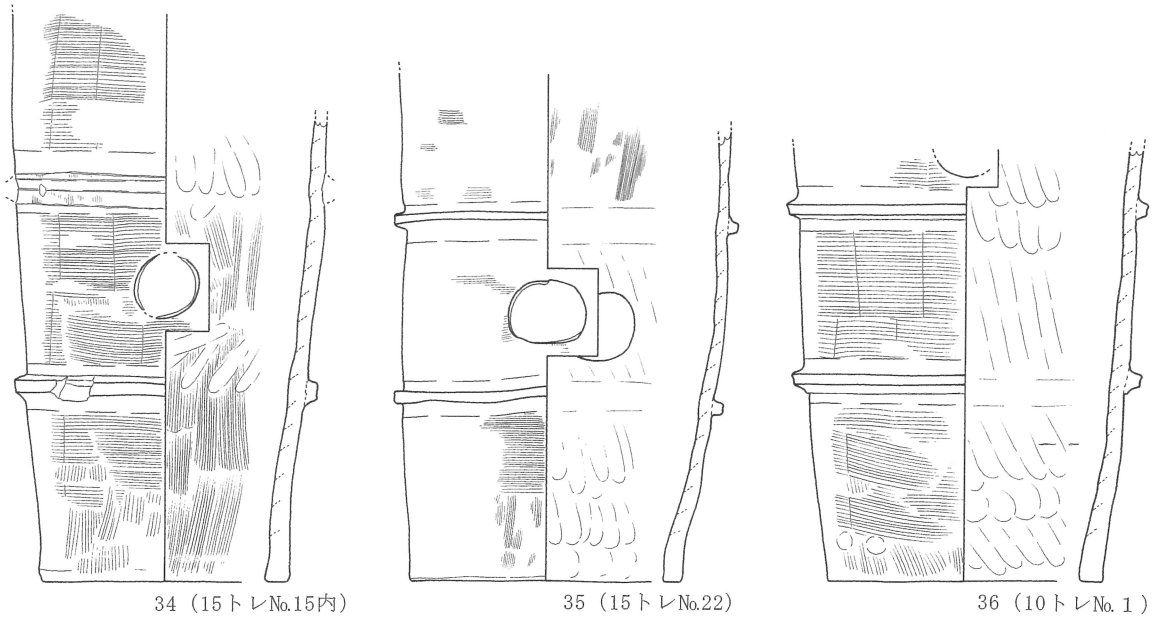


30 (1トレNo. 2)

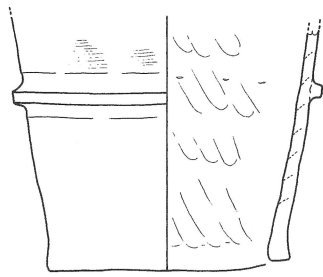


30の小孔と線刻

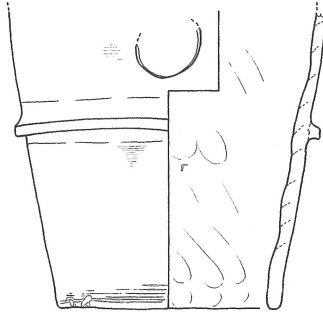
第24図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図 (6) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/6)



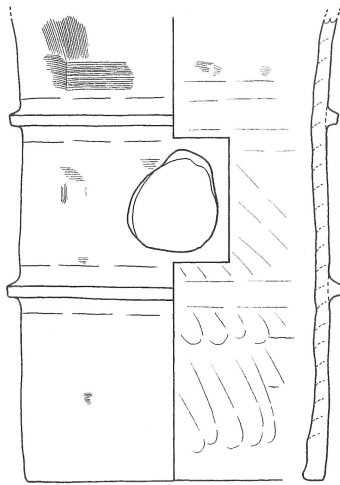
第25図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図 (7) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/6)



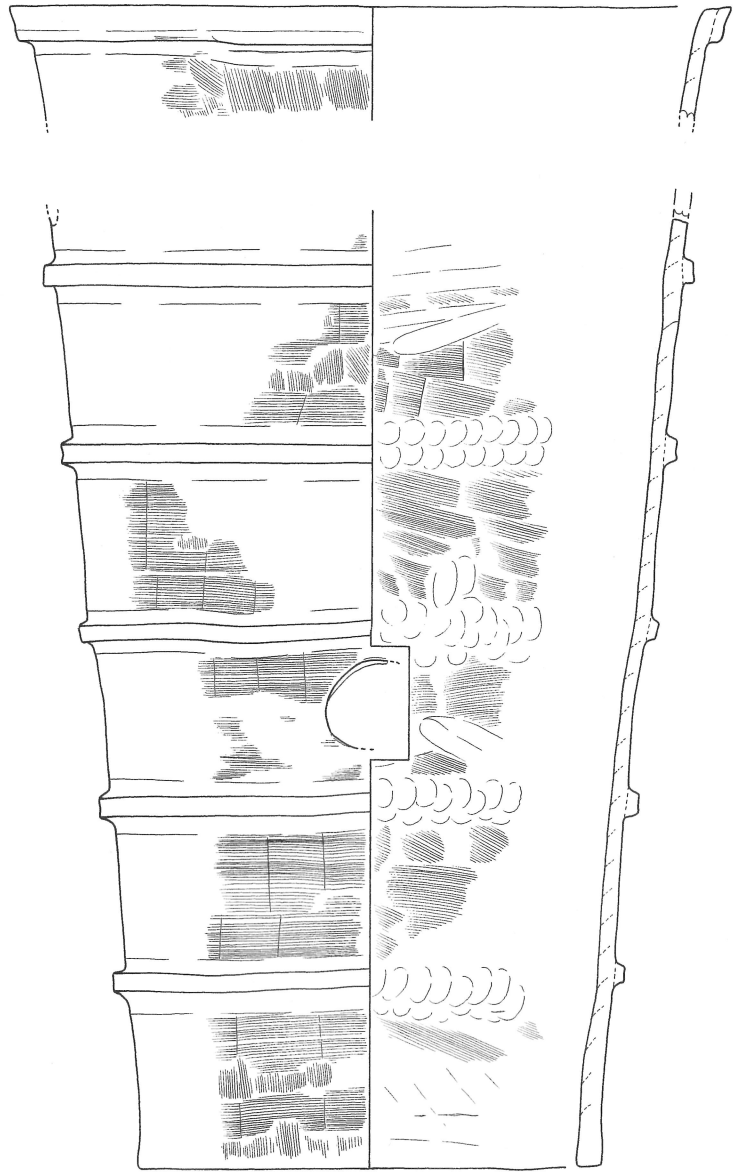
43 (15トレ上段No. 1)



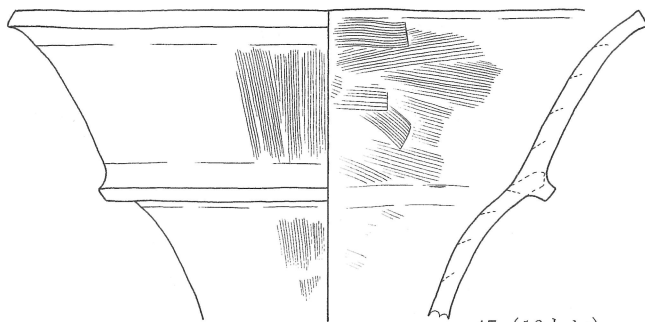
44 (15トレ上段No. 2)



45 (墳頂根起き箇所)



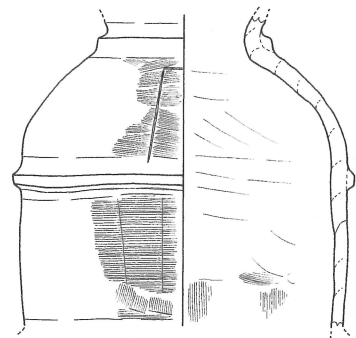
46 (15トレ大型円筒)



47 (16トレ)

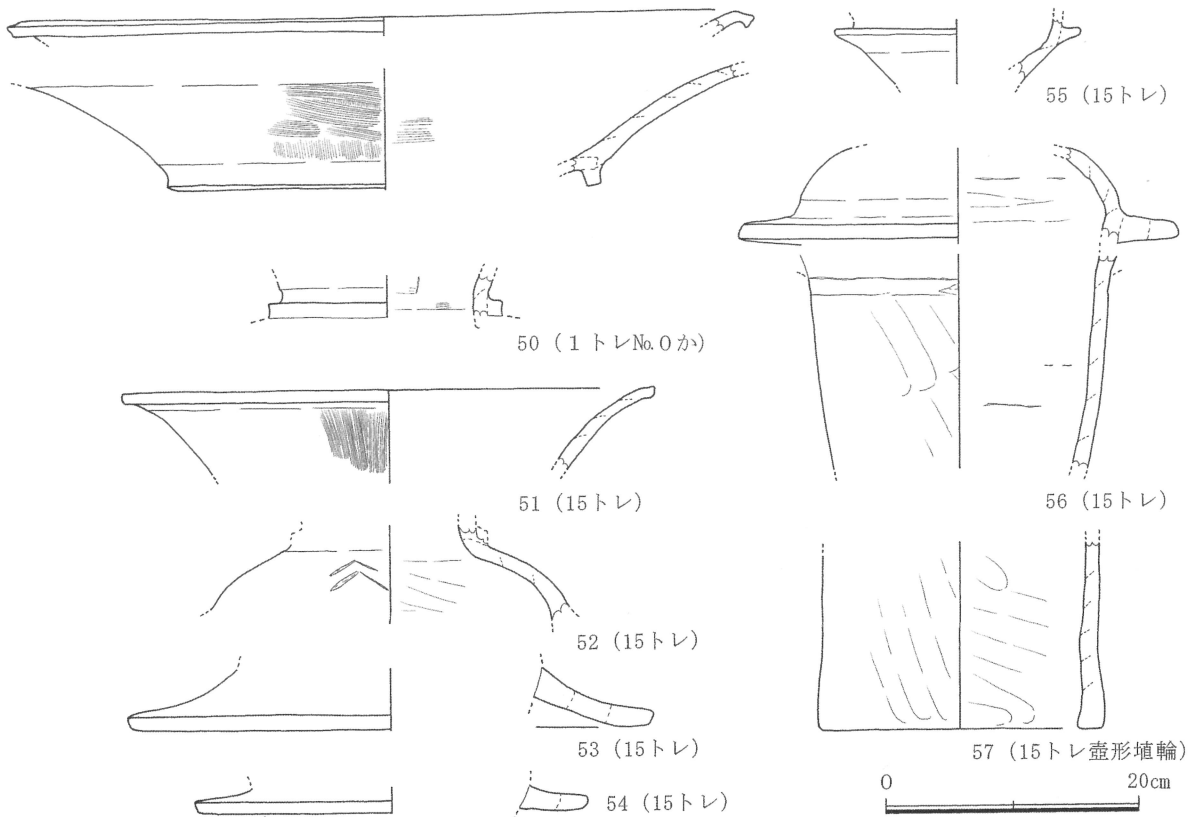


48 (16トレ)

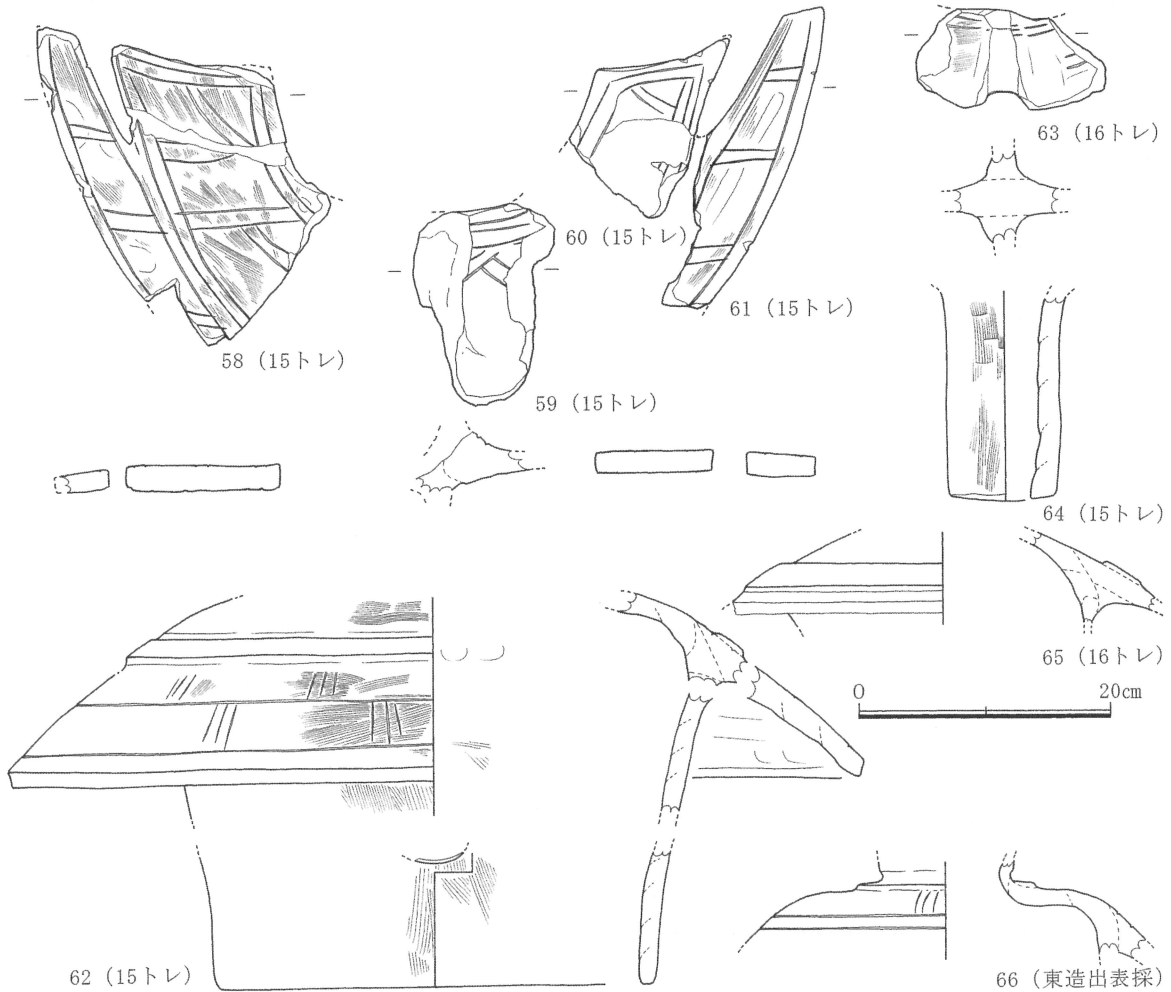


49 (16トレ)

第26図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(8) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/6)



第27図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(9) 朝顔形埴輪・壺形埴輪(1/6)



第28図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(10) 蓋形埴輪(1/6)

34は第15トレンチNo.15の内側に入れ子状に設置されていた円筒埴輪で、底径が20cm弱と小さいものである。黒斑は現状で確認できない。この個体については窰窯焼成によるものとしてもいいかもしれない。第1段高と突帯間隔がほぼ等しく、16cmと大きいのが特徴である。また、突帯の剥離箇所で見られる凹線が幅約8mmであり、当参考地の他の円筒埴輪に比べて幅広である。36は第2段ではなく、第3段に透孔のみられる点の特徴である。このことからみて、朝顔形埴輪の可能性が考えられる。38は基部付近の外面上における剥落が著しい。40は縦長の長方形透孔の穿たれている点の特徴的である。

41・42は第15トレンチで検出された小型円筒埴輪である。第1段高は約13cmで、突帯間隔は約12cmである。横方向のハケ調整であったようであるが、痕跡がほとんど残っていない。42では基部外面にヘラケズリがほどこされていたようである。長方形透孔の形状は40に比べれば縦長でない。41・42についてはおそらく同じ製作者によるものと考えられる。この2個体は近接する位置で出土したことから、船形埴輪の台部とみることも可能かもしれないが、船形埴輪の破片がまったく出土していないことからその可能性は低いものと考えられる。

43・44はどちらも西側造出のもっとも南側に存在する1段高い区画に配列されていた円筒埴輪である。どちらも底径が18～19cmであり、他の埴輪列を構成する円筒埴輪に比べて小さいのが特徴である。また、どちらも黒斑が現状では確認できない。44は基部外面に製作台の痕跡らしきものがみられる。

45は墳頂の根起き箇所では採集された円筒埴輪であるが、第1段テラス上の埴輪列を構成する円筒埴輪などその基本構成が変わらないことが確認できる。

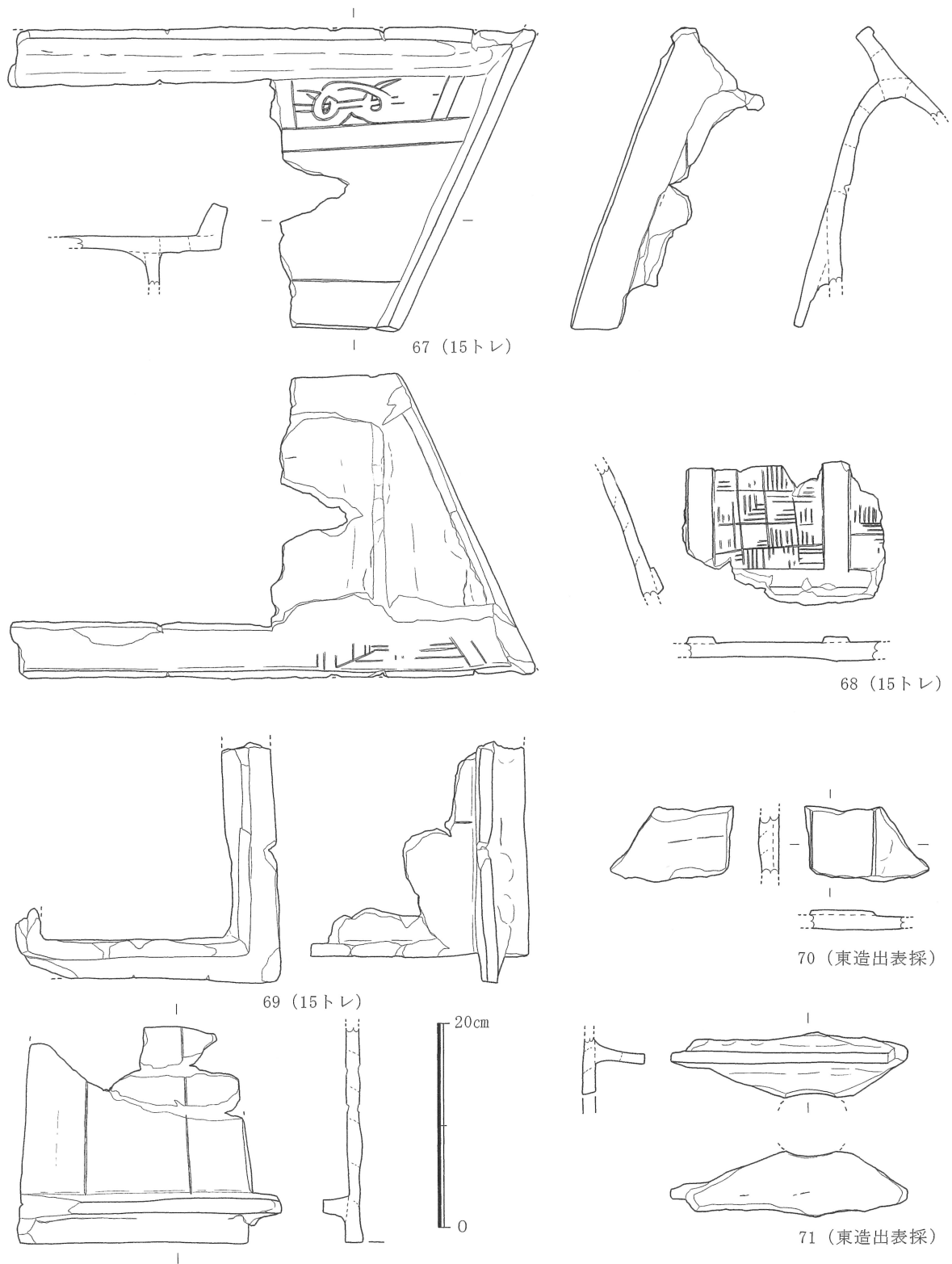
46は第15トレンチにおいて出土した大型円筒埴輪である。底径が約36cmと当参考地出土の円筒埴輪のなかで群を抜いて大きい。第1段高は15.5cm前後で、突帯間隔は14cm前後であるが、何条何段であったのかは不明である。第3段と第6段に円形の透孔がみられることから、6条7段以上であったことは確実であろう。外面調整はBb種ヨコハケである。口縁部の形状は当参考地の円筒埴輪に通常みられるものとは異なり、貼付口縁といわれるタイプのものである。検出時に46の内側底面付近で蓋形埴輪の立飾り部の軸部分である64が出土しており、配列時に46には蓋形埴輪が載せられていたことがわかる。また、第15トレンチではこの46のみが内側に土が充填されなかったことも判明した。これは蓋形埴輪を載せていたことと関係するものであろう。

47～57は朝顔形埴輪もしくは壺形埴輪の破片である。円筒埴輪に比べるとかなり数は少ないが、朝顔形埴輪も埴輪列を構成していたようである。第1トレンチのNo.0とNo.5が朝顔形埴輪であるとすれば「朝顔形埴輪1本+円筒埴輪4本」という周期で埴輪列を構成していた可能性がある。壺形埴輪については、部位によっては朝顔形埴輪と判別がつかないことからここであつかうこととするが、使用方法としては蓋形埴輪などに近いようであり、形象埴輪に含めたほうがよいかかもしれない。47～49は第16トレンチの葺石精査中に出土した朝顔形埴輪である。49の肩部には線刻がみられる。50は第1トレンチの埴輪列を構成していたようである。51～57は壺形埴輪と考える。53や54のように鐺状の突帯をもち円筒埴輪に載せられていたものと推測されるが、その大きさにはバリエーションがあったようである。57は第15トレンチの出土状況図において壺形埴輪とした個体である。付近で鐺部の破片が出土していたことから、壺形埴輪としているが、直接接合する破片はみつからなかった。この個体が壺形埴輪であるとすれば、この個体については円筒埴輪に載せるのではなく地面に設置されたことになる。

形象埴輪 今回の調査で確認した形象埴輪としては、蓋形埴輪・家形埴輪・柵形埴輪がある。

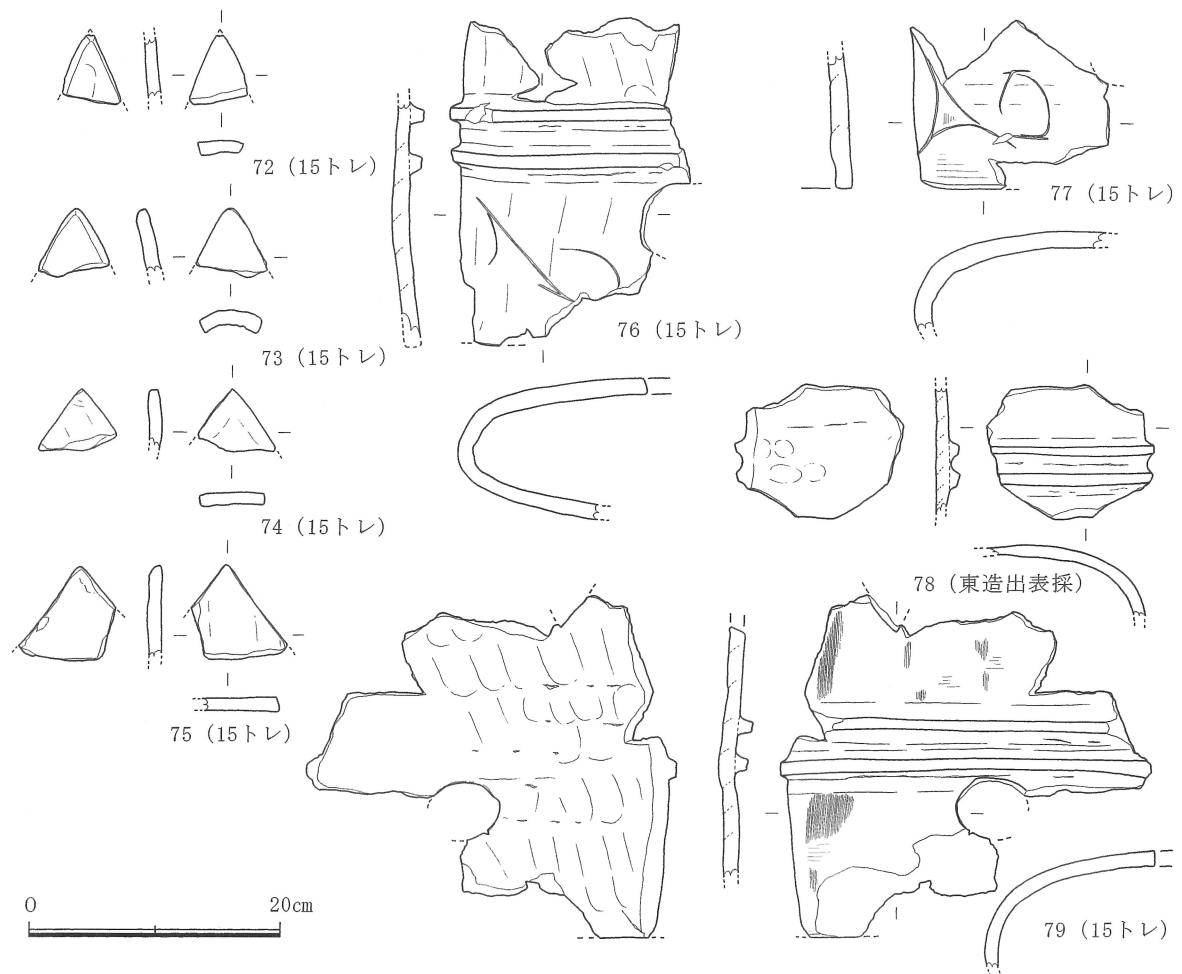
58～66は蓋形埴輪である。58～62・64についてはおそらく同一個体であり、出土状況から判断して46の大型円筒埴輪に載せられていたものと考えられる。実際に、58～61は46の周辺で出土し、62の一部や64は46の内側に落ち込んでいた。62や66などのように蓋形埴輪の笠部の形状にはいくつかの種類があったようである。なお、62の円筒部のハケメは28のハケメと同一のようである。

67～71は家形埴輪の破片である。67・68は屋根部分の破片で、どちらも線刻がみられる。67は平側の棟付近に2本の横線とそれに螺旋状に巻きつくような線刻がみられ、その反対面では棟上の飾板に鍵手紋状



第29図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図(11) 家形埴輪(1/6)

の線刻がみられる。68は網代を表現したものであろう。67は切妻造もしくは入母屋造の家形埴輪であるが、棟上の飾板が垂直にとりつくのではなく片方の平側の屋根部の傾斜にあうように接合されており、片流れ風で特徴的である。類例は不明であるが、珍しい形式のものといえる。なお、破風板の欠損部分の観察によれば千木が付属していた可能性を指摘できる。69～71は壁部分の破片である。69は67などとともに第15トレンチからの出土で、同一個体である可能性がある。69は妻側を中心に残存しており、現状では窓を確認



第30図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図 (12) 柵形埴輪 (1/6)

することはできない。閉鎖的な建造物を表現したものかもしれない。70・71は東側の造出周辺で採集されたもので、調査で確認することはできなかったが東側造出でも西側と同様に形象埴輪などをもちいた埴輪祭祀がおこなわれていたことを推測させる。

72～79は柵形埴輪の破片で、いずれも同一の型式と考えられる。おもに西側造出上面に設けられた第15トレンチで出土している。その断面形状は扁平な楕円形で、中央付近に近接する2条の突帯をもち、その上部には鋸歯状の大きな切込みがはいり、その下部には透孔をともなう第1段がある。72～75は鋸歯状の切込み部分の破片である。切込みの角度にはばらつきがみられる。76・77は第1段に同様の線刻がみられる。おそらく同一個体であろう。76によれば、断面形状がかなり扁平な楕円形となっていることがわかる。77では基部付近で製作台のものらしき痕跡がみられる。78は東造出付近で採集されたものであり、調査では確認されなかったが西側造出だけでなく東側造出においても柵形埴輪がもちいられていたことがわかる。79では基部と鋸歯状の切込み部分が確認できることから、柵形埴輪のおおよその寸法が類推可能である。

小結 埴輪の整理にあたっては、昨年度に報告した百舌鳥陵墓参考地に続き今回の報告においても同工品分析を試みた。同一製作者によって作られたと考えられる埴輪は以下のとおりである（【】内の埴輪が同一製作者によるもの）。

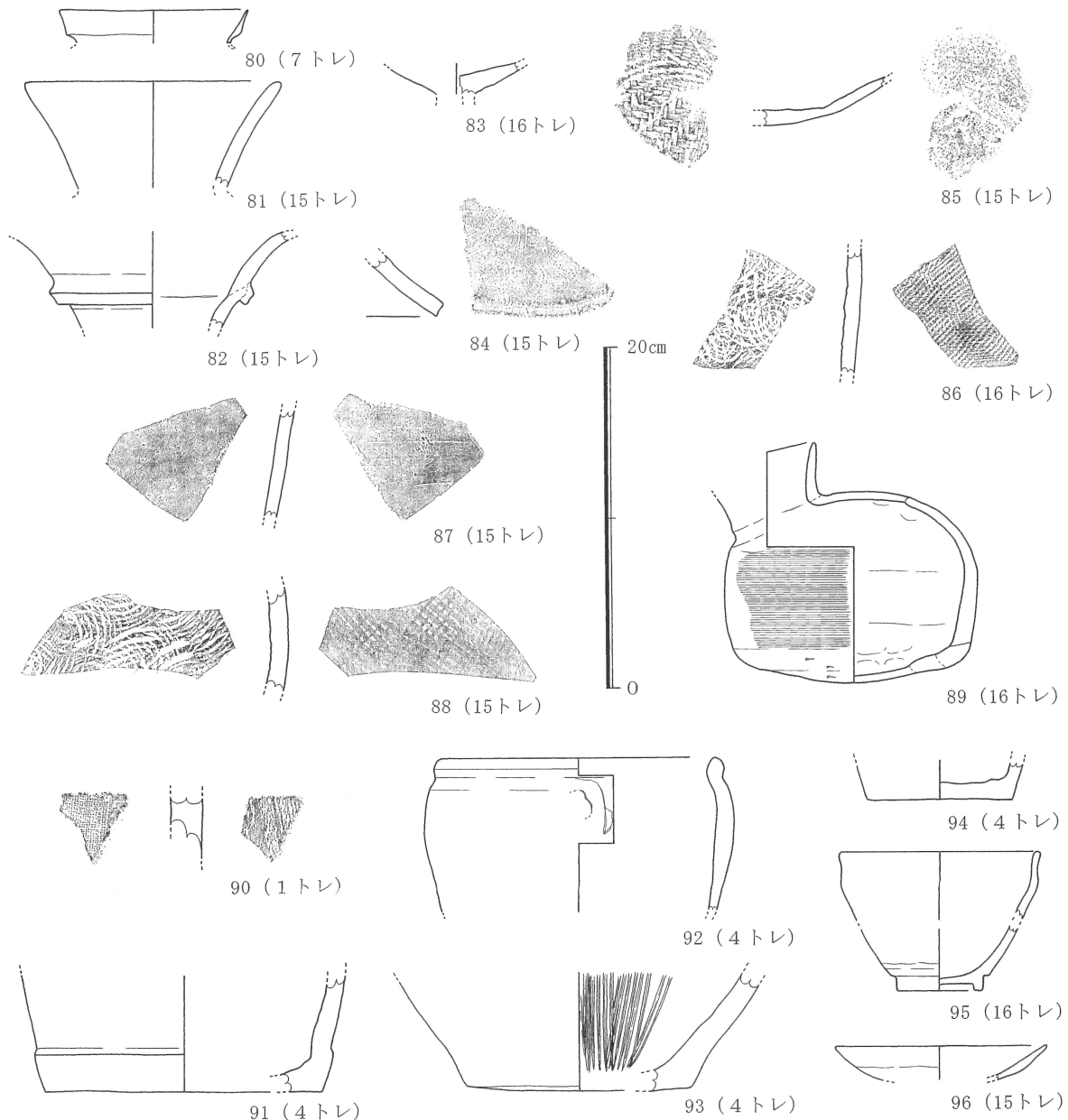
【1 (10 トレNo.4)、3 (15 トレNo.12)、4 (15 トレNo.5)】

【5 (1 トレNo.6)、6 (10 トレNo.2)、7 (1 トレNo.5)】

【13 (15 トレNo.19)、14 (1 トレNo.1)、15 (15 トレNo.18)、16 (1 トレNo.4)】

【17 (15 トレNo.10)、18 (15 トレNo.2)、19 (15 トレNo.13)、20 (15 トレNo.20)】

【22 (15 トレNo.4)、23 (15 トレNo.17)、24 (15 トレNo.7)】



第 31 図 小奈辺陵墓参考地 出土品実測図 (13) その他の遺物 (1/4)

これを見ると、同一製作者による埴輪は同じトレンチ内や隣同士など近接して配置されることもあれば、まったく異なる場所に配置されることもあったようである。同一製作者による埴輪と判断する要素は、焼成よりも前の製作段階における痕跡を手がかりとするので、そこから配置へといたるには焼成や古墳への運搬などで何回かの移動がともなったはずである。それにもかかわらずこのような状況がみてとれるということは、当参考地への埴輪生産にあたって一製作者がある程度継続的に一定量の埴輪を製作していたことを示すものと考えられる。なお、このような状況は昨年度に報告した百舌鳥陵墓参考地と同様である。

このことから、古墳における同一製作者による円筒埴輪のあり方は完全な窖窯焼成技術の導入直後である百舌鳥陵墓参考地と導入直前である小奈辺陵墓参考地ではあまり変化がなさそうであることがわかった。どちらの参考地も墳長が 200 m 程度の前方後円墳で、規模も同じであることから比較対象として問題ない。このことから、窖窯焼成技術の導入は畿内中枢における埴輪の生産体制にさほどの変化をもたらさなかった可能性も考えられる。しかし、仮にそのような変化があったとしても、それが埴輪自体や古墳における埴輪のあり方から読みとることが可能かどうかについては現状の調査状況では判断のしようがないともいえる。

本地における円筒埴輪の設置方法は、基本的に布掘状の掘方を持ち、内側も外側も土を充填している。第 1・

15 トレンチではさらに外側に化粧土状の墳丘盛土をおいており、結果的に、円筒埴輪は第2条突帯まで埋められていた。なお、例外として46の大型円筒埴輪は上に蓋形埴輪を載せていた関係で内側に土は充填されていなかった。また、第15トレンチの状況から考えて、家形埴輪や柵形埴輪については掘方をともなわず、墳丘盛土内に埋められていたとしても化粧土状の盛土をほどこすのと同時に設置されていたものと推測される。一方、第10トレンチでは化粧土状の盛土はなく、円筒埴輪も第1条突帯までが埋められていた。

最後に当墳丘の埴輪が示す時期について考えておきたい。当墳丘の埴輪は一部に窆窯焼成による可能性のあるものがある点、外面最終調整はB b種ヨコハケのものが多いが、B c種ヨコハケのものもみられる点などから考えて、須恵器でいうところの大庭寺段階～TK 73型式段階併行に位置づけられるものとする。佐紀古墳群東群のなかでは宇和奈辺陵墓参考地本地の埴輪よりも一段階古い時期に位置づけられる埴輪とみることができよう。

(2) その他の遺物 (第31図)

今回の調査では、西側造出上面に設けた第15トレンチを中心として築造時にともなうと考えられる土師器や笊形土器などが確認されている。また、墳丘築造時よりも新しい時期の遺物(須恵器・陶器など)もわずかに確認されているのでここで紹介したい。なお、これらの築造時にともなわない遺物の出土量はこれまでの陵墓の調査と比較するとかなり少ない印象をうける。本地ではその築造以降に人為的な活動があまりなされなかったものと推測される。

80～84は土師器である。80は第7トレンチの排水構内で検出されたもので、築造以前の遺物である可能性がある。甕の口縁部と考えられ、非常に薄いつくりである。81・82・84は第15トレンチⅡF区で出土したものである。81は直口壺の口縁部である。82は小ぶりな二重口縁壺の口縁部分の破片である。84は脚の破片であろうか。外面に線刻のほどこされている点に注意される。83は第16トレンチで出土した高坏の破片である。昨年度に報告した百舌鳥陵墓参考地と同様に、造出上面において埴輪だけでなく土師器も同時にもちいていることを指摘できる。

85は笊形土器の底部付近の破片である。内面には笊の圧痕が明瞭に残っているが、外面は摩滅しており不明である。

86～89は須恵器の破片である。86・88は甕の胴部の破片で、内外面にタタキにもちいた工具痕がみられる。87は内外面で工具痕がみられないが、奈良～平安時代の壺胴部の破片であろう。89は平瓶である。第16トレンチの葦石精査時に基底石付近で出土したものである。底部が平らになっていないことから、7世紀後半頃のものと考えられる。

90は飛鳥～奈良時代の瓦片である。内面には布目、外面には縄目が観察できる。

91～96は中近世遺物である。91は詳細不明であるが、江戸時代のものであろう。92は19世紀頃の行平鍋である。93は信楽産の播鉢で、17世紀前葉のものである。94は徳利の底部である。95は美濃もしくは瀬戸産の天目茶碗で17世紀後葉のものである。96はかわらけである。このように、中近世遺物については、特定の時代に集中する傾向もみられず、出土量も限られている。(加藤)

4 調査成果より

(1) 造出について

今回の調査では、造出に関わる所見を幾つか得ることができた。トレンチ内の情報だけでは限りがあることから、すぐに結論を示せるものではないが、ここでは調査時の所見に基づき若干の予察をしておきたい。

東造出上面の土層について 第5トレンチでは、葦石基底との関係や、わずかではあるが直上で遺物が出土したことから、V層上面が本来の造出上面と考えられる。しかし、この造出上面には築造後間もない時期の流土(Ⅳ)や、それが表土化した痕跡を示すような土層は確認されず、いきなり均質な盛土がなされたような状況を呈している。これは、Ⅱa層とⅡb層の間でも同じ様相である。一方、第5トレンチで検出された葦石のうち上部の範囲は直接表土(Ⅰ)に覆われていたが、これは浚渫土(Ⅱa)の上に堆積しており、

第1・10・15 トレンチなどで埴輪を直接覆う土層と一連である。よって、墳丘全体で確認される表土は、厳密には築造直後から形成された表土と、第5 トレンチに浚渫土(Ⅱa)が盛土されて以降に形成されたものが連続と重なっているといえるであろう。いずれにしても、第5 トレンチにおけるⅡb層は、築造後に行われたものとしては、もっとも早い段階の盛土といえることができる。

さらに、墳丘全体を見渡すと第1段テラス面のうち東側で等高線の乱れが目立ち、盛土が行われたと認められる。これらの盛土も、Ⅱa・Ⅱb層に対応するものである可能性が考えられる。第5 トレンチのⅡb層は遺物を含んでいないため時期が不明であるが、少なくとも盛土がなされる直前には、東造出上面に表土は形成されていなかったとみられる。自然に放置されていたとすれば、人為的に削られたのではない限り、表土がまったく形成されなかったとは考えにくい。そして、人為的に削ったと考えた場合にも、少なくとも葺石基底石の検出状況から、葺石基底レベル、つまり東造出上面を意識して、意図的に止めていたことが考えられる。トレンチ内の狭い範囲ながら、築造時の姿が維持される状態にあったことを推測させる。

一方、西造出では、第15 トレンチで埴輪列とそれに伴う大量の破片が面的に検出されていることから、東造出の様相とはまったく異なるといえる。墳丘全体で見れば、表土を含めた堆積土は薄い、築造後、自然な状態で時間が経過した様相が窺える。

土層の堆積状況からは、盛土直前まで東造出上面と葺石は見えるような状態で維持されていたが、その後放置期間を経ずに盛土がなされた。維持する必要がなくなったのか、維持する以上に盛土を優先すべき事態が生じたためか、その理由は不明であるが、盛土が墳丘東側に偏ることと関係するのかもしれない。墳丘そのものは傷みが少ないため、その後は大きな改変を受けることなく現在に至ったと考えられる。

当参考地は、法華寺の管理にあった時期があることから、このことと何か関係があるのかもしれないが、これまで述べてきたとおり、あくまで推測の域を出ない。しかし、墳丘の後世における利用や管理を考える手がかりになるかもしれないので、あえて少ない情報から、後世における改変ではない関わり方の可能性について考えてみた。類例の増加を俟ちたい。

東造出の埴輪列 西造出の埴輪列については報告のとおりであるが、東造出にも東北コーナーで確認される埴輪列から、区画が存在していたことはわかる。そして、濠側を南北に並ぶ埴輪列は東北コーナーの埴輪列の位置から考えて、既に失われていると考えられる。一方、墳丘側では造出上面が保存されていたことから、南北に並ぶ埴輪列が検出される可能性が高いと考えられる。しかし、第5 トレンチ内で埴輪列は検出されていない。少なくとも第5 トレンチ内を南北に並ぶ埴輪列はなさそうである。この理由はいくつか考えられよう。まず、埴輪の樹立間隔が開いているため、トレンチ内で埴輪が検出されないという可能性である。これは、他のトレンチで検出された埴輪列の事例から、トレンチ幅である1m以上樹立間隔が開いている可能性は低いと考えられる。もうひとつは埴輪列の区画が造出上に複数あり、第5 トレンチは区画と区画の間に位置している可能性である。その他にも可能性だけであれば想定が可能であり、ひとつの可能性に絞るのは難しい。当面は、西造出で平坦面の高低差こそあれ、平面的には少なくとも2つの区画が存在すると考えられるため、その状況を参考にすると、東造出についても複数の区画が存在する可能性が考えられる。第5 トレンチは、長大な東造出のほぼ中央に位置することから、埴輪列が検出されないのは、逆に埴輪列の区画が南北に分かれて存在する可能性を示唆しているのかもしれない。

造出の構造 造出の概要は、第5・15 トレンチの調査所見の前で述べているので、そちらを参照されたい。ここでは、造出における地山と盛土の関係について再度確認しておきたい。

本墳丘のほとんどのトレンチで明確な地山を検出していたことから、当初は第6 トレンチの床面に見られる土質の違いは、地山の種類の違いを示しており、すべて地山と考えていた。つまり、造出を含めて墳丘の第1段は、基本的に地山の削り出しによると考えられた。しかし、第14 トレンチでは、西造出と前方部の屈曲部から墳丘内部に潜り込むように約25度の傾斜をもって構築された葺石が検出されたため、造出のすべてが地山削り出しによるものではないことが判明した。この結果を受けて、第6 トレンチにおいても床面に見られた異なる土質の性格を探るため、土質の境界線から濠側に向かって断ち割りを行った。その結果、

墳丘側の混礫砂質土は約 30 度の傾斜をもって濠側に下る斜面になっていることが判明した。この斜面には葺石などは認められないが、直線的に下っており人為的な整形面と考えることが可能である。

このように、1) 第 14 トレンチに見られた西造出の中に埋没する葺石が存在する点、2) 第 6・14 トレンチともに、前方部葺石面のすぐ背後を直線的に土質の境界線が走り、造出の下に続く点、3) 第 6 トレンチでの断ち割りの結果、明瞭な傾斜面が検出され土質も截然と分かれことにより、人為的な整形面と考えることができる点、などから、第 6 トレンチにおける暗黄褐色粘質土も墳丘盛土である可能性が高いと考えられる。しかし、確証を欠くことから、本報告においては結論を保留して、VI a 層としている。灰色混礫砂質土は地山 (VI b) と考えてよからう。VI a 層を墳丘盛土と評価した場合、東造出は第 5・6 トレンチの様相から、大半が盛土で形成されていると考えられ、西造出は第 14・15 トレンチの様相から、大半が地山により形成されていると考えられる。東造出付近では、墳丘築造にあたり削り出しに利用できる地山の高まりがなかったためと考えられる、ということになる。(清喜)

(2) 墳丘の規模について

今回の調査で得られた知見により、当墳丘の規模を想定してみたい。

主軸上に設定した第 1・10 トレンチでは第 1 段斜面葺石の遺存状況は良好とはいえず、正確な傾斜角度は求められない。しかし、両トレンチを含め、各トレンチで検出された墳丘第 1 段斜面葺石や第 1 段斜面に関わる地山層整形面の傾斜角度については、およそ 25 度から 32 度までの範囲に収まるものとなっており、目安となる。第 2 段斜面について、検出している葺石の傾斜角度を度外視して主軸上での第 2 段の高さと斜面の水平距離を図上で計測してみると、後円部背面では高さおよそ 4.4 m、斜面水平距離がおよそ 8 m、前方部前面では高さおよそ 5.6 m、斜面水平距離がおよそ 10 m であり、いずれも傾斜はおよそ 29 度に復元し得る。こうしたことから、本来の斜面の傾斜角度は 30 度近くであった可能性が高いといえよう。

墳長を決定するには墳丘基底の位置情報が必要であるが、こちらも今回の調査では確実な位置を押さえることはできていない。そこで、造出周辺トレンチの所見から得られている標高 74 m という数値を目安とし、第 1・10 トレンチの断面図のうち第 1 段斜面の葺石面あるいは墳丘盛土面のうち現状でもっとも突出している箇所を接点として傾斜 30 度の直線を引いてみた。

第 1 トレンチでは、斜面上端付近で現状の傾斜変換線の 40 cm ほど外方を斜面想定線が走ることになる。大振りな石材 1 個分であるため、葺石の遺存状況からすると充分あり得るものといえよう。斜面下方では検出されている地山面とトレンチ北端からおよそ 1.3 m 南の地点で交差することになる。交差地点の標高はおよそ 74.5 m であり、目安としている 74 m より高いが、後円部背面という当墳丘でもっとも旧地形的に高いと想定される場所であることから、こちらも可能性は十分にあるといえよう。想定される墳丘裾は現状の墳丘裾よりもおよそ 3 m 北となり、第 1 段の高さはおよそ 2.7 m、第 1 段斜面の水平距離はおよそ 4.8 m となる。なお、トレンチ内の地山面は北端から南へおよそ 1.2 m 付近で若干の傾斜変換をしており、濠内側への斜面となっている。この地山の斜面が本来の墳丘裾付近の斜面を反映している可能性も考えられる。

第 10 トレンチでは、斜面上端付近において 60 cm ほど外方を斜面想定線が走ることになる。平坦面縁辺の礫敷きから斜面へと至る傾斜変換線部分には葺石材がほとんど遺存していない部分があることから平坦面の肩はある程度流出しているものと思われ、大振りな石を用いていることも考えれば、想定線の位置は、苦しいけれどもあり得ないものではないといえよう。斜面下方ではトレンチ南端からさらに 2 m 南の地点で標高 74 m ラインと交差することになるが、こちらは交差地点が陵墓地外となるため、地山面の状況は不明である。この場合、想定される墳丘裾は現状の墳丘裾よりもおよそ 3.5 m 南となり、第 1 段の高さはおよそ 3.9 m、斜面の水平距離はおよそ 6.7 m となる。

以上みてきたように、第 1 段斜面の傾斜角を 30 度、墳丘基底を標高 74 m と仮定した場合には、後円部で 3 m、前方部で 3.5 m の計 6.5 m ほど現状よりも長くなるので、墳長はおよそ 208.5 m に復元することができる。今回仮定した数値が多少出入りすることは十分考えられるので、当墳丘は本来 210 m を前後する規模であったといえよう。(有馬)

(3) ガウランド撮影の埴輪列の写真について

当墳丘の埴輪列に関しては、かつてガウランドが撮影した円筒埴輪の列立状態の写真⁽¹³⁾が知られている。その写真によれば、左から2本目の個体に鱗がついているように見え、さらに写真中央よりやや下付近に見える転落した埴輪片にも鱗がみえる。しかし、今回報告したように、当墳丘の第1段テラスおよび造出上面の埴輪列において鱗付円筒は確認されておらず、写真の円筒埴輪ほど直径も大きくない。さらに、写真では第3条突帯まで埋めていたようにみえる点も当墳丘とは異なる。また、写真のように崩落寸前の（あるいは時間の経過を考えればすでに崩落した）第1段テラスの埴輪列は当墳丘には存在しない。

これらのことから上記の写真は当参考地を写したものでないことは確実で、この写真を当墳丘のものとする上田宏範氏の見解は誤りであると考え⁽¹⁴⁾。鱗付円筒をもつことを考えれば宇和奈辺陵墓参考地が該当するのではないかと考える
(加藤)

まとめ

調査成果 墳丘第1段斜面～テラス付近の墳丘各所に18箇所のトレンチを設定して調査を行った。その結果、墳丘第1段テラスおよび造出上面において埴輪列を、第1段斜面、第2段斜面および造出上面の段差斜面において葺石を、前方部東側面において墳丘内から伸びる排水溝を検出した。これにより、墳丘第1段テラスは完存していること、長大かつ上面に段差を持つという造出の特異な形状の基本形が後世の改変によるものではないことが明らかとなった⁽¹⁵⁾。

埴輪列は一部を除いて布掘りの掘方を持っていたが、樹立後に化粧土的な盛土がなされており、墳丘上面では掘方を確認できない箇所もあった。埴輪は第1条突帯あるいは第2条突帯付近まで埋められていたことが確認された。造出上面のトレンチからは形象埴輪片も出土しているが、原位置を確定できるものはほとんどなかった。

第1段斜面の葺石については、長径15cm程度から30cm以上の石材を用いる葺石面の下に直径5cm前後の礫が敷き詰められており、2層構造をなしていることが確認できた。しかし、これが本来2重の葺石として設置されたのか、あくまで礫は基礎としての役割をもつだけなのかについては確定できるだけの材料はない。排水溝は前方部の構築途中に設置されたもので、その位置や傾斜角度から、墳丘内に染み込んだ水を墳丘下へ浸透させるためのものであったと思われる。

遺物は、墳丘築造当時の遺物としては埴輪（円筒・朝顔形・壺形・家形・蓋形・柵形など）がほとんどを占める。その他、わずかながら土師器（壺・高杯・笄形など）も認められる。また、第7トレンチ排水溝内からは墳丘築造中に入り込んだ土器片が出土している。墳丘築造後の遺物としては、古代や中近世のものがあるが、出土量はごくわずかである。

工法 当墳丘の整備工事にあたっては、掘削を伴わずにこれ以上の墳丘端部の崩壊を防ぐことができ、かつ、当庁の敷地内において完結させることのできる工法を採用する予定である。

具体的には現在も検討中であるが、基本的には、境界線内側に布団かごを置き、布団かごの背後に崖面保護のための良質土を積み上げ、その前面に土嚢を積み上げて保護材の流出を防ぐという、百舌鳥陵墓参考地に準じたものとなる予定である。

なお、布団かご等に用いる石材は当墳丘の葺石に使用されていないものを採用する予定である。

最終的な工法については工事実施時の立会調査の結果とともに来年度の本誌第63号において報告したい。

(清喜・有馬・加藤)

註

(1) 細井知名・細井知慎『元禄十一戊寅年諸陵周垣成就記』、正徳五年(1715)(有馬祐政編『勤王文庫』第3編山陵記集、大日本明道会、1921年、所収)。

『享保山陵調書』、成立年不詳。西尾市岩瀬文庫所蔵。

蒲生秀実『山陵志』、文化5年(1808)(有馬祐政編『勤王文庫』第3編、上掲書所収)。

など。

- (2) 谷森善臣『山陵考』(有馬祐政編『勤王文庫』第3編、註(1)上掲書所収)。
- (3) 「大阪府下宇和奈邊山御陵墓見込地ト被定」『帝室例規類纂』陵墓門 明治18年卷71 山陵1。陵墓課保管歴史的資料(737/A1)。
- (4) 『廟陵記』、成立年不詳(末永雅雄編『皇陵図集成』第8巻、青潮社、1982年)。
『山陵図絵』、成立年不詳(遠藤鎮雄編『史料 天皇陵』、新人物往来社、1974年、所収)。
- (5) 「明治二十六年中買上ニ係ル神功皇后御陵陪冢等三十六ヶ所主管向各部守長達方寮頭ヨリ申牒ノ件」『諸陵寮出張所 陵墓地録』明治29年。
- (6) 末永雅雄「宇和奈邊古墳群 二圓墳の調査」同編『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査抄報』第4輯、奈良縣、1950年。
- (7) 高島 徹「コナベ古墳」大塚初重ほか編『日本古墳大辞典』、東京堂出版、1989年。
森下浩行「コナベ古墳 [小奈辺陵墓参考地]」『大和前方後円墳集成』(『橿原考古学研究所研究成果』第4冊)、奈良県立橿原考古学研究所。
など。
- (8) 中井 公ほか「コナベ古墳前方部南外堤発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和54年度一』奈良市教育委員会、1980年。
- (9) 木下 亘・水野敏典「奈良市法華寺町 佐紀・盾列古墳群、松林苑 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1997年度 第1分冊、1998年。
- (10) 片山健太郎「コナベ古墳外堤・松林苑跡第97次調査」『奈良県遺跡調査概報』2008年 第3分冊、奈良県立橿原考古学研究所、2009年。
- (11) 註(8)に同じ。
- (12) 藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復原的研究—窰窯焼成導入以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』、第52回埋蔵文化財研究会実行委員会、2003年。
- (13) ヴィクター・ハリス・後藤和雄編『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社、2003年の27頁[3]の写真。
- (14) 上田宏範「ゴウランド氏の小奈邊古墳の調査について」末永雅雄編『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第4冊、前掲註(6)。

ただし、誤りであることを確認したのはあくまでこの写真についてのみであり、他の記述についても誤りであるのかどうかについては検討を要する。

また、「Cylinders in situ, Konabe」とキャプションのあるヒッチコックの写真も同様に宇和奈邊陵墓参考地の誤りであろう。なお、同頁にあるガウランドによる円筒埴輪の実測図は当参考地の第1段テラスの円筒埴輪としては大きすぎる。

上田宏範編『ロメイン・ヒッチコック—滞日二か年の足跡—』、社団法人橿原考古学協会、2006年の81頁図版12。

- (15) ただし、現在見られる墳形が築造当初からのものであると断じている訳ではない。第14トレンチで礫による下層の葺石が埋め殺されていたことから、墳丘本体と造出の一部とでは築造時に時間差が存在していたことを指摘することができるが、それが、全体を一体として築造していく上での工程の差によるものであるのか、墳丘あるいは造出の一部を含めて完成した後にある程度の時間をおいて造出の残りの部分が追加されたものであるのかを判断できる情報は得られていない。



1 第1トレンチ全景 (北から)



2 第5トレンチ全景 (東から)



3 第7トレンチ全景 (東から)



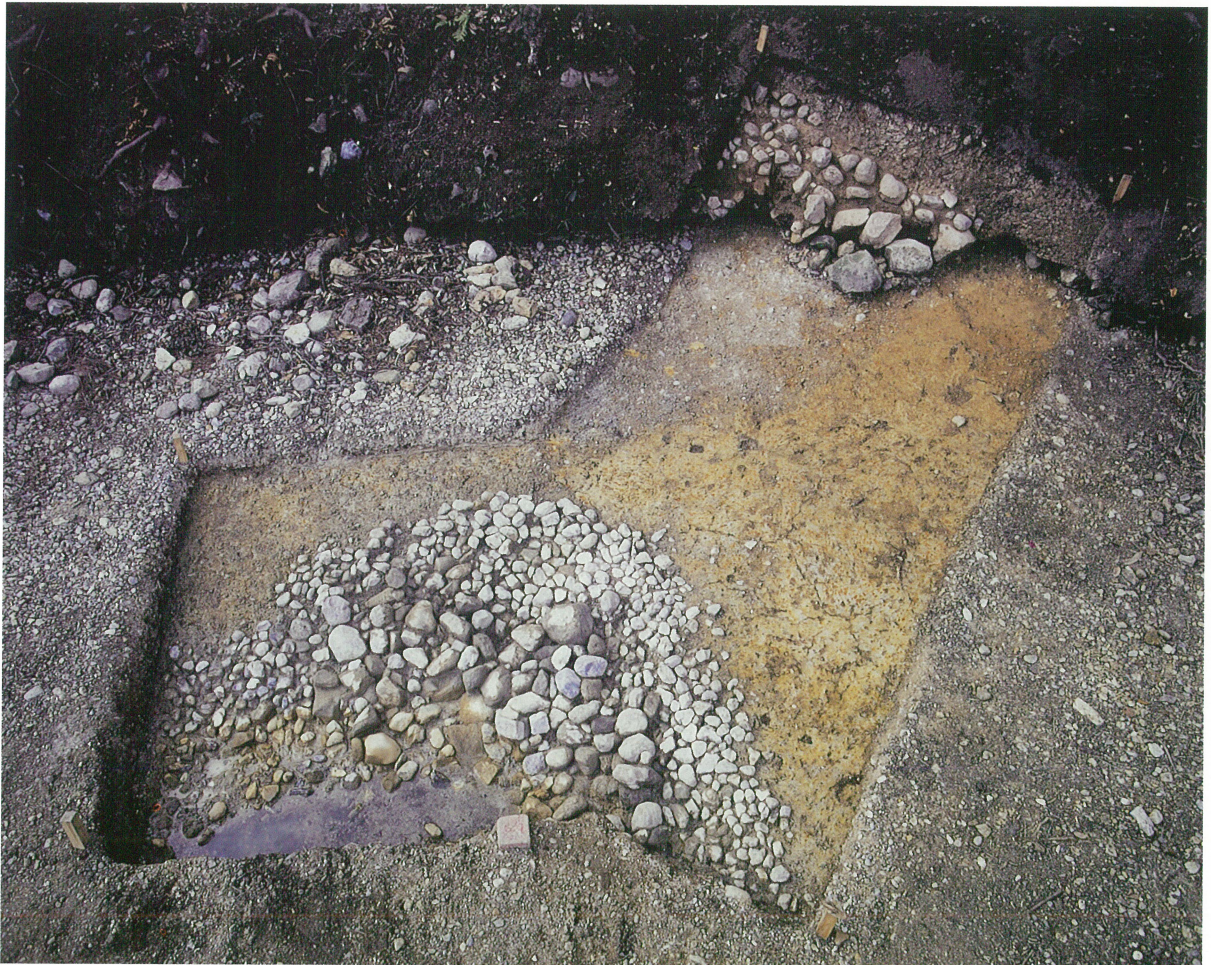
4 第10トレンチ全景 (南から)



1 第4トレンチ全景 (北東から)



2 第16トレンチ全景 (北西から)



1 第6トレンチ全景 (南東から)



1 第 15 トレンチ埴輪列検出状況（北東から）



1 第 15 トレンチ埴輪列検出状況（北から）



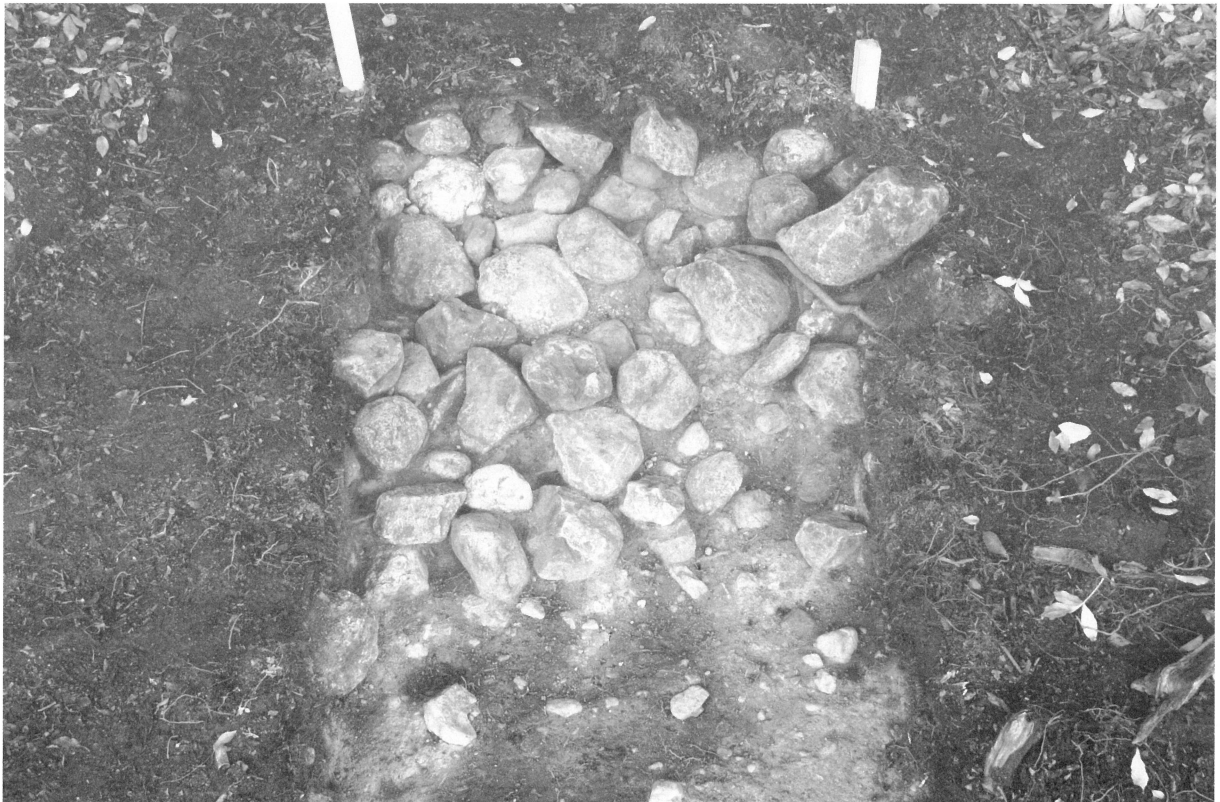
1 第 15 トレンチ埴輪列検出状況（西から）



1 第1トレンチ墳丘第1段斜面葺石



2 第1トレンチ埴輪列掘方掘削状況（東から）



3 第1トレンチ墳丘第2段斜面葺石



1 第2トレンチ全景（東から）



2 第3トレンチ全景（南東から）



1 第17トレンチ全景（西から）



2 第18トレンチ全景（北西から）



1 第4トレンチ第1段斜面葺石（上半部 北東から）



2 第4トレンチ第1段斜面葺石（下半部 北東から）

1 第4トレンチ
くびれ部第1段斜面葺石
(南から)



2 第4トレンチ
くびれ部最奥部(南から)



3 第4トレンチ
造出側斜面葺石(北から)





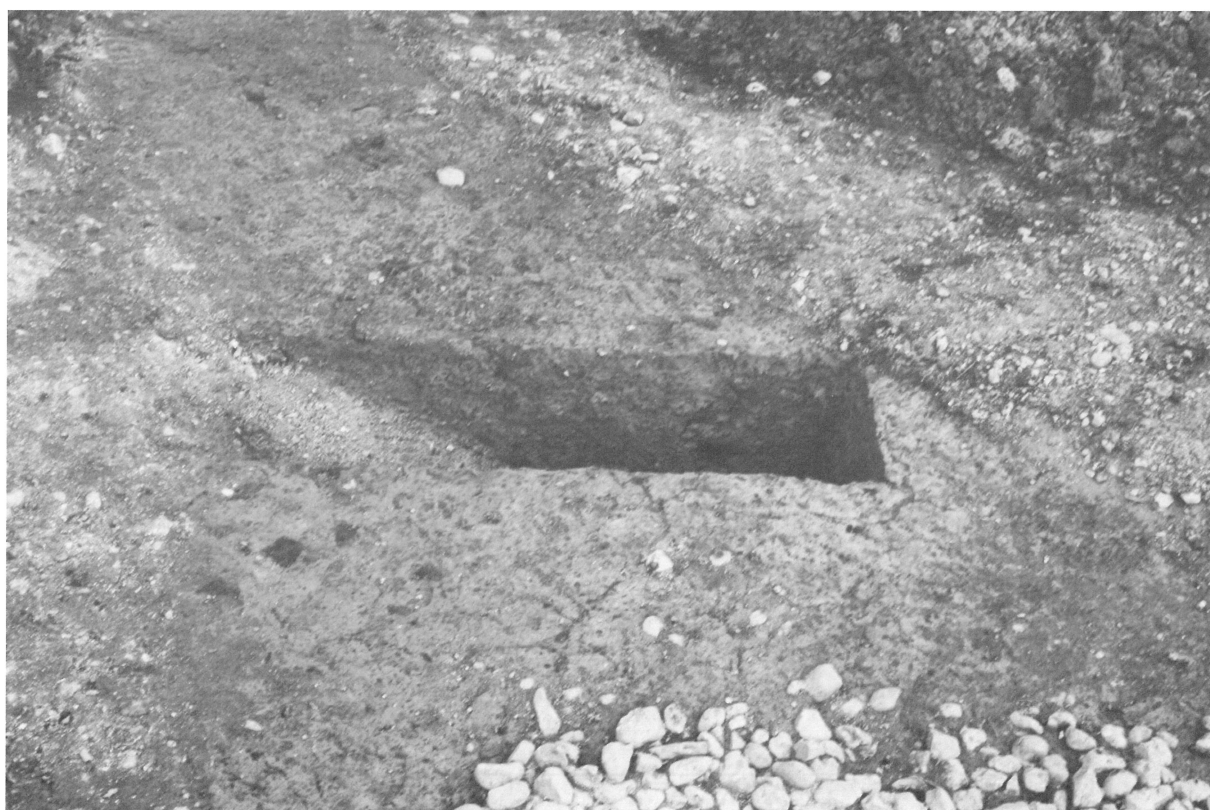
1 第5トレンチ第1段斜面葺石（東から）



2 第5トレンチ土層状況（東から）



1 第6トレンチ下半部（南から）



2 第6トレンチ断ち割り状況（南から）



1 第14トレンチ全景（南西から）



2 第14トレンチ葺石詳細（西から）



1 第15トレンチ埴輪片検出状況（北東から）



2 第15トレンチ埴輪片検出状況（北から）



1 第15 トレンチ埴輪列検出状況（東から）



2 第15 トレンチ埴輪列設置状況（北から）



3 第15 トレンチ埴輪列設置状況（東壁）



1 第15トレンチ大型円筒埴輪内部の蓋形埴輪（西から）



2 第15トレンチ埴輪列設置状況（北西から）



1 第15 トレンチ造出内斜面葺石および上段埴輪列
(北から)



2 第15 トレンチ完掘状況 (東から)



3 第15 トレンチ造出内上段埴輪列設置状況 (北から)



1 第16トレンチ墳丘第1段斜面葺石（上半部 北西から）



2 第16トレンチ墳丘第1段斜面葺石（下半部 北西から）



1 第16トレンチ
造出側斜面葺石(東半部)
(北から)



2 第16トレンチ
造出側斜面葺石(西半部)
(北から)



3 第16トレンチ
くびれ部最奥(東から)



1 第7トレンチ排水溝（東から）



2 第7トレンチ排水溝出水口（東から）



3 第8トレンチ全景（東から）



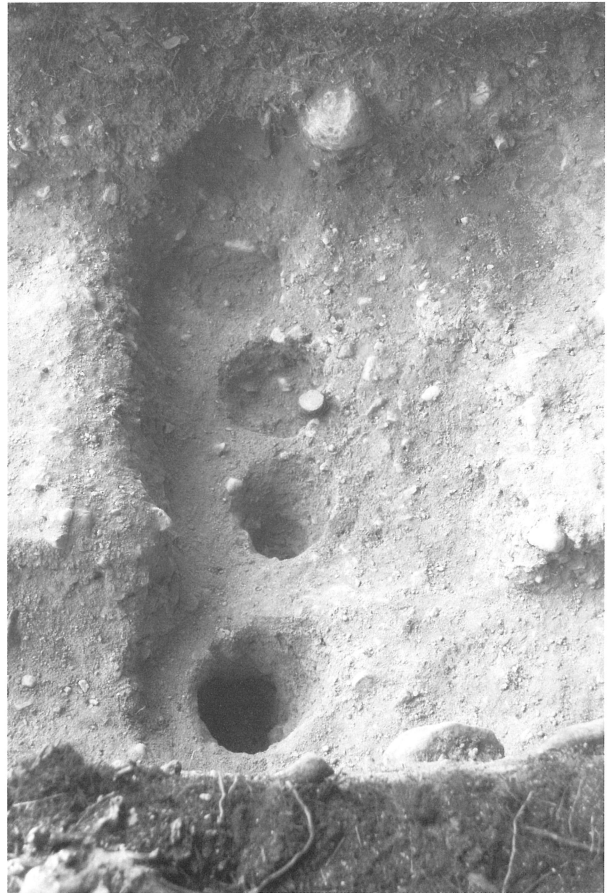
1 第9トレンチ全景 (南から)



2 第11トレンチ全景 (南から)



3 第10トレンチ埴輪列検出状況 (東から)



4 第10トレンチ埴輪列掘方下土坑 (東から)



1 第10トレンチ第1段斜面葺石（南から）



2 第10トレンチ第2段斜面葺石（南から）



1 第12 トレンチ全景 (南西から)



2 第13 トレンチ全景 (北西から)



1



3



4



8



11



12



13



14



15



16



17



20



23



24



25



26



29



30



34



40



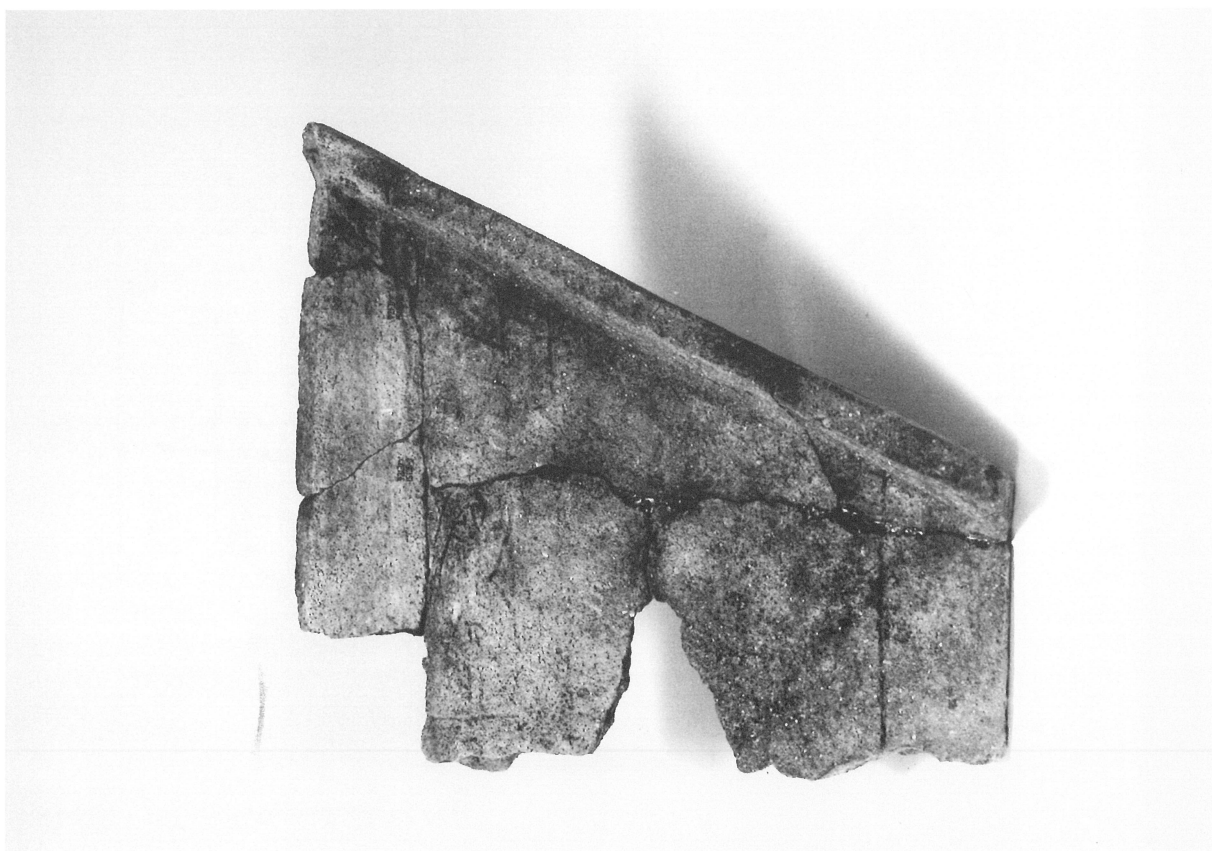
41・42



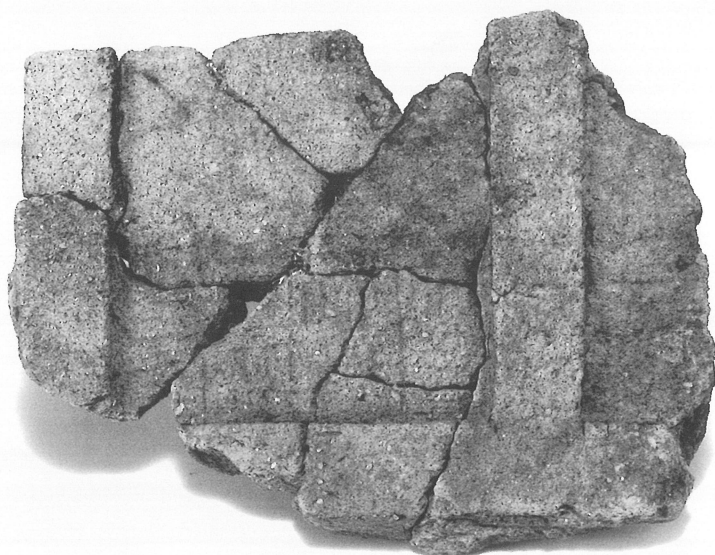
58~61



46



67



68



69